
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ ヴァルキュリアの血を引く者 ~

eagle

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜ヴァルキュリアの血を引く者〜

【Nコード】

N4694R

【作者名】

eagle

【あらすじ】

時空管理局には【白い魔王】や、【金色の死神】等と呼ばれ、犯罪者達から恐れられている魔導師がいる。

しかし、この時空管理局にはそれをも超える最強魔導師がいる。

犯罪者達はその名を聞くだけで恐怖に震え上がり、管理局所属の魔導師は絶賛する。

その名を…

【緋色の雷／紺碧の破壊者】

“Thunder of scarlet/Azure of breaker”

こと時空管理局本局所属特別捜査官ロンメル・ヴェストール一等空尉だ。

実は彼は第97管理外世界【地球】出身であり、太古の昔に滅んだとされたヴァルキュリア人とダルクス人の血を引いていた！

駄文です。

厨二です。

オリ主チートです。

更新遅いです。

戦場のヴァルキュリア3の要素が入ってます。

「」は普通の会話

《》は通信時及びデバイスの会話

【】は固有のもの名前

になります。

誤字脱字があったらどんどん言って下さい。

感想も待ってます！

第0話 紺碧の破壊者(前書き)

初投稿です！

第0話 紺碧の破壊者

新暦74年12月某日

side???

第246管理外世界にて、1人の時空管理局所属の魔導師が空を駆けている。見た感じでは17、8の少年のようだ。

肌は白く、髪は暗めの青で肩の下まであり、後ろで赤のラインの入ったリボンで結んでいる。眼は鋭く顔は小さめ。身長は170?程で痩せている。

バリアジャケットは白いYシャツに黒いジーンズ、黒のジャケットを身に付け、軍隊などが用いるようなブーツを履いている。

「なあシルフ、後どれ位で殲滅対象と接触するんだ?」

今回のミッションの殲滅対象はガジェット?型でらしい。

《今の調子でいけば後3分、距離でいえば3000という所でしようか。数は…500です》

「ありがとシルフ、助かる。

おっと、噂をすれば敵発見!それじゃ一気にかた着けるぜ!」
「Va
r」>ヴァール<set up...」

《Yes my master .
Standby ready set up .》

首に掛けられているペンダントに付いている翼を象った無色透明のクリスタルが一瞬だけ白く輝き、少年を光が包む。

光が消え、そこに現れたのは先ほどの少年だったが、服装がまるで違う。

上半身に青く滑らかな曲線を持ち、赤のラインが所々に入ったアーマーを装着している。そして一際異彩を放つのは、自らの身長を優に越す巨大な武器を両手で持っている。銃身が180?、口径に至っては10?はあるだろう。更に、その銃身の下にはそれよりも長い2m程のブレードも付いている。

「リミットブレイク！紅き制裁の雷を持って闇よ爆ろ！全撃絶中！オープンファイア！！」

《Limit break . First gear . Enemy lock on Open Fire!!》

キュイイイイン

無機質な声が響き、銃身に紅い紫電が走る。そして銃口に円環ができ、光が集まる。一際明るくなった瞬間、

ドゴオオオオオン

爆音と紅い閃光と共に、其処から数多の魔力砲撃が炸裂する。そして、その先にいるガジェット共を一掃した。

《全弾目標に命中、敵反応なし。ミッションコンプリートです。》

「了解。んじゃ、帰投するぞ〜。」

side out

side はやて

《ドゴオオオオン……》

「……………何や今の……？」

モニターいっぱい映ったガジェットが一瞬で消えよった……。なのはちゃんは啞然としとるし、フェイトちゃんに至っては顔を真っ青や。

「ねえフェイトちゃん、このミッションやってるのってヴェストール君だよね……？」

「う、うん。そうだよなのは、ロンだよ……。」

「何や、もう凄いやと言ってるようなスケールとちゃうで……。リミットブレイクした時のデアボリック・エミッションよりも威力が遙かに上や。」

「それではやてちゃん、ヴェストール君はどうするの?」

「そんなの決まってるやん。勿論、誘うで。彼ならこの話に乗ってくれる筈やもん。」

「そうだねはやて、きっと大丈夫だよな。」

そう、ヴェストール君はきっと来てくれる…。きっと……。

この機動六課に……。

side out

side ヴェストール

ふい〜。終わった終わった。さっさと帰ってアイスた〜べよつと。やっぱり疲れには甘い物が一番でしょ?

《その前に報告書作って事後報告しないとダメですよ。マスター、わかっていますか?》

何っ!?! ヴァールが俺の心の声を読んだだど?

《いや、声に出して言っていましたよマスター。》

まさかのシルフまで…。まあ、いっか。シルフに関しては何時もの事だし。

「でも俺にしたら報告書くらい朝飯前だぜ！」

《そう言えばマスターはデスクワークが得意でしたっけ？忘れてました。》

ヴァールよ、自分のマスターの事くらい把握しとけよ…。

さてと、早く帰ろう。

s i d d e o u t

第0話 紺碧の破壊者（後書き）

ヴ《ヴァールと》

シ《シルフの》

ヴ・シ『後書きトークショー！』

ヴ《ついに始まりました、【魔法少女リリカルなのはStrike
rS】ヴァルキュリアの血を引く者！】イエーイ！》

シ《タイトルが長ったらしいわね…。》

ヴ《いきなりの駄目出し！？シルフ、それはきついよ！作者これでも頑張った方なんだから、誉めてあげなよ。可哀想だよ。》

シ《ヴァール、そんな甘い考えじゃ駄目ですよ。もっとキツく言わないと、作者がだらけて更に酷くなりますから。》

ヴ《そ、そうなんだ。アハハー…。》

まさかここまで心が折れてからの登場とは……幸先悪いです。作者のeagleです。

シ《せいぜい頑張ってこれ以上質を落とさないようにしてください。》

…精進します。

ヴ《まあまあ、シルフもそこまでにしてあげなよ。》

シ《そうですね。これくらいにしておきましょう。》

ありがとうございます。これを糧にして頑張りです。

ヴ《それじゃ〜次回予告いってみよう!》

シ《ミッションを終えて本局に戻って来たヴェストールに、なのは、フェイト、はやての3人が機動六課へスカウトしに来た。ヴェストールの答えは?そして空港火災の時の事も…?》

次回魔法少女リリカルなのはStrikerS〜ヴァルキュリアの血を引く者〜第1話【緋色の雷】》

ヴ《紅き雷は闇を討つ…。》

第1話 緋色の雷（前書き）

第1話です。

oppのイメージは鋼の錬金術師のスキマ・スイッチの「ゴールド
タイムラバー」です。

第1話 緋色の雷

sideヴエストール

《…これで全て終了です。マスター、お疲れ様でした。》

「ふひゅ〜。やっと終わった〜！遂にアイスを食べられ…」

そう思つて冷凍庫に手を伸ばしたら…

《連絡します。ロンメル・ヴエストール一等空尉。至急総務統括官室まで来て下さい。》

…ねえ、これは俺に挑戦してるのか？してるんだよね？

「……」

《マスター、呼び出し掛かって、ひいひい！！》

《ヴァール、マスターがどうし…。マ、マスター。どうされたのですか？》

「…リンディさあ、アイスの恨みは高く付くぜえい。覚悟して下さいねえ〜。」
Strike ShyIphed set u
p

《Y、Yes my master。》

《…マスターの眼が逝ってる…。リンディさん、私はあなたの無事を祈る事しか出来ません。》

「負腐怖不討ふフ…!!」

s i d e o u t

s i d e リンディ

今、私の前にはやてちゃん、なのはちゃん、フェイト がいるんだけど…。

「今日はみんな揃って、私に何か頼み事？」

「うん、新設部隊の事何だけど…。」

「スカウトしたい人が一人いるんですが…。」

「別に大丈夫よ。それで、誰なの？」

「えっと…ロンメル・ヴェストール一等空尉です。」

「分かったわ。ちょっと待ってて。ヴェストール一等空尉呼んでくれる?」

「了解しました」

「…うん、これで大丈夫ね…。」

丁度近くに補佐官がいてよかったわ。

「すみません。何から何まで有り難う御座います。」

「いいのよ別に。何せ愛する我が娘の友達の頼みなんだから、気にすること無いわよ。」

「母さん…「リンデイさあん!」…へっ!?!」

あっ…!失敗したわ…。

「…シルフ、ぶち抜けえ!」

《Strike Breaker》

ヒュイイイイン

「ストライクううー!…」「マズいわ!みんな、隠れて!」
「ブレイカアアアアアア!…!」

ズゴゴゴゴオオオオン!!!

パラパラ…

「ケホツ…みんな、大丈夫？」

「私は大丈夫です。」

「私もです…しかし、何が起きたんや！？壁に大穴空きよるし。」

「は、はやて…、あ、ああれ…。」

「ん、どうしたんフェイト…ト…ちや……ん…！」

ああ…やってしまったわね…。はやてちゃんとなのはちゃんは腰を抜かしちゃったし、フェイトに至っては顔真っ青で震えてるわね…。

はあ…どうしましょう？

sideフェイト

何？何が起きたの？いきなり母さんが「隠れて！」って言ったら、この部屋の壁に大穴が空いて……っ！

「は、はやて…あ、ああれ…!!」

誰がいる!しかも何か構えてこっちに近づいて来る!怖い、こわい
コワイコワイ!

誰か助けて!

side out

side ヴェストール

「負腐怖不討ふフ…!」

やっと着いたぜえい【総務統括官室】に。

《マスター、冷静になりましょうよ……。》

何を言っているんだいシルフ?こつ見えて僕は意外と落ち着いてる
んだぜえい。

つてな訳で、初めに…

「リンディさあん!」

覚悟して下さいねえ？

「…シルフ、ぶち抜けえ！」

《Strike Breaker》

ヒュイイイイン

さあ、アイスの恨みを受けて下さい！

「ストライクううー…‥‥ブレイカアアアー」

ズゴゴゴゴオオオオン

さて、お次は何にしよう…‥‥か…‥‥！

「あ、あれは…！！」

俺の目線の先には…

店名が31なのに実際は32種類のアイスを取り扱っている店のク
ラナガンの店舗限定発売のアイスクリームではないか！
一体誰がこんなに素晴らしい物を…？

…‥‥‥‥？

はっ…！俺は今まで何を？壁に大穴が空いてるのは何故？そして、

何故俺はシルフを展開しているんだ！？
俺は直ちにシルフを待機状態にし…、

「リンデイさん！すいませんでした！！」

謝罪した。

《あのマスターを正気に戻すとは…。アイスよ、君が恐ろしいです。》

この世においてアイスに勝るモノはなし！

俺の格言？

「…ロンメル・ヴェストール一等空尉。あなたに來客よ。後、その壊した壁を直しておきなさい。いいわね…？」

リンデイさん…怖いです。

で、俺に來客とは…？

「…まさか登場まで常識から逸脱してるとは…」

「…もう何でも有りなんだね。」

「ロン…怖かったよ…。」

はやてさん・なのはさん・義姉さんでした…。

皆さん、迷惑掛けてすいません…。

「それで、俺に用事とは？あつ、そのアイス下さい。」

「う、うん。ええよ別に。それじゃ、本題に入るで。」

「来年度から新設部隊が出来ることは知ってる？」

「はい、リンディさんから少し前に。確か、はやてさんが部隊長の所で、試験的やるということで1年だけでしたよね？」

「うん、そうだよ。それで率直に言つと、ロンに入って欲しいんだけど…」

「いいかな…？」

なんとまあ凄い事でしょう。管理局のエースの3人から新設部隊へのお誘いとは…。

「それに、ロンは教導官になりたいって母さんから聞いたから、なのは教えてもらえるとと思うよ？」

…なんと有り難い事か。俺にとってはいいこと尽くしじゃないか！これはもう断る事なんて無いな。なので…

「喜んでその話、お請けいたしますー！」

side out

s i d eなのは

∴ ヴェストール君はなんでもありなんだと思うの。

部屋の壁に大穴空けて入って来たと思ったら、リンディさんに謝って、話を聞いている時にアイス食べてるし。しかも持って来たもの全てを…。

∴ でも、一番印象強かったのは空港火災の時だね。

s i d e o u t

s i d e ????

新暦71年4月29日
ミットチルダ近郊

臨海第八空港

「ケホツ…ギンねえ…どこなの…グスツ…わたしをおいてかないでよ…」

炎に包まれたフロアに一人の少女が取り残されていた…。

「グスツ…いたいよ…」

辺りを見回しても見つけないことは出来ない。

「もう大丈夫だよ。」

不意に少女に声が掛かった。

「ふえ…」

顔を上げると、其処には白と青の服に身を包み、赤い玉の付いた杖【レイジング・ハート】を持っている女性…「高町なのは」が立っていた。

「お名前は？」

「スバル…。スバル・ナカジマ。」

「スバルちゃんって言うんだ。…いい名前だね。」

泣いているスバルに対して、なのはは優しく、包み込むような声で

話す。

「安心して。安全な所までいくよ。」

そうやってなのははレイジング・ハートを構えよつとする。

ギギイイイ…

銅像から金属の軋むような音が聞こえ…

バギン

「へ………!!」

真下にいるスバルとなのははに落ちてきた。

なのははラウンドシールドを張って落ちてくる銅像に備えた

しかし…

それは落ちてくることは無かった。

「シルフ！ロードカートリッジ!!」

《Strike Breaker》

「絶対撃中！ストライクラー…ブレイカァァー!!」

ズゴゴゴオオオン！

銅像は赤い光に吞まれ、なくなった。

「ふい〜…。危ね危ね。それよりも、2人とも大丈夫ですか？」

黒いハンドガンを構えた少年「ロンメル・ヴェストール」が2人を救ったのだ。

「は、はい！大丈夫です。」

「良かった〜失敗しなくて…。」

《少なくとも、マスターが失敗する事は、天変地異が起きても有り得ません。》

彼が構えていた「シルフ」と呼ばれた黒いハンドガン【ShyIp head】（シルフィード）が、淡々と語る。

「そりゃどうも。さて、こんな所で無駄話してないでさっさと終わらせるか。シルフ、一気に行くぞ！ロードカートリッジ！」

カシユンカシユン

シルフから二本の薬莖が排出される。

「貫け！エリシオン…！」

キイイイイン

赤い円環と共に緋色の光が銃口の先に集まり

「…バスター!!!」

ドオオオオン

爆音と共に緋色の奔流が一直線に延び、天井から闇に包まれた夜空を覗かせた。

「よし！非難経路を確保！早くその子を安全な所へ…！」

「う、うん！有り難う、助けてくれて。」

「別に気にする事は無い。当然このことをしたまでさ。」

「いや、この事はお礼は絶対するよ。あっ！そうだ、名前は？」

「時空管理局本局所属ロンメル・ヴェストール、二等空尉だ。こいつは俺の相棒、シルフ。」

《どうも。シルフィードです》

「そう…私は時空管理局本局所属高町なのは、同じ二等空尉だよ。こっちはレイジング・ハート」

《初めまして》

「了解。じゃっ、また何時かな…。」

「うん！また何時か…。」

そう言って2人は別々の方向に消えて行った。

s i d e o u t

第1話 緋色の雷（後書き）

シ《シルフと》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ《後書きトークショー！》

ヴ《今回も始まりましたこの後書きトークショー。さてさてシルフさん。今回の感想は？》

シ《…酷いわね。》

ヴ《なんと、前回と立て続けにダメ出し！シルフさん厳しいです。作者は既に泣いています。》

前回と同じようにダメ出しされて、心がぐちゃぐちゃな作者の e a g i e です。

シ《こんな事で泣くなんて…。心が弱い証拠です。》

そんなこと言われても…。

ヴ《シルフ…。少しは褒めてあげなよ。 作者が可哀相だよ。》

…有り難うヴァール。君だけが俺の見方だ…。

と言うのは置いといて、主人公のプロフィールを考えて来ました！

名前

ロンメル・ヴェストール

出身地

第97管理外世界【地球】スイス

官位

一等空尉

所属

時空管理局本局所属特別捜査官

ランク

魔力量：S+

空戦：SS

陸戦：SS-

魔力光：緋色

デバイス

シルフィード

ヴァール

どちらもインテリジェントデバイス

容姿

身長181?

体重67?

髪は青く肩下まである。基本的に後ろで束ねている。

眼は赤

肌は白い

痩せている様に見えても筋肉はかなりにある。

(簡単に言くと、戦ヴァル3のイム力を男にして一回り大きくした感じで眼の色だけ赤に変えた様なもの)

…ここら辺までですかね。

シ《あなたにしては結構しっかり考えたんですね。》

ヴ《シルフ、言葉キツいよ》

でも褒めてくれたので大丈夫です。

それじゃあ次回予告。ヴァールよろしく！

ヴ《はいはい。》

時は飛び、翌年。

フェイトちゃん、なのはちゃん、はやてちゃんの誘いに乗ったヴェストールは、3人と一緒に新人の試験を監督する事に。
その試験に出る新人とは…

次回 第2話 新しい翼《

シ《紅き雷よ、闇を討て…。》

第2話 新しい翼（前書き）

遅れてすみません。

第2話です。

第2話 新しい翼

side???

新暦75年某日

ミットチルダ某所の廃ビルの屋上

そこには2人の少女の姿がある。

一人は青い髪をショートカットにして、足にローラー、手にグローブらしきデバイス着けて、なにやらウォミングアップをしているのは【スバル・ナカジマ】

もう一人は、オレンジの髪をツインテールにしており、こちらは自身のデバイスを点検しているのは【ティアナ・ランスター】

「スバルー。あんまり暴れてると、試験中にそのオンボローラー逝っちゃうわよ」

「ティアア〜！嫌な事言わないでー！ちゃんと油も挿して来たー！」

…実は、彼女達は訓練校の時から、部屋も、部隊も、ずっと一緒にやって来た仲である。

ティアナが開いたウィンドウがちょうど07:00を回った時、10歳程の少女が映った巨大なモニターが2人の目の前で展開した。

《おはようございまーす！早速、今回の魔導師試験の受験者の二名は揃ってますか？》

『はい!』

モニターの少女の問いに、2人は答える。

《それでは、2人の確認を執りますねー。陸士386部隊所属スバル・ナカジマ 二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士ですね?》

「「はい!」」

スバルは勢い良く、ティアナは若干緊張気味に返事をする。

《お2人の所有するランクは陸戦Cランク。今回は陸戦Bランクへの昇格試験で間違いありませんね?》

少女の質問に

「はい!」

スバルが返事をし…

「間違いありません!」
ティアナが応える。

《それでは、本日の試験官を勤めます、リイン・フォース・? ツ
ヴァイ 空曹長です。よろしくですよー!》

モニターの中のリインは可愛らしく敬礼する。

『よろしくお願いします!』

それに対してスバルとティアナは、リインは上官の為、礼儀正しい敬礼する。

そして、その様子を上空から傍観している女性がいた…。

「うん！リインはちゃんと試験官出来てるみたいやな」

「はやて、ドアから見るのは危ないからこっちに戻ってきなよ。一応モニターでも様子は解るんだし…」

何やら満足そうな様子で、ヘリから下を覗いている「八神はやて」特別捜査官と、ヘリの座席に座ってははやてを落ち着かせるように話している「フェイト・テストロッサ・ハラオウン」執務官がいる。

はやてが座席に座り、フェイトがウィンドウを次々と展開させ、様々な情報を開く。

「この2人がはやて の見つけた娘達？」

「うん。この2人、なかなか伸びしろがありそうやろ？」

「そうだね。今日の試験の結果で、このまま行けそうなら正式に引き抜き？」

「いや、基本的になのはちゃんに判断をお任せしとる」

「そっか。でも、ロンの反応も左右されるかも…」

「ふふ、それはどうやるね。まあ、この部隊に入れば、なのはちやん直属の部下であり、教え子やし」

ちょうどその頃…

そこから少し離れた所にある廃ビルに2人の男女の姿が見える。

《コース周辺の生態反応、危険物反応、共にありません》

「ありがとうレイジング・ハート。さて、監視用サーチャーの設置完了。そっちは？」

「こっちも障害用オートスフィアの設置完了です」

「ありがとう。ヴェストール君、シルフィード」

《私も頑張ったです〜！》

「そうだった、ありがとうヴァール」

2人は、展開しているをウィンドウを操作している。

《では、私達は万が一の為にゴール地点に先回りしてます》

「それもそうだな……。どうせだから、あの2人と併走する感じでない。良いですよね？なのはさん」

「うん、じゃあお願いするね」

「ついでに、サーチャーの回線もこっちに回して下さい。そいじゃあ行くぞ！シルフ、ヴァール、Set up！」

『Yes my master. Stubby really, set up.』

ヴェストールはデバイスをセットアップして、空に飛び上がる。

「了解。私達は全体をみていようか」

《Yes my master》

場所は戻って廢ビルの屋上

《2人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。あっ！勿論破壊しちゃダメなダメージターゲットも在りますからね》

次々とウィンドウが2人の前に展開していく。

《妨害攻撃に気を付けて、ターゲットを全て破壊。制限時間内にゴールを目指して下さいです。何か質問は？》

一通り説明が終わり、ラインの問いかけに…

「えっと…」

スバルは何かを考えてながら、ティアナを見る。対してティアナはそんなスバルと目が合って、一瞥してから目を逸らし、

「ありません！」

と返す。

その後スバルも

「ありません！」

と返した。

《それでは、スタートまで後少し、ゴール地点で会いましょう！ですよ》

ラインが映ったモニターが消え、変わってスタートまでのカウントをするウィンドウが展開された。

これを見て2人はスタートの体勢になる。

「レディー…」

ティアナが合図をし、

ウィンドウに Start の文字が表示されると共に、

『コー！』

2人の試験の幕が上がる。

ちょうどその頃…

ヘリ内部

「おお！始まった始まった」

「お手並み拝見っ」と

はやてとフェイトはモニターに映し出された2人を見つめる。

side out

sideヴェストール

コース付近上空

《マスター、遂に始まりましたよ》

「そうだな。ヴァール、視力強化を頼む」

《がってんしょーちー！！》

サーチャーから送られて来る映像と、ヴァールによって視力強化された自らの眼で傍観する。

「さてさて、如何程の実力か。見極めさせて戴くよ」

と言うわけで、少し時間が飛ぶ

《どういう訳か分からないですよマスター……》

…ヴァール、地の文に突っ込んだじゃダメだよ…

気を取り直して、

2人はスタートからずっと順調に進んで来た。

特に、3つ目のポイントでは、ティアナのデバイスを圏に使い、そこに幻影魔法のの掛かったスバルが突撃。しかしそれも圏で、本当の目的はティアナのマルチショットによる一掃であった。

こうして無事に最終関門にいける。

…はずだった。

破壊し損ねたオートスフィアがスバルを狙っていた。ティアナはそのスフィアを破壊したが、サーチャーが流れ弾にあたり、画面が砂嵐に。

まあ、今の俺は視力強化した 眼 が有るから気にしないけど…。

サーチャーがその様子を捉えていた時、ティアナは足を何かに引っ掛けていた。足が変な風に曲がったのは…気のせいか？

現在、ティアナとスバルはスタート地点のビルの屋上から少し離れ

た高架の瓦礫の影に隠れている。
位置は最終関門の中距離狙撃型の大型オートスフィア。

暫くしてティアナが出てが出てきた。

《マスター、出て来ましたよ》

「ああ、そのようだな…」

でも、なんか変な感じがすんな…。何故だ？

そして、オートスフィアがそれに気づき、ティアナをロックオン。
砲撃をして…

ズドオオン！！

「直撃！？」

《いえ、違うみたいです。ほらまた》

シルフに言われ、また高架に視線を移す と、またティアナが出てきた。

しかもスフィアの砲撃を走りながら回避している。

「高速回避か？…いや、違う。…もしかしてこれって…」

《マスター。やっと分かったみたいですな》

《このティアナは囃。しかも幻術魔法を使った高等技術です》

シルフとヴァールに言われてやっとその理由が分かった。

ティアナは魔導師の素質が高いなあ…

幻術魔法のコツを教えて欲しい！とこの時思ったのは言わないで置こう。

side out

41

sideスバル

《フェイクシルエツト。これ、メチャクチャ魔力喰うのよ。長くは保たないんだから、一撃で決めなさいよ！でないと2人で落第なんだから…！》

「うん…！」

ティアナから念話が飛んでくる。

私は、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃もない。

出来るのは、全力で走る事とクロスレンジの一発だけ。

だけど、決めたんだ！

あの人達みたいに、強くなるって！

誰かを、何かを…

「守れる自分になるって！」

自分の拳に思いを込めて、その全てをこれにぶつける！

「ウイングウ…ロオード…！」

side out

side???

スバルは魔力を込めてリボルバーナックルでビルの上を殴りつける。すると、そこから青く光る道がオートスフィアのあるビルの上にぶつかる。

ローラーブーツに魔力を込めて、クラウチングの体勢になる。

《行って！》

ティアナからの念話を合図にリボルバーナックルのカートリッジをロードする。

「いくぞおおー！！」

その体勢から一気にウィングロードを駆け抜け、

「でやあああー！！」

ドゴオオン！

ビルの壁をぶち壊して中に入る。

大型オートスフィアがそれを感知するが、スバルは砲撃される前に、間合いを積み、

「うおおおおー！！」

ガギイイイン！

リボルバーナックルの回転速度を上げて、スフィアのバリアに叩き付ける。

「ッ！ヤアアアアア！！」

更にカートリッジをロードして回転速度を上げる。

そして、バリアに指が食い込み、

「ハアアア…でやっ！！」

そのまま破った。

オートスフィアのに攻撃にスバルはバク転で回避し、その為に舞った土煙でスバルの位置を特定出来ないでいる。

カシュン / カシュン

スバルはカートリッジを2発ロードして魔法陣を展開し、両手を前に突き出す。それと同時に円環と青く光る魔力球を作り出し、リボルバーナックルを装着した右手を後ろに下げて、

「一撃必当！ディバインバスターー！！」

ズドオオン！

ディバインバスターを放つ。
しかし…

ガラッ

「しまった！」

ゴシヤアアン！！

ビルの天井が崩落し、それを遮ってしまった。

天井が崩落した為また土煙が上がり、オートスフィアはまたもスバルを見失う。

スバルはこの隙に瓦礫の影に隠れ、カートリッジを装填する。

「…こうなったら、あれをやるしかない！」

未だに土煙が舞っていて、オートスフィアはスバルを見失っている。

「今だ！」

スバルは瓦礫の陰から飛び出して…

カシユン / カシユン / カシユン / カシユン

全てのカートリッジをロードする。

途端に、展開した魔法陣がデイバインバスターの時よりも一層明るく輝き、魔力球の大きさも、円環の数も増える。

キュイイイン…

「フルカートリッジロード！絶対撃中！ストライクウ…ブレイカア
アー…！！！」

ズゴオオオオン！！

スバルの放った蒼い奔流はオートスフィアを呑み込み、一瞬にして消し飛ばした。

《ハア…ハア…。ふうー…スバル！あんた何であれ使ったのよ、危ないじゃない！デイバインバスターはともかく、ストライクブレイカーはあれほど使っちゃダメって言ったでしょ！》

「だって…《だってじゃないわよ！全く…》うう…。ゴメン、ゴメンってば…」

「残り後1分ちよい。スバル！」

「うん！」

side out

sideヴエストール

「……ナニコレビックリ。ドコカニカクシカメラトカアルンダロウ。

ダレカガ ドッキリ大成功！ トカカイテアルボードヲモツテイル
ンダロウ…モウナニガオキテモオドロカナイヨ…」

…多分ね…

《ヴェストール君、話し方が片言になってんで…》

《もう充分動揺してるよ…》

「いい加減現実みようよ。そうしないとO H A N A S H Iだ
よ？」

「すいません取り乱しました」

《でもビックリしたね…。まさかなのはのディバインバスターだけ
でなく…》

《ヴェストール君のストライクブレイカーまでもとは…》

あの2人、絶対俺を超えるな…

s i d e o u t

side???

ゴール地点

タイマーがラインの隣で残り時間をカウントしている。

「ん〜……おっ！来たですね」

ラインの目の先には、ティアナを背負って道路を駆けるスバルの姿が。

「後何秒？」

「16秒。まだ間に合う！」

ティアナがアンカーガンを構え、最後のターゲットを破壊する。

「はい、ターゲットオールクリアです」

「魔力全開イイ！！」

一気にラストスパートをかけるスバル。

「ちよっ！スバル！ちゃんと止まる事考えてるんでしょっね!？」

「へっ!?!?!あっ……!」

今のスバルは明らかにオーバースピードでゴールに突っ込んでいる。

「うわあああ…！」

「あつ！なんかちよいヤバです…」

『うわあああああ！』

ローラーブーツは、2人を乗せてどんどんゴール地点の先にある壁に近づいて行く。

「はあ…なんだろ。俺がいる場所では何時も万が一の時しかないな…」

「まあまあ…。でも、今はあの2人を助けてあげなきゃ、ね」

《そうですねよマスター。今は集中しなくちゃダメですよ》

「…言われずとも分かってるつつうの。一応ディメンションウォールとグラビティシールドっつと」

「アクティブガード、ホールディングネットもかな…」

《Dimension Wall, Gravely shield
d.》

《Active Guard, Holding net》

2つの無機質な声には気付かず、ティアナとスバルはゴールを通過し、壁へ一直線。

『うわあああああああああ！！』

ズズウウン！

.....

土煙が晴れて、そこにはアクティブガードに引っ掛かっているティアナと、ホールディングネットに絡まってひっくり返っているスバルがいた。

けれど、ヴェストールが使ったグラビティシールドとディメンションウォールが見当たらない。

「ん〜もう！2人とも危険行為で減点です！」

降りてきたラインに2人は啞然とした。

「頑張るのもいいですが、ケガをしたら元も子もないですよ！そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！！」

「……………ちつさ…」

ティアナがそう呟くのも無理は無いだろう。

何せリインの身長がモニターで見たよりもかなり小さく、30cm程しか無いのだから。

そして、そのリインが2人に激怒しているのだから、それはもう異様な光景である。

「ん全くもう…！」

「にやはは、まあまあ…」

「2人も頑張ったんだし、その辺にしとけよ。それにしても、無事でなによりだ」

「うん、ちょっとビックリしたけど…。それと、試験はこれで終わり、お疲れ様」

なのはが指を鳴らすと、アクティブガードとホールディングネットが消え、ティアナとスバルは優しく地面に降ろされた。

「そう言えば、ヴェストール君、グラビティシールドとディメンションウォールは？」

「ああ、あれですか。今はティアナにだけ掛けてますよ。ティアナ・ランスター二等陸士。今右足首痛く無いだろ？」

「へっ？あつはい。そう言えば全く…」

ティアナは右足を普通に地面に付けているに痛みが無い事に気づく。

「重力と空間を操作して、足首に全く負荷を掛けてないんですよ。でも、ちゃんと治療しないと。飽くまでも応急処置ですんで」

「へ〜…（やっぱりヴェストール君は何でもアリなの…）」

「何か言いました？」

「う、ううん。何でもないの。あっ、リイン、お疲れ様。ちゃんと試験官出来てたよ」

「うむ。100点満点、はなまる合格だな」

「うわあい！ありがとうございます！なのはさん、ヴェストールさん」

なのははバリアジャケットを解いて、ティアナに顔を向ける。

「細かい事は後回しにして、ランスター二等陸士、ケガは足だね。治療するね」

「うわあっと！治療は私がするですよ」

なのはが治療しようとする、リインがティアナの前に慌てて行く。

「あ、有り難う…御座います…」

ティアナはリインにお礼を言うと、スバルの方に向く。

「なのは…さん、ヴェストールさん…」

「うん？」

「何かな？」

スバルの呟きに2人が反応し、返事をする。

しかし、スバルははっとして…

「い、いえ！高町なのは教導官一等空尉！ロンメル・ヴェストール特別捜査官一等空尉！」

「別になのはさんでもいいよ。皆そうよんでるし呼びやすい方で」

「俺も気にしてない。普通に気軽に呼んでくれ。それにしても…スバルにティアナも、背、伸びたな…」

「ヴェストール君はランスター二等陸士にも会ったことあるの？」

「ええ、ちよつと用があつて…」

「そつか…でも、本当にスバルは大きくなつたね」

「まあ、そんなこんなで今更だけど、スバル、久しぶり」

「ティアナも、6年振りだな」

なのはとヴェストールは柔らかな笑みを2人に向け、スバルの頭になのはが、ヴェストールはしゃがんでティアナの頭に手を乗せて優しく頭を撫でる。

「へっ…?」
「なっ!?!」

それに2人が驚く。

「お疲れ様」
「よく、頑張ったな…」

その言葉に、2人心の中の詰まった何かが溢れ出した。

「…うう…ヒッグ…」
「あう…グスツ…」

「今は泣いていいぞ。落ち着くまでいてやるから…なっ?」

『うう…うわああああ…』

その後、ティアナとスバルが泣き止むまでヴェストールとなのはそこ
にいた…

………

「どうだ、すっかりしたか？」

「お陰様で」

「バツチリです！」

あれから20分程経った。スバルとティアナはすっかり泣き止み、それはもう眩しい位の笑顔になった。

「そっか、それは何より。えーっと、今の時間はと…うわっ！今すぐ行かなきゃ！」

ヴェストールが腕時計を見ていきなり慌て出す。

「どうかしたの？」

「すみません、実は今日、クロノ提督に呼ばれてまして…そろそろ行かないとマズいんで、俺、此処で抜けてもいいですか？」

「そっという事なら大丈夫だよ」

《どうせだからへり行く？》

モニターがヴェストールの前に展開され、そこにははやてとフェイトの姿が。

「いいんですか？」

《勿論、ええで》

「えっと…、じゃあお言葉に甘えさせていただきます。ゴメンなスバル、ティアナ。せつかくの再会がこんなんで…また何時か必ず会おう。なのはさんもすいません。ドタバタしちゃって…」

申し訳無さそうな顔をスバル、ティアナ、なのはの3人に向ける。

「大丈夫。気にしてないから」

「私たちも」

「大丈夫です」

「有り難う御座います。それじゃあ、行ってきますす！」

そう言うと、ヴェストールはへりに向かって飛んでいった。

s i d e o u t

s i d e なのは

「それじゃあ、行ってきますす！」

ヴェストール君がクロノ君に用事が在るって言ってへりに向かって飛んでいったの。

何でか分からないけど、あの背中を見るだけで顔が熱くなっていくの。さつきティアナとスバルに優しく微笑んでたけど、その顔を見るだけでドキツとしちゃったし…。／／／／

最初会った時には、こんな事無かったのに…。

…もしかして私、ヴェストール君に…？ いやいや、そんな訳ない！そう…そんな…訳…。うう…もう、こうなったら！

「覚悟しといてなの…！」／／／

「なのはさん？」

「へっ！？あ、あなんでもないよスバル」

こんな気持ちにしたヴェストール君がいけないんだよ？

side out

sideフエイト

ロンがなのは達になにか言った後こっちに飛んできた。その時になのは顔が赤かったのはなんでだろう？

まさかなのはが…？いや、違うかもしれないし…でも、だとしても、ロンは渡さないよ…！

まあそれは置いて、

「ロンは、兄さんがどんな用件か分かるの？」

「いや、全く。でも行き先が聖王教会だからカリムさんの予言関係だろ。他には…いや、やつばいいや」

「何や何や？気になる止め方やな。何を言おうとしたんや？」

「それを言うと義兄さんの、評価も印象も兄弟の仲も家族の仲もがた落ちになります、いいですか？因みに、前会った時には、義姉さん（ねえさん）の事をべた褒めした後、何処かの泥酔爺張りになんか言っていました、その時の様子、事細かに話しましょうか？」

…兄さん、何を言ったの？ものによっては半殺しだよ。

しかもよりによってロンなんて…恥ずかしいよ…。

「あ、あはは…、なら辞めとくわ。それと、何でクロノ君のこと、義兄さんって呼んでたり、フェイトちゃんと話す時だけタメ口なん？後、義姉さんって誰や！」

あれ？

「はやくに話さなかったっけ。ロンは私達の家族だよ」

「へへ、そんなんや〜…ってはいいい！〜！」

「はやくてさん、五月蠅いです。へりの中響くんですよ…」

ロンが耳塞いで顔をしかめてる。

「はやくて驚き過ぎ…と言うかはやく聞いてなかったっけ？」

「そんな話聞いた事ないで！と言うかフェイトちゃんその事一つも話してないで！（…くそう、フェイトちゃんの方が一歩リードしてる…）」

あれれ？

「…義姉さんまた話すの忘れてたのかよ…。しっかりしてくれ、執務官なんだし、あの2人の後見人だろ。てかそれ以前にもう19だし」

「ゴメン、ロン…」

ロンに怒られた…。

「まあ、別に怒ってないけど…今度から気を付けるように」

…と思ったけど大丈夫だったみたい。でも、もっとしっかりしなきゃ

やな…確かに執務官だし、あの子達の後見人なんだし…

「…はい…」

「何も其処まで落ち込まなくても…。はあ、世話の焼ける姉だ。ほら、頭下げて」

「うん…」

ポフツ

「…ふえ！？」 / / / /

「よしよし、泣かない泣かない」

ロンに頭を撫でられた!?

恥ずかしい…けどいい気持ちだな / / / /

「ふにゅ〜…」 / / / / /

「ん？義姉さん、顔赤いぞ。熱でもあるか？」

そう言うと撫でるのをやめて、私の額にてを当てて、もう一方の手で自分の額に当てた。

うわあああ！ロンの手が額に… / / / /

「う〜ん熱は無さそうだな…。体調管理はしっかりと、無理するな

よ

熱が無いことは確かめると、手を離す。

もっとしてほしかったな…と言うか顔が赤かったのはロンの所為なんだから…

はあ…わざとやってるんだったらまだいいけど、ロンは天然だからな…

余計にたちが悪いよ。

「2人共、お楽しみ在所悪いけど、ヴェストール君、聖王教会に着いたで」

はやて、笑ってるけど、目が笑ってないよ…

「す、すいません！以後気を付けます。それじゃ、はやてさん、義姉さん、行ってきます。帰りは何時になるか分かりませんが、部隊の発足の日までには戻ります」

「了解や、気いつけてなー」

その後、へりはすぐに聖王教会を飛び立った。

それにしても、ロン、大きく立派になったな…

初めて会った時もかなりしっかりしてたけど、たまに甘えて来たりしてたけど。

依頼でほんの些細なミスでもあったら、終わった次の日からずっと引き摺って、泣いてたりしてたし。

また“お姉ちゃん”って言うってくれるかな…

だけど私は、そんなロンの事が今でもずっと……

そういえば、さっきはやてが何言ってるか、ちゃんと聞こえてたよ。後でお置きしなきゃ…フッフ。

s i d e o u t

s i d e ????

9年前…

時空管理局本局

廊下を一人の女の子と一人の大人の女性が歩いている。

「そうそう、あなたに会わせたい子がいるんだったわ」

「誰なの、母さん？」

大人の女性、「リンディ・ハラウン」提督に呼ばれた女の子、「
フェイト・テスタロッサ・ハラウン」はその人に尋ねる。

「それは、会ってからの楽しみ」

リンディは悪戯っぽく笑う。

2人は暫く歩き、1つの部屋の前に止まる。

「ここよ」

その部屋の所有者は…

「ロン、リンディよ」

「…どうぞ入って」

時空管理局本局所属魔導師、特別捜査官「ロンメル・ヴェストール」
二等空士だった。

「ロン、今日会わせたい子がいるって言ったでしょ。今その子が
いるから挨拶して」

「分かった。んで、君がそうだね」

ヴェストールはフェイトを見つけるとそっち方向へ歩き、一歩前で

止まった。

「初めまして。時空管理局本局魔導師、特別捜査官のロンメル・ヴェストール二等空士だ」

微笑みながら握手を求めてきた。

「は、初めまして。時空管理局本局所属、囑託魔導師のフェイト・テストロツサハラオウンです」

緊張しながらも、ちゃんと自己紹介をしたフェイトはそれに応える。

「失礼かもしれないけど、年は？」

「大丈夫だよ。今は10歳。あなたは？」

「俺は9歳。ってことは、あなたの1つ年下の義弟になるな。よろしく」

「此方こそ…って義弟！？」

フェイトの上げた叫びに、顔をしかめて耳を塞ぐ。

「五月蠅いよフェイト。此処響くんだから…」

「ゴメン…」

「それで、その事は義母さんから聞いてないの？」

「あなたが私の義弟だから…義母さんは…」

「勿論、私よ」

「そんな事初耳だよ！私は母さんに“会わせたい子がいる”って
言われただけだよ」

その言葉を聞いた途端、ヴェストールはリンディを睨みながら呆れる。

「…義母さん、コレはワザと？それとも天然？」

「もちろん、前者よ！」

「張り切って自慢するな！自慢出来るような事じゃないからな！」

「そんな事言われなくても分かってるわ」

「ホントに？」

「もちろん！」

「ならもうするな！」

「嫌よ！」

「ふざけんな！」

「至って正気よ」

「尚悪い！」

フェイトの目の前で親子の言い争いが始まった。

母親のリンデイの言う事に1つ1つ律儀にツッコミを入れるヴェストール、その2人のやり取りに置いてかれて右往左往し、自分の所為で…と勘違いしてるフェイト。

事情を知らない人から見ると「何事？」 という反応をするしかないだろう。

「ハア…ハア…、ああもう！埒が明かねー！兎に角、義母さんはもうそういった事はしないこと！…ふう〜疲れる母親だ…ゴメンフェイト」

「へっ、あ、その…うん。もういいの？」

「ああ、これでやっと俺の話したい事に入れる」

「あはは…そうなんだ…。それで話って？」

「うん、フェイトは義母さんと養子としてハラオウン家の人間となつたんだろ？俺も、ハラオウンを名乗っては無いけど義母さんの養子として此処にいる。だから…、その…フェイトの事、“お姉ちゃん”って呼んでも…いいか？」／／／／／

ヴェストールがさつきまでの勢いと打って変わって、顔を真っ赤になっても「ごも」言っつ。

「えっ？えつと…その…私はいいいよ」／／／／

「お姉ちゃん」と言われドキツとし、ヴェストールの態度に吊られてフェイトも赤面して応える。

「ホントか！ホントに呼んでもいいのか!？」

「う、うん。いいよ…」

フェイトの応えにまた態度をガラツと変えたヴェストール。それに戸惑うフェイト。

「有り難う！それじゃあ、これからもよろしく。お姉ちゃん!」

少し前までの大人らしさが一変して、今は子供っぽい満面の笑みを浮かべる。

「うん、よろしく！ロン」／／／／

そして、ヴェストールその様子にまた頬を染めるフェイトがいた。

ヴェストールその後の数日はリンディとクロノ、フェイトとも一緒にそれなりに充実して過ごしてた。

そんなある日の事、

「2人共、いいかしら?」

フェイトと話に華を咲かせていたヴェストールの後ろでリンディの
声が聞こえてくる。

「うん、大丈夫」

「もう終わったよ」

「それなら早速、ヴェストール特別捜査官。あなたに特別任務をや
つていただきます」

「随分と急だな…。まあいいや、内容は？」

リンディから特別任務の命令に、ヴェストールの目つきが一瞬にし
て変わる。

「行き先は第801管理外世界、内容と詳細はこれに…」

「ふむ…、Aクラス犯罪者グループのアジトを破壊…ねえ」

フェイトのヴェストールの前に展開されたウィンドウを覗き込み、
その内容に驚愕と激怒を表す。

「何…これ…！何なのこれ！むちゃくちゃじゃない！何でロンみた
いにまた小さい子がこんな事をしなきゃいけないの！？おかしいよ
！何だよ！母さん！！」

フェイトの頬に涙が流れる。

「いいんだ姉さん。管理局が人材不足なんだし、第一、俺が望んだ

事なんだ。俺がしてしまった…罪滅ぼしとして…！」

ヴェストールはフェイトから顔を背け、手に爪の食い込んだ跡を生々しく残す程ほど強く握り締める。

「ロン…あなた、まだあれを…」

「こうでもしないと落ち着かないし、俺の気も済まない。それに…こんなんじゃないあの方はきつと、いや絶対…許してはくれない…！だから俺は…もつと強くなつて、もつともつと任務をこなさなきゃいけないんだ！」

フェイトはそんなヴェストールを見ることが出来なくなった。

その時、ヴェストールの背中から、ふわりと包み込むような感覚が生まれた。

「えっ…？」

背中に振り返ると、何時の間にか、リンディに背中から抱かれていた。

「義母…さん？なんで…大丈夫。」「へっ…？」

「大丈夫よ。なんであなたがそんなに背負い込んで、苦しまなきゃいけないの？」

「だって…あれはどうみても俺が…違つわよ。ロンの所為ではないわ。」「…………」

「あれは事故よ。ロンがそう思っているだけで、誰がどうみてもあれを事故たと言つわ。」…そんな…違う！あれは…あれは俺の所為だ！事故なんかじゃない！事故なんかじゃ…済まされないんだ…！」

ヴェストールが自責の念からそう叫ぶと、リンディがヴェストールを此方に顔を向けさせ…

ベチン！

ビンタを喰らわせた。

「~~~~~っ！」

ビンタされた所をさすり、リンディを睨みつける。

…が、

「いい加減に下さい！」

「っ！？」

リンディに怒鳴られた。

「なんであなたが責任を取らないといけないの？何故全てを背負わなければならないの？」

「だって…俺が…」違つわ。あなたの自己満足よ。「っ！違う…」違わないでしょ「……………」

ヴェストールが言おうとするが、それを遮る。

「何度でも言うわ。ロン、あなたが悪いんじゃないの。あれは誰一人どうすることも出来無かったの。あれを人の所為に出来るモノでは無いの。もし、それがあなたの責任で、その罪滅ぼしの為ならば、それはただの自己満足よ」

「っ……！」

「もっと人を頼りなさい。もっと私達に迷惑を掛けなさい。私達にその苦しみを分けなさい。ロン一人が背負い込むのではなく、私達もそれを背負って生きるわ。だって、私達、家族なんだから」

「……………」

何時しか、リンディは、優しく、包み込むような顔で語りかける。

「苦しい時や悲しい時は泣いていいのよ」

「うっ、うっ……………」

「いっぱい泣きなさい。思いっきり泣くのよ。心の中がきれいさっぱりするまで……」

「ぐすすっ、ぐぐっ……うわあああああ……」

……………

「落ち着いた？」

「ぐすっ……っん……」

リンディの問いにヴェストールが若干睨り泣きながら、

「良かった…フェイトは？」

「私も…なんとか」

フェイトは泣き止んでそれぞれ応える。

「そう…それで任務の事なんだけど、辞退する？」

「いや…やる。今度は罪滅ぼしとかは無しで」

ヴェストールはしっかりした声で話す。

「分かったわ。それじゃあ、フェイト、あなたもロンについて行ってくれるかしら？」

「うん」

「ちゃんと他の人も一緒に行ってくれるから。心配無いわね？」

「勿論」

「無いよ」

「それじゃあ、早く行くわよ」

「了解！」

3人の顔色は既に真剣その物仕事モード。しかしそこには、また何時ものような愉しげで自信に満ちた3人の姿があった。

s i d e o u t

第2話 新しい翼（後書き）

シ《シルフと》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ『後書きトークショー！』

ヴ《やつとこのことで第3回！作者の書き上げる早さに心配を覚えてしまいました〜…》

シ《これだけ時間掛けたのに酷すぎるわ》

マジでスイマセン。テスト期間とかぶりまして、物凄くひどくなり果てました。自分に絶賛絶望中のe a g e eです。

ヴ《コレは私も激怒ですよ！》

ホントスイマセン。

シ《今度こんな物を作ってみて下さい。命無いですよ》

…はい…

それはともかく、今日はゲストをお呼びしました。

ヴ《誰だれ〜！早く教えて！》

ヴェ、「おい作者、これはワザとかそれとも天然か？」

恥ずかしながらも…後者です。

ヴェ、「そうか…シルフSet up。」

シ《Yes my master. Stubby really,
set up》

何をする気ですか？ガクガクブルブル

ヴェ、「勿論、掃除さ。フルカートリッジロード、エリシオンバスタ
ー」

シ《Full cartilage lord, Elyssion
Buster》

キュイイイイン…

ヴェ、「何か言い残すことは？」

お願いします！もうーd

シ《Fire》

まだ言いおわっ…

ズドゴゴゴオオオ！！！！

ヴ《作者、成仏して下さいね〜…幽霊はやです〜》

シ《ヴァール、あなた間違ってるわよ》

ヴェ「正確には“地獄で死んでる”だな」

ヴ《シルフ、マスター、ありがと〜です〜》

シ《気にしないで下さい。当たり前的事ですから》

しかし作者ふっつかーっ！

ヴェ「チツ生きてたか…って、何故生きてる!？」

作者ですから。

シ《納得がいかないですね》

まあまあ、今回はヴェストールに次回予告を。

ヴェ「無理やりごまかしたな？後でストライクブレイカーを死ぬまで撃ってやるよ。」

それでは次回予告、

ヴェストールはクロノから呼び出され、その場所が聖王教会だった。内容は騎士カリムの予言について。

しかし、その予言は…!!

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers ～ヴァルキュリ
アの血を引く者～第3話。

光と闇と、そして過去と

第3話 光と闇とそして過去と（前書き）

第3話です。

カリムがキャラ崩壊してます。

第3話 光と闇とそして過去と

sideヴエストール

お昼頃

聖王教会のとある一室の前

クロノ提督が俺に話とは何だろう？またシスコン全開トークでもする気か？いや、流石にカリムさんの前ではやらないか…。
まあ、とりあえず…

「騎士カリム、騎士ヴエストールがいらっしやいました」

「入って下さい」

中から声が聞こえる。シスターシャツハが部屋のドアを開ける。

「失礼します。ロンメル・ヴェストール特別捜査官です。ご無沙汰しております。クロノ・ハラオウン提督、騎士カリム」

テーブルに着いているクロノ提督とカリムさんの前に立つ。

「クロノ提督、話とは何でしょうか？」

「そう堅くならなくてもいいですよ。何時も通りで」

「…と、騎士カリムが仰せだ」

「そうですか…。それでは、何か用か義兄さん」

「あはは…えらい変わりようだな…」

俺の反応に苦笑している義兄さん。

「カリムさんと義兄さんがこれでいって言ったんだろ。それで、話とは？」

「そう、だったな。まあ、ゆっくり座って話そう。飲み物は？」

「んとう…コーヒーで」

「何時も通りのブラックでいいね？」

カリムさんが確認を執る。

「勿論。それでお願いします」

「分かったわ。シスターシャツハ、コーヒーをお願いします」

「分かりました騎士カリム」

シスターシャツハがコーヒーを継ぎに行った。

「…んで、此処に呼んだってことは、また予言の方か？」

「ああ、そうだ。全く、ロンの頭の回転の良さには頭が上がらないよ」

「それが最年少で執務官試験合格した人の言う事かよ…」

義兄さんの言葉に俺は呆れる。

「まあまあ、いいじゃない。彼の自慢の義弟何だし、私の大好きな弟何だから」

「カリムさん、義兄さんの話の見解がそれだと義姉さんも自慢の妹だよ。管理局のエースの一人なんだから…。それと、そんな事言ったらロツサさんの立場無いよ」

ほとほとカリムさんにも呆れる。何故俺なんかが…

「別にいいの。ロツサと比べてあなたの方が可愛いから」

カリムさん、別に可愛いとか言われても嬉しくないよ。

…あれ？背中に柔らかい触感が…背もたれってこんなふわふわだったっk、って！

「っ！何してんですか!?!」

「何って、ロン君に抱きついてるだけですよ」

「そんな事見れば分かります！早く離れて下さい！義兄さんがいるのに…恥ずかしいですよ!?!」

「私は別に…」

「俺が恥ずかしいんです!!!」

「うーん…じゃあ、昔みたいに“カリムお姉ちゃん”って呼んでくれたら離します」

「なんで俺がそんな事を「呼ばなかったら、ずっとこのままよ?」っ!そ、そんな〜」

なんでカリムさんにそんな事しなきゃならないんだ?

…確かに小さい頃はそんな風に呼んでたけど…もういい歳だぞ。恥ずかしくないのかよ…。
でも、この手を外すには“カリムお姉ちゃん”って呼ばなきゃいけないし…。

ああもう!!!こんなんじゃキリがない!

…ここは腹を括るか…はあ〜…

盛大なため息をついた後、例の言葉を恥ずかしいながらも呟く。

「カ…ム…おね…ん」／／／／

「ん?何ですか?聞こえませんか?」

わざとらしく俺に言う。

「ううゝ…「ちゃんと見えなかったら今度はキ」言っな！もうそれ以上言っな…！」

「なら、早く呼んで下さいね」

は、恥ずかしい…。恥ずかしすぎる。俺を殺す気か…

そっだ！ならばカリムさんにも同じ思いをさせればいいんだ！…うん、よく考えた俺。

…ってな訳で…

実行！

「カリムお姉ちゃん、もう放して下さい。僕、恥ずかしいです…」
／／／／／／

「っ…！」

振り向いて上目遣い＋涙目＋ほんのり頬を染める。

コレでどうだ…！

しかし…

カリムさんの反応、はそれを大きく斜め上に行くものだった。

「か…「か？」かわいい〜!!」 / / / / / /

何っ！死亡フラグだと!?!?…っ

「もうっ!!」 £!!!!」 / / / / / /

正面から抱き付かれました。それはもう、この細い腕からは有り得ない程の力で締め付け、カリムさんの柔らかく大きな2つの丘に顔が埋まって息が出来ない状態になっている。

義兄さんは「やっちゃまったか…」とでも言うかのような顔。

シスターシャツハに至っては、その突然の出来事に顔を真っ赤にし、持っていたトレーをコーヒーの入ったカップごと落とした。

此方は座っているためもがく等の抵抗すらも出来ない。

「はっ、かわいい!かわいい過ぎるわっ!…!」

そう言いながら更にキツく締め付ける。

…マジで死ぬ。

“ 死因：窒息死
原因：顔が大きく柔らかかな二つの丘に埋まった為、呼吸が出来ずに死亡”

とかになつて

“ 世界初！巨大な双丘による窒息死の死者！”

とかつて新聞に載りそうな程。

何その死因？恥ずかしいにも程があるだろ…。

「騎士カリム！何をしていますか！？」

「何をと言えば、ロン君をお持ち帰りしようかと…「ダメです！
なら、take out…」言語を変えても意味は変わりません！」
…むう…」

何気に俺の貞操の危機だったりした！？

「…そろそろ放したらどうだ。ロンがぐったりしてるぞ」

「はっ！ごめんなさいロン君。大丈夫？」

カリムさんが暴走モードから戻った。

「ありがとう義兄さん。助かったよ……」

「気にするな。フェイトがいたら何時もこんなだったろ？」

「なっ！？義兄さんここで爆弾投下すか！？」

「場違い過ぎて反吐かである。」

「と言うより、場違い過ぎて吐血する！」

「あなたは自分の（義理だけど）弟を殺したいのかね？そんなに俺が憎いのかね？」

「その前に、俺が義兄さんの恨みでも買うような事をしたか？」

「あら、そうなの？なら、まだやってもいいわね？」

「カリムサン、トテモ美シイ微笑ミノトコロスミマセンガ、眼ガ笑ツ
テナイデスヨ？」

「ウフフ…いただきま〜す……」

「止めて下さいカリムさん！正気に戻って！俺は、予言についての話をしに来たんだ！！」

「あら、そんな用件だったかしら？」

「この人本当の用件すらわすれてら。」

こうなりや最後の手段だ。

「俺は重大だと義兄さんに聞いたからここに来たんだ。用件が無いなら…俺は帰る」

…さあ、どうするカリムさん？

「そうでしたね。それでは、本題へと入らせていただきます…」
お仕事モードにスイッチしました。

ミッションクリア！

「…それで、今回はどのようなの？」

「それでは早速…」

そう言っただけでカリムさんが羊皮紙の短冊のような紙の束を取り出し、束ねてある紐がほどけ、短冊が宙に浮き、円形に広がる。

そして、一枚の短冊がカリムさんの所で止まり、カリムさんがそれを読み上げる。

「紅き雷に 数多もの闇を抱えし 蒼き炎が対する時 時の
船の全てを無くし 万の史と 兆の民の終焉を観る。」

紅き雷は 現を亡くし 新たな闇を 呼び込まんとす”だっ
たわ”

一度聞いただけなのに、その情景が一瞬で浮かんだ。

……………何の夢だ。

これは何だ。

「そんな…！」

それに…“万の史と兆の民の終焉” だあ？

「……………それ…」

……………幾ら予言とは言え嘘は言っちゃあいけねえなあ。

「えっ!?!」

いけねえよお！

「ふざけんじゃねえぞ!!このやろおお!!…!!」

「っ!…!!」

その時、自分でも何がどうだかは知らないが…

俺の中で何かがすっ飛んだ。

「お、落ち着けロン!冷静になるんだ!」

「これが落ち着いていられるか！？俺は、俺はまた、あの日のような事になるのは御免だ！……何で……！何でこうなるんだ！……ふざけんな……！冗談じゃねえぞどチクシヨウが！……！」

「落ち着けロン！いい加減、現実を見る！」

「なっ！」

「いい加減……状況を察しろ。お前の過去が何処までも最悪だったのは、少なくとも、この場にいる全員が知っている」

「くっ……分かったよ」

「それと、ロン。君には第370管理外世界へ古代遺跡の調査に行ってもらいたい」

「……了解だ」

「悪いな。こんな事聞いた後なのに……」

「気にするな。予言は予言。それが全てじゃないし、飽くまでも未来の可能性の一つだ。変えようと思えばいくらでもって変えられる。それに、仕事は仕事だ。それに専念しなければ、此処にいる必要がない」

「ロン君……」

「人の為になるならば、それで人を救えるならば……何でもするつもりでいる。管理局の魔導師として……」

「…分かった。では、ロンメル・ヴェストール特別捜査官、よろしく頼む」

「はっ！」

俺はクロノ提督に敬礼をした後、聖王教会を後にした。

一つの、確かな想いを持って。

……俺はもう、あんな過去を創りたくないんだ。

もう嫌なんだ。

大切な、家族が、親友が、家が、皆で遊んだ公園が、そして…

……なによりも

全ての始まりが亡くなることが……。

自分を受け入れてくれる何もかもが……

消えて仕舞うのが怖いんだ。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

12年前:

第97管理外世界【地球】

スイス チューリッヒ

「はやくつかないかなー!」

一つの車の中で、1人の小さな男の子が母親であろう女性に楽しそうに話す。

男の子は、痩せ型で顔はさながら美少年と言ったところか。(見方によれば美少女?) 青く肩の下まである髪を後ろで束ねている。

「はいはい、分かったわよ」

「そんなに急がなくても、動物園は逃げないぞ」

今度は彼の父親と母親らしき大人が話す。

男性は髪が青く、短く切りそろえている。

女性は髪が長く、腰あたりまである美しい銀髪。眼は透き通るような深い紅。

「だって、たのしみなんだもん！」

男の子は2人の方に向いて、輝く笑みを見せる。

「まったくもう！ロン！すこしはおちついたら？」

「そういうレイムはどうなのさ！」

ロンと呼ばれた男の子「ロンメル・ヴェストール」は、レイムと呼ばれた少女「レイム・リスター」に言い返した。

レイムは緩やかなカールがかかったブロンドの髪で、眼は青い。

「見栄を張るなよレイム。お前も昨日楽しみで寝れなかっただろうが。いや、違うな…そういうや、先週辺りに“ロンと一緒に動物園に行ける！”とかって騒いでいたような…」

「わあああ！な、にゃんのことかしらわたしにはさっぱれえ！」

「妹よ、かみかみだ…」

レイムにツッコむ少年の名は「ロイガー・リスター」。名前を観れば分かるが、レイムの兄だ。

髪は黒く、アンシンメトリーにしている。

「へえ〜そうだったんだ〜…」

「な、なによ?」

ロイガーに聞いて、ロンはレイムをまじまじと眺める。

「いや、だからはりきってそのふくきてたの?」

…そう、レイムは基本的にボーイッシュな服を着て、髪をポニーテールにしているが、今日は白のワンピースに薄い緑のカーディガンを着て、髪は下ろして白い帽子を被っている。

「そうよ!…もしかして、わ、わたしへん?」 / / / / / /

「いや、かわいいとおもうよ」

「そ、そうなんだ…よかった」 / / / / / /

「(今日こそ言えるといいな)」

ボソッとレイムの耳元で呟くロイガー。

「なっ！おにいちゃん！」／／／／

「なにをいうの？」

「なんでもないわよ！」

「なにもおこらなくても…」

「おこってないわよ！」

「まあまあ、2人共、着いたわよ」

『はい！』

ロンとレイムが返事をして車を降りた。

その瞬間、

ズドゴゴゴオオオオン！！！！！！

空が青白く光り輝き、5人の元に衝撃波が押し寄せた。

「キヤー！」

「何なんだ！何が起きた！？」

その場にいた5人は何かなんだかさっぱりだったが、かなり危険だ
といいことは分かった。

そして…

スガガガガアアン!!!!!!!!!!

轟音と共に何かが飛んできて、

ゴゴン!!

誰かに当たる音がした。しかも複数。

暫くして、光も衝撃波も落ち着いてきた。

「みんなだいじ…よう…ぶ…!？」

ロンの目の前には、

観たことのない風景が広がっていた。

さっきまで合った動物園は丸ごとなくなり、あるのは巨大なクレターだけ。

そして…

「おかあさん！おとうさん！レイム！ロイおにいさん！」
変わり果てた4人の姿だった。

「そんな…おかあさんが、おとうさんが…」

ヴェストールには、この現実にはキツすぎた。

「ロイおにいさん、…レイム…」

「おお！これは凄い！この威力さえあれば、管理局も…フフ、ふはっはっはっは！」

不意に、空から男の声がした。

その男の肩には巨大なバズーカらしきものがあった。

そしてヴェストールを見るなり、

「チツ、子供が1人残っていやかったか。まあいい、殺せば問題なしだ」

そう言っつてヴェストールの方に飛んできた。

……が、

「……かえせ……」

「ああん？」

「かえせよ……」

「何を言っつみんなをかえせええー！」なっ！なんだありや！？
ヴェストールを蒼い炎のようなオーラが包み込み、眼は紅く光り輝き始めた。

更に、膨大な魔力が溢れ出した。

「てめえがおかあさんを、おとうさんを、ロイおにいさんを、そして…レイムをおおー！」

フツ…

ヴェストールが叫んだ瞬間、男の前から消え…

「っ！！？」

「しねえええ！！！」

何時の間にか男の目の前に来て、

ズドン！！

「グホッ！」

殴り、

ズドン！！

「ガハッ！」

その反動を利用して、回し蹴り

「うおおおお!!!」

ズゴオン!!!!

「グボホオツ!!!」

最後に思いつきり地面に叩きつけた。

「はあ…はあ……………」

フツ…バタン

まだ幼いヴェストールにとって、これは物凄い負荷になったようで、その場で意識を手放した。

ほぼ同時刻

地球にに程近い所

アースラ艦内

先ほどのバズーカ男を捜索していた。

「くっ…あいつ、何処へ行った」

モニターの前で少年「クロノ・ハラオウン」は、苛々していた。

「クロノ、少しは冷静になりなさい。犯人を捕り逃すわよ」

そんなクロノ注意する女性「リンディ・ハラオウン」は椅子に座って緑茶に砂糖を大量に入れている。

「ですが…!」

「クロノ君落ち着いて。そんなに焦っても犯人は見つからないよ」

「……………」

リンディと同じく、クロノを宥めて落ち着かせる事に成功した女性「エイミィ・リミエッタ」。

部屋の中でかなり気まずい空気が流れ始めた時、アースラ内でアラームが響く。

「どうしたの!?!」

「奴の反応をキャッチしました!」

「場所は?」

「第97管理外世界【地球】です！」

ウィンドウを操作していた1人がリンディに応える。

「分かったわ。アースラは第97管理外世界【地球】に急行よ！」

『了解！』

そうリンディが宣言した瞬間、

またけたたましくアラームが鳴った。

「今度は何！？」

「分かりません！しかし、とてつもなく巨大な魔力反応をキャッチしました！」

「規模は？」

視線をウィンドウに戻し、その測定結果に目を見張る

「っ！SSSオーバーです！！」

「何だつて！！？」

それを聞いたクロノは驚愕した。

SSSオーバーなんて未だにかつて見たことも聞いたことも無いの

だから無理は無いだろう。

「場所は！」

リンデイが声を張り上げる。

「第97管理外世界【地球】です！しかも、奴の反応のあった所の至近距離です！」

それに対してもう1人が返す。

「映像出せるか？」

「今出します！」

そう言ってブリッジの中央にウィンドウを展開し、その映像を映し出す。

ヴェストールの“真”の姿が映った映像を。

「何だよ…これ！」

「こんなの初めてだわ…」

ウィンドウに映ったヴェストールは荒れ果てた土地で、アースラの

追っていた次元犯罪者を一瞬で肉塊に変え、その場で倒れ込んだ。

「…凄…！」

「私達が闘つても追い詰めるのがやっとなのに…」

「あの子、ほんの数秒で…！」

「驚いている暇は無いわ。早く地球へ！あの子を保護するわよ！」

……

「う…ん…」

ヴェストールが起きた所はアースラの医務室だった。

「……どう？」

「ここはアースラの医務室だ」

「あーすら？なにそれ？おにいさんは？」

「僕はクロノ・ハラオウン。君を保護したんだ」

「私はリンディ・ハラオウン。クロノの母よ」

「母さん！何故それを…」

「（彼の家族がどうだったのか忘れたの？）」

リンディにヴェストールの事を言った瞬間、クロノは「しまった」とでも言うかのような顔をした。

「どうしたの？」

「…いや、その…だな…」

「残念な事何だけど…」

「…そのことなら…ぼく、だいじょうぶだよ。…ひとりでも、だいじょうぶだよ」

浮かべた微笑みは、優しく、強く、しかし寂しげで弱かった。

「っ…」

この時、クロノとリンディは実感した。彼のメンタルの強さと弱さを、残酷過ぎる現実を受け止めた彼の笑顔の表と裏を。

そして…

この小さな身体にある未知数の未来と可能性を…。

「ねえ、君の名前は？」

「ロンメル・ヴェストール」

「そう、では、ロン君。私達と一緒に暮らしてみない？」

「へっ？」

ヴェストールは急にリンディから告げられた言葉に驚いた。

「確かに…言い案かもしれないな…」

「えっ？」

「私達があなたを家族として迎え入れたいの」

「で、でも…」

「我慢、しなくてもいいの。泣きたい時に泣けばいいし、笑いたい時に笑えばいいのよ。あなたは我慢しすぎ。もう少し、甘えてもいいのよ」

リンディの言葉に、ヴェストールの心の中の何かが溶けていった。

「…いいんですか？ ぼくがいても…」

「ええ」

「勿論だ」

「…ありがとうございます」

こうしてロンメル・ヴェストールは新たな人生のスタートラインに立った。

新しい家族と共に。

side out

side???

時間は戻り

新暦75年4月

第608 管理外世界

ある場所に地下へ続く通路があり、そこを進んで行くと広いホールのような空間が広がっていた。

「フフツ…初めて見た時よりもますます可愛くなってきたわね」

1人の女性が指を唇に添えて妖しく微笑みながらモニターを見て咳く。

誰が見ても確実にモデルと思う程のスタイルバツグンのまさに“お姉さん”な感じ。

「姉様、その言葉にその仕草は如何なことかと…」

もう1人の女性もモニターを覗く。背は先ほどの女性よりも小さく、身体はまだ未発達なのだろうか。

長い髪をポニーテールにして纏めている。

「全く、あなたも物好きね。あの子が欲しいなんて」

そう言つてまた、新たな女性はモニターの中の少年とデバイス（…）を差した

此方は2人よりも背は高いが、最初人に比べると見劣りするように見える。けれども、バランスの整った身体つきである。

髪はショートカットにしてあるらしい。

この3人に共通している事、それは白銀に輝く美しい髪と透き通るような紅い眼だろう。

12年前のヴェストールと同じように…。

「当たり前よ。私達と同じ血を持っている…いや、私達が（・・・）あの子と同じ血を、ね」

「古代ヴァルキュリア人の純血とダルクス人の純血のハーフ、“未来を繋ぐ全ての鍵”と行った所でしようか」

「“未来を繋ぐ全ての鍵”…ね…」

「まあ…未だに覚醒はしてないみたいだけど、この調子ならそろそろかしら…」

彼女はまた、妖艶な笑みを浮かべた。

side out

第3話 光と闇とそして過去と（後書き）

シ《シルフと》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ『後書きトークショー！』

ヴ《さて、今回は第3話をお届けしました〜！》

シ《今回、私達出て無いわね》

ヴェ「しょうがないだろ、今回は“何故俺がハラオウン家への養子になったのか？”の話だからな…」

ヴ《マスター、作者はどうしました？》

ヴェ「今は…川越えた辺りかな…」

シ《マスター、ついに殺る事が出来たのですね…》

ところがどっこい、此処にいる。

ヴ《あ、作者出てきた》

そうです。

前回、決め台詞を入れるの忘れてかなり凹んだ作者のe a g l eです。

シ《チツ…まだ生きてたのですか》

ヴェー「シルフ、今本番」

シ《おっと、そうでした。危うく忘れるところでした》

それはそうと、今回は新キャラ3人が出て来ましたね。全員女性でしたが…

ヴェー「そう言やあそうだな。あの人達は今後どのように？」

それ言っちゃうとネタバレなので自粛させて戴きます。

ヴ《そ〜なんだ〜。楽しみ楽しみ〜》

…あんまり期待しないで。もっと酷くなるから。

シ《では、もう読みたくない》

それも嫌なのでほどほどでお願いします。

あと、今回はヴェーストールの詳細なプロフィールとシルフィード、ヴァールの性能を書こうかと思えます。

ヴェー「つまり、“ネタを練るついでにプロフィール”だな」

「ご名答！」

でも、後書きトークショーはやるよ。

シ《了解しました。それでは》

ヴ《次回も》

ヴェ「お楽しみに！」

全『ばいばい！！』

キャラクタープロフィール？（前書き）

キャラクタープロフィールNo. 1です。

キャラクタープロフィール？

名前

ロンメル・ヴェストール

(CV: 日野 聡)

年齢

18歳

出身地

第97管理外世界【地球】

スイス

チューリッヒ

所属

リンディ・ハラウン総務統括官直属特別捜査官

古代遺物管理部機動6課

官位

一等空尉

魔導師ランク

総合: S S -

魔力保有量: S +

空戦: S S +

陸戦: S +

魔力光: 緋色

魔力変換資質: 雷

(魔力光の色に影響されているため、雷自体が緋色の染まっている)

ポジション

フリーアタッカー

コールサイン

イージス1

身長

178cm

体重

62kg

容姿

髪は青く、肩下まである。本人曰わく、この髪が邪魔なので切ろうとしたが、他の人(特に義姉のフェイト)に強く反対された為後ろで髪を纏めている。

眼の色は元々黒だったが、12年前の時に紅く染まった。

(戦場のヴァルキュリア3のイム力を一回り大きくして、眼だけ紅く染めた感じを思い浮かべて下さい)

使用デバイス

シルフィード

ヴァール

???

性格

真面目で言いたいことははっきり言うタイプ。公私の区切りもちやんと付けているが、アイス等のお菓子が関わると性格が一変し、誰にも手が着けられなくなる。

好きなもの

アイス

本

自分を大切にしてくれたorしてくれる人達

嫌いなもの

大切な人達を傷つけるもの全般

至福の時に（アイスを食べている時）邪魔をしたもの全般

趣味

読書

料理（本人曰わく、これはどちらかと言えば当たり前）

アイスの食べ歩き

詳細

生まれはスイスのチューリッヒで、母親は古代ヴァルキュリア人の、父親はダルクス人の血をそれぞれ引いている。

6歳の時、両親と幼なじみのレイム・リスター、その兄のロイガー・リスターと共に外出先で次元犯罪者による事件に巻き込まれる。その時にヴァルキュリアの第1段階覚醒が始まり、その次元犯罪者を

一瞬にして屍に変えた。

その後当時アースラの艦長を務めていたリンディ・ハラウンとその息子、クロノ・ハラウンに保護され、同時にハラウン家の養子として迎え入れられた。

養子となって半年後、聖王教会へ行き、その時に騎士カリム・グラシアとシスターシャツハ、ヴェロツサ・アコースと知り合う。

8歳の時、魔導師試験に合格。それと共に時空管理局へ入所。また、異例の二等空士、特別捜査官の待遇での入所となった。

また、この時にインテリジエントデバイスのシルフィードと出会う。闇の書事件の後、フェイトがハラウン家に養女になるが、ヴェストールは長期任務があった為、その数ヶ月後に知ることになる。

また、この長期任務の際、尊敬していた魔導師の1人がヴェストールを庇って殉職した。ヴェストールはそれを引きずりながら任務をこなしてきたが、リンディの助言から“罪の償い”から“自らの成長”の為に生きていく事を決意した。

それから5年後の4月29日の空港火災時に、当時15歳の高町なのはと当時10歳のスバル・ナカジマの所に落下してきたブロンズの像をストライクブレイカーを放って破壊、救出の援護をした。この時ヴェストールは二等空尉。

16歳の時に一等空尉の昇格。また、インテリジエントデバイスのヴァールを本局のメンテナンスタッフのマリエル・アテンザやシヤリオ・フィニーノと共に設計、開発をした。

そして現在、時空管理局本局に所属し、義母のリンディの下で直属の特別捜査官として働く。その後八神はやて、高町なのは、フェイト・T・ハラオウンのスカウトから古代遺物管理部機動6課の遊撃隊として迎え入れられた。

使用魔法

シルフィード使用

射撃魔法

プラズマランサー・ワイドバレット

追尾射撃魔法

その名の通り、義姉・フェイトの射撃魔法。
ヴェストールはそれをアレンジし、更に広範囲に射程を広げたもの。

サンダーブレイザー

追尾射撃魔法

カートリッジ2発使用

こちらは本人だけが使用。
形こそフェイトの射撃魔法に似ているものの、本質は【長距離をピンポイントで貫通させる】である為、大きく違う。

砲撃魔法

ストライクブレイカー

カートリッジ1発消費

直射砲撃魔法

射程、威力共になのはのデインバスターを上回る。

発射時に魔力変換資質の雷を用いて、砲撃の周囲の敵に雷撃を喰らわせる事が可能。

因みに、これが元で【緋色の雷】と言う通り名がついた。

エリシオンバスター

カートリッジ4発消費

広域殲滅型直射砲撃魔法

原理はストライクブレイカーと同じだが、規模と威力を上げた強化版。

シルフィードを使用した上での最大砲撃魔法。

空港火災時に使ったエリシオンバスターは、魔力を一点に集中させ、カートリッジの数を減らした為、ストライクブレイカーと同じ範囲に絞る事ができた。

バリアジャケットは黒のジャケットに白いYシャツ、黒いジーンズ

で軍隊が用いるようなブーツを履いている。

ヴァール使用

轟雷一閃

カートリッジ1発消費

魔力斬撃

刃に魔力を注ぎ、更に魔力変換資質により帯電させる。
至近距離からの直接斬撃や中距離からの斬撃波がメイン。

オープンファイア

複数広域殲滅型追尾砲撃魔法

カートリッジは規模や必要威力により変化
アウト、ロング、ミドル、クロス、どのレンジから放つても絶対に
追尾し、確実に敵を仕留める事ができるヴァール使用時で二番目に
強力な砲撃魔法。

第0話で放った時のオープンファイアはカートリッジを5発消費し
た。

また、オープンファイアにはバリエーションがあり、その一つに【
オープンファイア・フルバレット】という集束魔砲がある。

バリアジャケットは、シルフィードの装備に、赤いラインの入った

青いアーマーとプロテクターを着用している。

この装備と魔法から、【紺碧の破壊者】の名がついた。

デバイス詳細

デバイス名

シルフィード

タイプ

カートリッジシステム採用のミッドチルダ式
インテリジェントデバイス

形状

待機時

銀に輝くの弾丸を模したブレスレット

第1形態

ノーマルモード

黒い一丁のハンドガン

(形はデザートイーグルに似ている。)

カートリッジ装填数

7 + 1

第2形態

ストライクモード

銀の双銃

(形はベレッタM92Fに似ている。)

カートリッジ装填数

12 + 1 × 2

第3形態は出張任務編中盤に登場します。

デバイス名

ヴァール

タイプ

シルフィードと同様に、カートリッジシステム採用のミッドチルダ式インテリジェントデバイス

形状

待機時

翼の形をあしらった透明のクリスタルのペンダント

第1形態

ノーマルモード

見た目はどうみてもイムカの使用武器「V a r」です。

カートリッジ装填数 通常弾：35 × 2 + 1

特殊弾：10 + 1

第2形態は出張任務編に、第3形態はStrikerS編の後半からの登場です。

???

シルフィードとヴァールのクロスドライブした形態です。StrikerS編後半から出て来ます。

キャラクタープロフィール？（後書き）

シ《シルフと》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ『後書きトークショー！』

ヴ《さて今回はマスターと私達のプロフィールだった訳ですが》

シ《かなり大雑把でしたが、作者の技量から考えるとそれなりですね》

ヴ《おおっと！シルフが何時もより丸い言葉を使っています〜！でも、それなりに辛口？》

まあ、かなり未公開の物もありますから、これぐらいしか書けなかったんですよ。作者の eagle です。

ヴェ「それはしょうがないが、もっと書きようがあったら。ヴェストールだ」

そんな事、何時も書き終わった後に思ってる事だよ…悲しい事に

ヴ《なかなか進歩してないようですね〜》

ごめんなさい。何かと衝動的に執筆している方ですから。

シ《と言うことは、何時も頭に浮かんだらそれを編集して書いてる

のですね?》

そうなんです。ほぼ全て脳内作業でやってます。

ヴ《ある意味スゴいです》

ヴェーいや、褒められる事じゃないから。そこそこ重い問題だから

このクオリティの低さはここから来てますから。

でも、下書きとかならないんで思い付くだけ思い付いて、それを脳内編集させてるだけだから、話が出来上がってる場合はそれなりに仕上がり早いんです。

シ《それがこのクオリティを産んでいるのですね…》

まあ、改善策は見つかってますからご心配無く。

それでは次回予告、ヴァールよろしく!

ヴ《了解です!

桜の咲き誇る春の日に、機動6課は晴れて創設。

スバルやティアナ達との訓練も今日からスタート!

そしてヴェストールは烈火の将シグナムと対戦!

果たして、勝利の女神が微笑んだのは?

次回魔法少女リリカルなのはStrikerS 〈ヴァルキュリア
の血を引く者〉第4話 始動

紺碧の破壊者は断罪の炎を…》

第4話 始動(前書き)

やっとのことで第4話…

相変わらずの駄文です。

なのにも関わらず、PVは10000越えました！

やっほい!!

では、第4話、スタートです！

第4話 始動

side???

新暦75年4月

ミッドチルダ郊外

機動6課隊舎内

部隊長室

「…という訳で改めて、今日から機動6課に配属されることになりました、本局魔導師のロンメル・ヴェストール一等空尉です。よろしくお願ひします」

「此方こそ」

「一年間よろしくね」

「何かと大変だと思っけど頑張る、ロン」

「よろしくですよ」

只今、ヴェストールは、改めてなのは達4人に挨拶をしている。

その時、はやてが何か思い出して、その事をリイーンに囁いた。

「(あ、そうや！リイーンは知らないと思うから言っておくけど、ヴェストール君がアイス食べてる時は、邪魔したらあかんで)」

「(何ですか?)」

「（え、えつと…）」

「（その…）」

「俺がぶちギれるからだよ。…まあ、リィーンはしないと思っけど
実は本人に聞こえてた。

噂された本人は澄ました顔だが、4人（特にはやて、フェイト、な
のはが）は、冷や汗が滝のよう。

「大丈夫ですよ皆さん」

ヴェストールがにこやかに言う。

「そ、そか。そうやね。いくら何でも上官相手に…「邪魔をしなけ
れば命だけは捕りませんから。」…なんかもう、全体的に無理やな」

“機動6課の死亡フラグが立ちました”と。

「はやてさん、そろそろ行かないとマズいのでは？」

そう言っつて自分の腕時計を見るヴェストール。
それにつれてはやて達も時間を確認する。

「おお！そうやったそうやった。ほな皆行こか」

「」「うん！（はい！）」「」

此処から全てが始まった。

本人達の、仲間の、親友の…

そして…

この世界の運命の歯車の狂いが。

s i d e o u t

130

s i d e ヴェストール

今、隊舎のロビーには機動6課全員が集まっている。

新人達、気合い入ってるけど、少し堅いか…？

因みに俺は、なのはさん達と一緒にいる。理由？…後で自己紹介するときに解る筈だ。

マスター、結構人がいるんですね

ヴァールが俺に念話を繋いできた。

…みたいだな

は念話です。

おっ、はやてさんが挨拶するな…

「機動6課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

…はやてさん、その落ち着きぶりは何？初めて部隊持つ人には到底見えないよ。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守っていく事が私達の使命であり、なすべき事です。

実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性の溢れるフォワード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ、全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています。

まっ、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動6課課長、及び部隊長、八神はやてでした」

はやてさんに盛大な拍手が贈られる。

「さて、続きまして、この機動6課に特別人員として来てくれた人を紹介します。ロンメル・ヴェストール特別捜査官です」

早速かい…まあ、何時も通りでやりますか。

そう思いつつ、壇上へ。

そういや、俺の名前が出た瞬間、数人が目を輝かせたのは気の所為？

「只今紹介に与りました。特別人員として機動6課に配属されることになりました、戦闘統括指揮官兼フォワード隊遊撃手のロンメル・ヴェストールです」

「は？どう言う事？」みたいな人は今回の“後書きトークショー”で持つてる資格を発表するので見て下さい。by作者

「今回が初めての部隊所属で色々大変ですが、精一杯頑張ってくださいますので宜しくお願いします」

自己紹介が終わり、俺を温かい拍手が包んだ。

.....

部隊での初挨拶を終えて、今は義姉さんとシグナムさんと一緒に歩いている。

「シグナム、ほんと久しぶりですね」

「ああ、テストロッサ。直接会うのは半年ぶりか……。それと、ヴェストールも、久しいな」

「そうですね。もう2年は会ってませんから」

「そうか、そんなに経つのか…」

…2年ってすぐ過ぎるのな。

「はい、同じ部隊になるのが初めてですね」

「そうだね。何はともあれ、シグナム、ヴェストール、どうぞ宜しくお願いします」

義姉さんが俺とシグナムさんに軽く会釈をしながら挨拶した。

「此方の台詞だ。大体、お前は私の直属の上司だぞ」

「シグナムさんの言う通り。俺も一応義姉さんよりも下だしな」

「それがまた、落ち着かないんだけど…」

少しは落ち着こうぜ義姉さん…。と言うか落ち着いてくれ。弟（義理だけ）の俺が落ち着かないから。

「上司と部下だからな…」

「同僚でもないし…義姉さんじゃない方がいいかな？」

「確かにそうだな…テストロッサにお前呼ばわりも良くないか。敬語で喋った方がいいか？」

「俺、シグナムさんに賛成ですね。義姉さん、俺も敬語で話す？」

「うゝ、そういう意地悪は止めて下さい。良いですよ。“テストタロツサ”で、“お前”で。ロンも、“義姉さん”でいいよ。…あつ、でも“お姉ちゃん”の方がごによごによ…」／／／／

「……シグナムさん、俺の姉がすいません」

「いや、気にするな。それにしても、大きくなったな」

「2年ですから。それなりに成長しますよ」

「そうか……。話は変わるが、久々に模擬戦しないか？どこまで強くなったか見てみたい」

シグナムさん模擬戦好きだな…前会った時は、少なくとも10回はやってたぞ。

まあでも、悪くないな。

「ええ、やりましょう！少し試したいものもあるので…」

「よし、解った」

さて、なのはさん達との待ち合わせは…時計を見ると、もうまもなくだった。

「…俺、そろそろ時間なのでなのはさん達の所行きます」

「うむ、では模擬戦はその後でいいな」

「はい！…とその前に…」

今、俺の隣のライティングの隊長は…

「はう、お姉ちゃん大好きだなんて……やん！ダ、ダメだよロン
…人がいっぱいいるじゃない……」／／／／／／／

……なんか独り言をぶつぶつ呟いて悶えてる。頬に手を当てて“いやんいやん”言いながら腰をくねくねしている。
そう、くねくねしている。大事な事なので二回言ったぞ。

はあ……義姉さん、何時の間にか妄想スイッチが入っちゃったよ。

「…………シグナムさん、すいませんが、この色惚け駄目姉貴を現実

に引き戻しといて下さい」

「……………心得た」

「それでは、また」

「ああ…ほらテストロッサ、目を覚ませ」

「…ロン、ダメだってば…こんな所でそんな…」 / / / / / /

「起きろ！テストロッサ！」

「ひゃうっ！は、はい！…あれ、ロンは…？」

「高町の所へ行くと言っていたが」

「そっそうなんだ…」

はあ…義姉さんがあれだと先が思いやられる。
さて、早く行かなきゃ…

side out

s i d e ? ? ?

ヴェストールがフェイトとシグナムから別れてなのは達の所へ急いでいる途中、見知った顔を見掛けた。

「あつ！ヴェストール君！」

「やっぱりか！ご無沙汰ですシャーリーさん」

彼女の名は「シャリオ・フィニーノ」。一等陸士で機動6課のメカニックデザイナー兼通信主任だ。そして、彼のデバイス「ヴァール」の開発者の一人。

「シャーリーさんも此方に？」

「ええ、今はなのはさんの所へ行こかと。それにしても、ヴェストール君もこっちに配属になったんだ」

「そんな所です。詳しくは歩きながらでも。シャーリーさんもなのはさんの所へ行く途中でしょうし…」

「そうだね。それじゃあ、行こっか」

「はい！」

.....

海に浮かぶ構造物の前に「高町なのは」は服装を正していた。

「なのはさーん！」

後ろから名前を呼ばれ、振り返ると……

「シャーリー！それにヴェストール君も！」

「シャリオ・フィニーノ」と「ロンメル・ヴェストール」が手を振って歩いている。

そしてもう一方を見ると、フォワードの4人がトレーニングウェアの姿で走ってきた。

なのはに合流した6人は、フォワードの4人はなのはの前に整列して、シャーリーとヴェストールはなのはに並んで立っている。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから、ちよっとだけ大切に扱ってね」

フォワードの4人は返されたデバイスを見る。

「それと、メカニックのシャリーと、さっき挨拶にあったけど、戦闘統括指揮官のヴェストール君から一言」

「え〜メカニックデザイナー兼機動6課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆は“シャリー”って呼んでるから、良かったら気軽に呼んでね。皆のデバイスを改良したり、調整したりするから、時々訓練を見学させて貰います。あつ、デバイスの事で相談があつたら、遠慮なく言ってね」

『はい〜』

「次は俺か…。朝にも挨拶したが改めて、戦闘統括指揮官兼機動6課フォワードのロンメル・ヴェストール一等空尉だ。ポジションはフリーアタッカー。コールサインはイージス1。デバイスは【シルフィード】と【ヴァール】の2つ、どちらもミッドチルダ式だ」

《初めまして。シルフィードです》

《初めまして〜マスターのデバイスのヴァールです！》

律儀にフォワードに挨拶する2つのデバイス。

「高度なAI積んでるな〜…」

ティアナが呟く。

「俺が直接教える事はあまり無いと思う」

「えっ？なんでですか？」

エリオが不思議そうな顔をしてヴェストールに訊く。

「ヴェストール君のスタイルはクロスレンジからアウトレンジまでの幅広い射程からの殲滅砲撃やクロスレンジでの斬撃、打撃の全てが独自のものだから直接教える事が難しいんだよ」

なのはが理由を代弁する。

「そう言う事。まあ、簡単なアドバイス位なら出来ると思う。これから一年間、宜しく頼む」

『宜しく願います！』

「うん。自己紹介も終わったし、早速訓練に入るっか」

しかし…

「は、はい…」

「でも、ここですか？」

…そう、この場には特に施設は無く、海に浮かぶ不自然な構造物のみ。訓練場のような物は見当たらない。

「それは違う。シャーリーさん、お願いします。」

「はい！」

ヴェストールがシャーリーに合図をすると、シャーリーが目の前に

ウィンドウを展開させ、操作する。

「機動6課自慢の訓練施設、なのはさん完全監修の陸戦シミュレーター。」

ウィンドウに“stage set”の表示が。

「ステージセット!」

それに触れた瞬間、海上の構造物から光が溢れ、そこには巨大なビル群が出現した。

「うわ〜…」

「す、すごい…」

「…なのはさん、これ凄くないですか?特に規模とか規模とか…?」

「それもそうなんだけど、これ大変なんだよね。特に費用とか費用とか…?」

ヴェストールはいろんな意味で啞然とし、なのははいろんな意味で苦笑い。

「なのはさんもヴェストールさんも、どうして二回繰り返したんですか?」

「しかも疑問系ですか…」

「それは勿論…」

「……ゴクッ！」

『俺（私）の気分だからだ（よ）！！』

ズザァー！！

スバルとティアナが顔からずっこける。

『あ、あははは……』

エリオとキャロ、そしてシャーリーは苦笑い。

「さてと、お前等。リラックス出来たか？」

「……はい？」

真剣な表情になったヴェストールの突拍子もない言葉に、キャロが頭にハテナを浮かべる。

「朝の時もお前等見てたけど、気合い入り過ぎて堅くなってたぞ」

『……?!?!?』

ヴェストールの続けた言葉にフォワードの4人は驚く。

「気合い入ってるのはいいけど、それで堅くなって、最高の結果を残せないんじゃない意味がない。だからこそ、適度に力を抜いてリラックス

クスしないとな……」

「……………」

何時の間にか、なのはもヴェストールの話に耳を傾けている。

「それじゃ、話が長いと訓練の時間が無くなるからこれでお終い。さっさと始めるぞ！」

『はい！』

ヴェストールの声に、その場の空気が引き締まる。しかし、フォワードの4人の表情は若干の余裕が見える。

「よし！その顔だ！」

4人の顔を満足そうに微笑むヴェストールの横で、なのははその微笑みに頬を赤く染めた。

……………

数分後……

よしと、皆、聞こえる？

『はい！』

フォワードに、ビルの屋上からなのはの念話が飛ぶ。

「それじゃあ、早速ターゲットを出していこうか」

なのははシャーリーに目配せして、ターゲットを出す許可をした。

「まずは軽く8体から」

「動作レベルC、攻撃精度Dってところですかね」

「うん！」

俺達の仕事は搜索指定ロストロギアの保守管理だ

シミュレーターの全体が見える位置を飛行しているヴェストールから、も念話が飛んできた。

その為に、私達が戦う事になる相手は…

『これ(だ)！』

2人の声と共に、4人の目の前の魔法陣から、水色で滑らかな楕円形の形をした機械が出現した。

自立行動型の魔導機械、近付くと攻撃して来るタイプね。攻撃は結構鋭いよ

「んじゃ、第1回模擬戦訓練」

「ミッション目的は、逃走目標物8体の破壊、又は捕縛」

「制限時間は15分以内」

『はい!』

それでは…

ミッション…

>>>スタート!!<<<<

なのは、シャーリー、ヴェストールの3人の声と共に、ガジェットが四方八方に散らばった。

……

「はあああ…でやつ!」

狭い路地にガジェットを追い込んだスバルは、瓦礫をジャンプ台にして、リボルバーシユートを放つが…

ドゴオオン!!

ガジェットはそれを軽々と回避する。

「何これ！？動き速！」

もう一方のガジェットが進むその先には、エリオが槍状の近代ベルカ式デバイスの【ストラダー】を持って待ち構えていた。

ガジェットはそれに気付き、エリオに攻撃するが当たらない。エリオはガジェットの攻撃を回避して…

「でやああああ……せやつ！はっ！」

ガジェットに対して二閃するも…

ズガァン！！

ズゴォン！！

スバルと同様に交わされ、ビルの外壁にぶつかる。

「ハアハア…ダメだ。フワフワ避けられて、当たらない…！」

「前衛2人！散開しすぎよ！ちよつとは後ろの事も考えて！」

> はっはい！<

> ゴメン！<

程近くのビルの屋上からティアナが指摘する。

「ちびっ子、威力強化をお願い」

「はい！【ケリュケイオン】！」

《Boost up Bullet power》

ティアナは、アンカーガンの先にスフィアも作り出し、合流したガジェットの内4体に標準を定める。

そしてキャロは、グローブ状のデバイス、【ケリュケイオン】でティアナにブーストを掛ける。

そして…

「シュート！」

ガン！

ガン！

ガン！

ガン！

スフィアを4発撃つ。

しかし…

シュウウン…

「バリア!?!」

「違います!フィールド系!」

「魔力が消された!？」

この事に驚くフォワードの3人。

「そう、ガジェットドローンには、ちょっと厄介な性質が在るの」

【アンチ・マギリング・フィールド】、通称【AMF】。攻撃魔力をかき消す事が可能だ。だから、通常の射撃魔法は通用しない。そして…

「あつ!くそ!このおゝ!!」

ヴェストールがAMFの特性を言い終わる前にスバルがウィングロードを展開し、ガジェットを追跡する。

「ちよっ!スバル、バカ!危ない!」

「AMFを全開にされると…」

なのはがシャーリーに合図をし、シャーリーはウィンドウにあるキ―をタッチした瞬間…

ブン…

「へっ!?!」

ウィングロードが不安定になり、消え…

「うわあああああ!!!」

ドゴオオン！！

スバルはビルに突っ込んだ。

「飛翔、足場造り等の移動魔法の発動も困難になるの」

スバル、大丈夫？

「つう〜〜！な、なんとか…」

ビルから土煙が上がり、スバルは頭を抑えながら立ち上がった。

まあ、訓練上では、皆のデバイスをちよつと工夫をして疑似的に再現しているたげなんだけどね。でも、現物からデータとってるから、かなり本物に近いよ！

「でも、対抗する方法は確実に存在する」

それがなんなのか、素早く判断し、素早く行動しろ！

「ちびっ子！名前何てつたっけ？」

ティアナはヴェストールの話の後、キャラロに名前を訊いた。

「キャラロであります！」

「キャラロ、手持ちの魔法とチビ龍の攻撃で何とかなる？」

「試してみたいのが幾つか…」

「私も在る…。スバル！」

開いていたウィンドウを閉じ、スバルに念話を飛ばす。

「OK！エリオ、あいつ等逃げないように、先行して足留め出来る？」

「えつとく… ティアが何か考えてるから、時間稼ぎ！ …はい！ やってみます！」

……

スタート地点近くのビルの屋上にて…

「へえ…皆よく走りますね…」

「危なつかしくて、ドキドキだけどね…」
「シャーリーはウィンドウを操作しつつ、モニターに映るフォワードの4人に感心する。」

「デバイスのデータ採れそう？」

「良いのが採れています。4機共完璧に仕上げますよー！」

《嬉しそうですね。シャーリーさん》

なのはとシャーリーにヴェストールから通信が着た。

「それは勿論！私のプログラムを組み込んだデバイスを使って、いっぱい活躍して欲しいからね」

《それは建前では？本当の所はデバイスを弄る事が好きなのではないですか？》

《シルフ、そうじゃなきゃ今までメカニック続けて無いぞ》

《そうでした。すみませんシャーリーさん》

「まあ、機械弄る事が好きなのは否定しないけど、本当の事だからね！」

《解ってますよ。また手伝って欲しい時は呼んで下さいね》

「ええ！レイジングハートさんも、お願いしますね。」

《All right》

一方その頃…

ガジェットが進む先には、スバルが地上に、エリオは高架の上で待機していた。

そして、ガジェットが高架の下に差し掛かる寸前に…

「いくよストラダー！カートリッジロード…！」

ガシユン

エリオがストラダーのカートリッジをロードし…

「ぜやああっ！やっ！はっ…！」

ガン！

ゴン！

ガン！

ザン！

ドン！

ダン！

ゴン！

ストラダーで高架に7閃し…

ズガガガゴオン…！

ガジェットを瓦礫とかした高架が潰した。しかし、その内の2機が上空に逃げた。

「潰れてろッ…！」

スバルは一方のガジェットにリボルバーナックルで潰しに懸かるも、AMFによって魔力が消される。

「やっぱ魔力が消されちゃうと、イマイチ威力でない…！」

ガジェットから距離を取ったスバルの背後から、もう一方のガジェットが近づく。

「それなら……」

スバルはそう呟くと、背後のガジェットに気付き、回し蹴りでガジェットを路面に叩きつけ……

「うおりゃああああ……!!」

馬乗りになってリボルバーナックルをガジェットにぶち込み、全体で3機目のガジェットを破壊した。

「よしっ!」

……

最終的には、“ミッションコンプリート”という結果になった。

キャラがフリードリヒのブラストフレアを用いてガジェットの動きを麻痺させ、練鉄召還の【アルケミックチェーン】により3機を捕縛。残りの2機はスバルが追い込んで、ティアナの多重弾核射撃の【バリアブルシユート】により撃破した。

今はフォワード4人も一緒のビルの屋上にいる。ただ1人を例外に…

sideout

sideヴェストール

発訓練直後

さてと、フォワードの初訓練が終わったところで…

「なのはさん、この後シグナムさんと模擬戦するんですが、良いですか？」

《うん、いいよ。フォワードの皆と模擬戦を観戦させてもらうけど、いいかな?》

「どうぞ。観てて手本になるかは解りませんが。シグナムさん。訓練終わったんで来て下さい。模擬戦やりますよ」

《解った。今すぐ行くこつ》

うわ、シグナムさんめっちゃやる気だわ。これは覚悟しないと、確実に負けるな…

.....
数分後、シグナムさんがレヴァンティンを持って騎士甲冑を纏って、俺の前に来た。

「すまない。待たせたな」

「そんな事無いですよ。何だかんだで楽しみですから」

「それは私もだ。最初から全力で行くぞ！」

シグナムさんがレヴァンティンを構える。

「勿論ですよ。此方も全力でやります！一人の騎士としての覚悟と誇りを持って！」

「その覚悟と誇りとやらを見せてみる！レヴァンティン！」

ドキュッ！

レヴァンティンの柄から薬莖が一発排出される。

レヴァンティンの刀身が炎を纏う。

「紫電一閃！」

「こつちも負けてらんない！本当の本気だ！ヴァール！」

カシュン！

ヴァールもレヴァンティンと同様に葉莖を一発排出した。
此方は紅い紫電を刀身に纏わせる。

「轟雷一閃！」

「はあああああ！！！！」

「うおおおおお！！！！」

俺もシグナムさんも一気に間を詰め、

ドゴオオン！！

刃と刃がぶつかり合った瞬間、爆発と共に強い突風に煽られた。
俺はそこから一旦距離をとる為に地上に降りた。

「くう！まだまだ！ヴァール！ダブルカートリッジロード！」

カシユンカシユン！！

「ランカーハンマー！！！」

《Ranker Hammer》

コイルした瞬間、ヴァールの銃身の先に、太さ50？、長さ1000
？程の円錐形の物が現れた。

「うおりゃああああ！！！」

俺は土煙が晴れぬ内に突っ込んだ。

しかし…

「レヴァンティン！」

《Schlangeform》

ドキュツドキュツ！

シグナムさんがレヴァンティンをシュランゲフォルムに変え、土煙を吹き飛ばし…

「飛龍一閃！」

「んなつ！？」

飛龍一閃を使ってきた。勿論、リーチが違いすぎる事と不意打ちの為に直撃し、

「ぐうツ！」

スドン！！

そのままビルの外壁に衝突した。

「ガハッ！」

「ヴェストール！お前の覚悟はそんなものか！？」

シグナムさんが俺の元へやってくる。

「くっ…まだだ…まだまだあつ！」

そう、俺はまだ負けちゃいない。それにまだ試してみたい事をやっていないのだから…

「シグナムさん、こっからが本番ですよ…！」

s i d e o u t

s i d e ????

「ヴァール！トリプルカートリッジロード！」

カシユンカシユンカシユン！！

ヴェストールはヴァールのドラムマガジンから3発消費する。

「来い！」

シグナムはレヴァンティンを元のシュベルトフォルムに戻す。

「はああああああ！」

ヴェストールは一気にシグナムとの間合いを詰める。

「爆打砲撃！ランカーショット！」

《Ranker shot》

先程と同じように、ヴァールの銃身の先にハンマーが出現する。

「既に見切っている！その様なものは効かん！レヴァンティン」

ドキュッ！

「紫電一閃！」

シグナムはそれを迎え撃つ為にヴェストールに向かってレヴァンティンを振り下ろす。

が…

「掛かった！」

《Wave Move》

「何っ！？」

ヴェストールの身体はレヴァンティンの刀身をすり抜けた（………）。

そして…

『Fire!!』

シグナムの背後からデバイスと人間の声が聞こえ、

ドオン!!

ハンマーが銃口から発射された、

ガイン!!

「うおお!!」

シグナムは反応出来ず、ランカーショットは背中に直撃した。
シグナムはそのまま向かいのビルに突っ込んだ。

「つくう…これは効いたぞ…!流石は元地上部隊のエース、当時の
近接戦1位2位を争うだけの事はあるな」

「近接戦最強のあなたから、このようなお褒めの言葉を頂き、光栄
であります、シグナムさん」

「ふっ…気にするな。それよりも、もうバテたか?」

「そう言うシグナムさんも、肩で息してますよ」

……

場所は移り、訓練時のスタート地点のビルの屋上

展開されたモニターに2人の鏝迫り合いを映している。

「す、凄い…！」

「これがヴェストールさんの実力…！」

エリオとティアナが呟く。

「にははは…やっぱりヴェストール君は規格外なの…」

「一度あいつ等の模擬戦観たことあるけど、ありゃ人じゃねーよ」

なのはとヴィータは苦笑いをしている。

ヴィータはシグナムに付いて来たので今はなのは達と一緒に観戦している。

「でも、あれだけ楽しそうなシグナムは久しぶりだな（あたしも今度ヴェストールに申し込んでみようかな…）」

ヴィータは少し満足そうに笑った。

.....

場所は戻り、上空……

シグナムもヴェストールも既に息切れしており、苦しそうであるが、何故か顔は笑っている

「はあはあ……んぐ、……はあシグナムさん、これで最後にしましょう」

「はあはあ……ああ、勿論だ。この一撃に全てを掛けよう」

「いざー！」

「尋常に！」

2人は改めてデバイスを構える。

「ヴァール！」

「レヴァンティン！」

『カートリッジロード！』

カシュン！

ドキュツ！

互いにカートリッジを一発ロードする。

「紫電……」

「轟雷…」

『一閃!!』

2人は間合いを詰め…

ドゴゴオオン!!

辺りを破壊されたビルから上がる土煙が覆う。

「どつちだ!」

ヴィータがモニターに叫ぶ。

そして…

チャキツ…!

「チェック・メイト、ですかね」

シグナムの首筋にヴァールの切っ先が当てられ、目の前には薄く笑

うヴェストールの姿があつた。

第4話 始動（後書き）

シ《シルフと》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ『後書きトークショー！』

ヴ《さてさて、第4話は如何だったでしょうか？》

シ《もうダメね》

ヴェ「最悪だな」

本当にすいませんでした！ 土下座
作者のe a g l eです。

シ《いい加減にして下さいね。全く、一つも成長してないじゃないですか！》

本当に、ほんとうに、すいませんでした！ まだ土下座

ヴェ「話は変わるが、作者よ。俺の所持している資格とはなんぞや？」

以下のもの全てです

・戦闘指揮官免許
（ある一定の点数を超えると全ての戦闘の指揮権を持つ戦闘統括指揮官となる。）

・特別捜査官系統資格全般

・執務官資格

・普通自動車免許

・普通自動二輪免許

・特殊車両運転免許

・機体操縦免許

e t c .

ヴェ「…かなりあるな（自分で言うのもあれだけど）」

ヴ《凄いです》

シ《何故プロフィールの時に書かなかったのですか？》

書き忘れましたー！てへっ！

ヴェ「…今すぐ地の果てに墜ちろ。ヴァール」

《Ranker shot》

や、や、やめろおおおおお！！！

グシャッ…

ヴェ「ふっすつきりした。と言うわけで、作者が変わって俺が次回予告させて戴きます。

前書きにあった通り、PV10000件を達成致しました！」

シ《こんな駄作をこんなにも…本当に有り難う御座います》

ヴ《と言うわけで、今回はPV10000越えを祝して、番外編をお送りいたします！》

ヴェ「内容は見てからのお楽しみだそうです。」

シ《それでは》

ヴ《この辺で》

作者以外「ばいばい！」

PV10000達成記念番外編！〜男の子 男の娘？〜（前書き）

PV10000越え記念の番外編です。

少ない出番ながらも、ヴィータとシグナムが崩壊しています。

お二人のファンの方にはスイマセン…

PV10000達成記念番外編！〜男の子 男の娘？〜

side???

5月某日

草木が眠る丑三つ時。機動6課隊舎のとある一室では、2人の女性の姿があった。そして、その手には…

「遂にできたわ、はやてちゃん！」

「でかしたで、シャマル！」

…なにやらピンクのシロップ状の液体が入った瓶が。

「これで明日、ロン君がどうなるか…うひひ、楽しみやな……」

「ウフフ…そうですね、はやてちゃん……」

この2人の下らない興味本位と、しょーもない欲望はヴェストールに毒牙を向けた。

………

翌日…

午前11時30分
陸戦シュミレーター

「よし！これにて本日の訓練は終了だ。午後はフリーだから、しっかり身体休めろよ！」

『は、はい〜…』

「ロン君、教導お疲れ様。フォワードのみんなも訓練お疲れ」

機動6課での初の主張任務を終えてから数日。ヴェストールは教官試験を合格できるように、今は機動6課でなのはとヴィータと共にフォワードをしょごいて経験を積んでいる。

「や、やっと終わった〜…」

「エリオ君、早くシャワー浴びないと風邪ひくよ？」

エリオは疲れの余り、その場で大の字に倒れ込んだ。それを見て、キャロが注意する。

「もう立てない〜！ティア、手貸して〜…」

「嫌よ！こつちだつて足ガクガクのパンパンなんだから…」

「そ、そんな〜…」

「スバル、手貸そうか？」

「あ、ありがとうございます。なのはさん」

スバルはその場に座り込み、ティアナに手伝って貰おうとしたが、拒否された。しかし、捨てる神あれば拾う神あり。なのはが手を貸してくれたのだ。

「なあヴェストール、この後お前の部屋に行って良いか？」

「良いですよ。何時もの事ですから、ちゃんと用意はしてありますよ」

ヴィータは少し前からヴェストールの部屋で、彼の作ったケーキやアイスを食べるのがオフの時の習慣になった。そして…

「ロン、今日はなにを用意したの？」

「レアチーズケーキとパッションフルーツのシャーベットだ」

「ほゝ…また凝ったの作ったなあ。またレシピくれへんか？」

「良いですよ」

「ありがとうな、ロン君」

「ヴェストールの作るデザートは天下一品だな」

「有り難う御座います。シグナムさん」

「私も食べたいです！」

「僕達も良いですか？兄さん」

その評判は6課の中で広がり始め、今やフォワード全員とロングア
ーチでオフの時に茶会を開く事もしばしば。

また、彼の作るデザート味の評判は瞬く間に広がり、“今では管
理局で知らぬ者いない”とまでも言われるようになった。

その時に付けられたら二つ名は…

【管理局最強の達人シェフ】

である。

これにより、テレビ局からの番組出演のオファーや雑誌の取材依頼
などが後を絶たない。

それと、何時の間にかはやてもなものはもヴェストールの事を“ロン
君”と呼ぶようになった。

更に、エリオとキャロから“兄”と慕われ始めたのは主張任務の時
からである。

「別にいい。でもその前に、シャワー浴びて、昼食を食べに行く。
早くしないと置いてくぞ」

『はい！』

………

フォワードの4人はシャワーを浴び、今は昼食をとっている。

「うーん…何故あの2人はあそこまで腹に収める事が出来る？」

「今更ですよヴェストールさん。あの2人ですから…」

「………すまん、人として納得できん。暫く頭を整理させてくれ」

「にやはは…ロン君、2人共人だよ」

さて、今現在の食堂の様子を見ていこう。

座り方としては、

なのは、フェイト、はやて、ヴェストール、リイン

と、

スバル、エリオ、ティアナ、キャロ、フリード

最後に、

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ

である。

ヴェストールと背中合わせのように座るのがティアナ、右隣がフェイト、向かいがなのは、左隣がはやてで、テーブルの上にリインだ。

ティアナのテーブルは、向かいにエリオ、右隣にスバル、左隣にキヤロ、地面にフリード。

ヴィータのテーブルは、背中合わせにはやて、右隣にシグナム、左隣にシャマル、地面にザフィーラである。

そしてテーブルの上には…

スバル、エリオ、キヤロ、リイン以外… 1人前

キヤロ、リイン… 0 / 5人前

スバル、エリオ… 5人前

そう、ヴェストールはこの5人前を平らげようとしている2人を見て、呆れかえっているのだ。
スバルと長い付き合いのティアナはこれに慣れている。

「スバル、エリオ。そんなに食って苦しくならないのか？ 見てるこっちが苦しくなってくる…」

「へんへんはいほうふへふほ（全然大丈夫ですよ）」

「いふほこへふはいはへへはふほ（何時もこれくらい食べてますよ）」

「…… 2人共、口に何か入ってる時にしゃべるな。マナー違反だ。」

……ウップ。マジで気持ち悪くなりそう」

「ロン君、リバーズせんといてや……」

「リバーズはヤですよ……」

「……善処します」

side out

……

side ヴェストール

なんとか昼食は終わり、現在はスターズ、ライトニング、ロングア
ーチの全員が俺の部屋にいる。

……それにしても、自分で言うのも何だが、簡単に10人以上入る
この部屋は一体……？

まあそれはさておき、今俺は全員分のレアチーズケーキとパッショ
ンフルーツのシャーベットを皿に盛り付け、はやてさんが紅茶を淹
れてくれている。

行動が早くて助かる……。

……

「これで最後だな…はやてさん、紅茶有り難う御座います。これ、今日用意したやつのレストランです」

「おおきにな。はい、ロン君の」

はやてさんが俺に紅茶を渡してくれた。これを飲んでどうなるか、その先を知らずに…

「どうも。それでは、どうぞ皆さん召し上がって下さいー」

『いただきますー！』

side out

side はやて

「はい、ロン君の」

「どうも。それでは皆さん召し上がって下さいー」

フツッ…うまくいったぞ…！

さつき渡した紅茶にはシヤマルが調合してくれた薬を入れておいたんや。あれは無味無臭やからバレる心配はあらへんし、半永久的に効果持続するんや。元に戻すには、もう一つの薬を飲まなければならんしな…。

『いただきます!』

さあ、この手でロン君を頂く、もとい愛でゲフンゲフン!…まあ兎に角、今日の夜からお楽しみや…ぐへへへ…!

「?はやてさん?どうかしました?」

「あ、いや、何でもあらへんで」

さあロン君、覚悟しいや…

side out

.....

side ヴェストール

『しつ馳走様でした!』

「はい！お粗末様でした」

今日も大成功に終わったな…なのはさんに喜んで貰えたから目標達成かな。

それにしても、スバルとエリオの食べる量は考慮していたけど、まさかヴィータさんまでとは…

まっ、いつか！“終わり良ければ全て良し”だからな。

「さて、後片…付…け…し…な…い…と…」

ボタン

急に目眩がして、何時の間にか俺の意識は闇に沈んだ。

side out

……

sideなのは

午後6時15分

今日もケーキも美味しかったの。流石はロン君だね。

「そろそろ夕食だからロン君誘おうかな…」

それではロン君の部屋に行っただけど…

コンコン

「ロン君、食堂行こ？」

「……………」

…返事が無い？

「ロン君？入るよ……………」

…で、部屋に入ったら、お茶会の時のまんまで、床に知らない女の子が倒れてたの！

「だっ大丈夫！？しっかりして！」

「どうしたんですかなのはさん!？」

「なのは、大丈夫!？」

その時、フェイトちゃんとスバルが来てくれたの。

「私はなんとも。だけど……」

「この子誰ですか？」

「なのはの知り合い？」

「全然。知らない子なんだけど……どこかで会ったような……」……
……ん……」気がついた！」

女の子が目を覚ました！

うっん……大きくて、くりっくりの鮮やかな紅い眼が可愛い！

「……あれ？俺は今まで何を……って、なのはさん！？義姉さんにスバルも……どうしたんだ？」

『へっ……！？』

「？何？記憶喪失なんですか？俺だよ。ロンメルだよ」

『ええ……！！』

なんと、女の子の正体はロン君だったの。

言われてみれば、確かにロン君っぽい所がいくつかあるんだけど……

普通に女の子にしか見えないの！

s i d e o u t

.....

s i d e ? ? ?

午後6時45分

食堂にて...

「何故俺がこんな目に...ブツブツ」

『はうう...かわいい』 / / / / / / / / / / / / / / / /

現在の状況

ヴェストール：薄水色のワンピースに黄色のリボンでツインテール。
髪は銀で腰まであり、身長は5、6歳の平均身長ぐらい。
フェイトの膝の上に座って、キツく抱きしめられ、髪を梳かされている。

エリオ、ザフィーラ、フェイト以外：顔真っ赤で物凄く悶えてる。

フェイト：顔真っ赤で悶えているものの、ヴェストールをキツく抱

きしめ、髪を梳いている手の動きは止めない。

エリオ：ちよつと羨ましそうながらも、苦笑している。

ザフィーラ：呆れかえっている。（特にはやて、シャマルに）

「はふう〜…幸せ〜…」 / / / / /

スリスリ

「義姉さん！頬擦りしないでくれ！恥ずかしいから！」 / / / / /

「いゝやつ！」

「そ、そんな〜…」

「フエイトちゃん！お風呂は私がいい！」

「ダメやでなのはちゃん！お風呂は私や！」

「2人共ダメです！お風呂は私です！」

「違うよティア！私だよ！」

ガヤガヤ……

「さて、飯飯！早く食お……う………」

ちょうどその時、ヴァイスが食堂の中に入ってきて、今のこの状況に啞然とした。

「！ヴ、ヴァイスさん！助けてー！！」

「ロン（君）（ヴェストールさん）（ヴェストール）は私が食べるんです（だ）！！」

「ちょっと待った！話が反れてる！反れてるから！ヴァイスさんも突っ立ってないで早く助けて下さい！」

必死にヴァイスに救助を求めるも…

「……c h a o sだ…まさにc h a o sだ…！」

ヴァイス：思考停止

「ヴァイスさんが…！！…早く誰でもいいから助けてくれ…！！」

ここに行き着くまでの30分間はこんなんです。

ヴェストールが小さくなって発見される

なのは、フェイト、スバルに抱きつかれる

服を借りる為にエリオ、キャロの部屋に行く（ヴェストールは抵抗するも、あえなく敗北）

途中で、ティアナに見つかる

思いつきり抱きつかれる（ティアナの眼がいていた。）

部屋に到着！キャロに抱きつかれる

早速キャロに服を拝借しようと思ったが、サイズが大きすぎた

そこにはやて登場！

また抱きつかれる（既にお約束？）

部隊長室にちょうど良いのがあるらしい

ヴェストールが隙を見て脱走を図る

あえなく捕まり、はやてに抱きかかえられる。

部隊長室に到着！早速服を探す

何故かサイズが合うワンピースが在ったのでそれを拝借！

ヴォルケンスに遭遇。ザフィーラ以外に抱きつかれる（お約束です！）

さあご飯を食べよう！

ヴェストールを巡って【第一次ヴェストール争奪大戦】勃発！（普通に白熱したじゃけん）

フェイトが一番に！

ヴェストールを膝に抱えながら夕食

夕食が終わり、風呂の話へ

話の争点がズレ始める

誰がヴェストールを食べる（愛でる）かに発展。間もなく【第二次ヴェストール争奪大戦】勃発？

ヴァイスがその状況を目撃！一瞬で思考停止に

今に至る

『さあ、誰に食べられたい(んだ)(ですか)(の)！?』

「早く正気を取り戻せ色惚け駄目女ど…」『至^だって正気(だよ)(です)！』…俺の貞操が…」

ヴェストールがさめざめと涙が流す。

すると、ティアナが

「ヴェストールさん大丈夫ですよ。…」ティアナ…!」「こ^ういう時はみんなで協力です!一緒にやりましょう!」「…もうやだ」

ヴェストールに止めを刺した。

「さ、ロン…」 / / / / /

「一緒に…」 / / / / /

「イきましょう…」 / / / / /

「大丈夫だ…」 / / / / /

「痛くないですよ…」 / / / / /

「ずっと…」 / / / / /

「気持ちいいままやから…」 / / / / /

「ウフフ…」 / / / / /

キャラ口を省いた9人が眼をキュピーンとさせ、手をワキワキしなな

がらヴェストールに襲い掛かる。

「うわあああ！シルフ！ウェーブムーヴ！《Wave move》」

『…逃げた（な）（の）（の）』

ヴェストール：ウェーブムーヴでLogout

sideout

sideヴェストール

午後8時

ヴェストールの自室

「し、死ぬとこだった…！」

何故俺の身体がこんな事に!?

「しかも12年前の身体かよ………」

あの日、あの時、あの場所で、俺は多くの物を失った。失いすぎた。

「…畜生………」

…あゝもう！やめだやめ！これはこれ、既に割り切った事だ。掘り返しても意味がない。

そんな事を考えてたら、自然と欠伸が出た。ふと掛け時計を見ると、何時の間にか9時を過ぎていた。そして俺は今5、6歳の身体だ。

「通りで眠いわけだ…しゃーない、エリオに手伝って貰って風呂行つて、さっさと寝よう」

そう思い、俺はエリオに念話を飛ばす。

エリオ。今大丈夫か？

ええ、どうしたんですか？

すまない、今から俺の部屋に着てくれ。風呂に行きたいんだ

えっと…はい！解りました！

………

数分後…

コンコン

「誰だ？」

「エリオです」

「入ってくれ」

「失礼します…」

「悪いなエリオ。俺の所為で」

「いいですよ別に。気にしないで下さい」

「どうも。んじゃ早速、行きますか」

「はい！」

そう言っただけで俺達は部屋を出た。

しかしここで、思わぬ伏兵がいるとは知らずに…

「ロンみーつけた！」

『義姉さん（フェイトさん）！？』

義姉さんが待ち伏せしてやがった…クツソク油断してた！

「エリオ！逃げろおおお！」

エリオと共に逃走を図ろうとしたら、足が動かずその場でコケた。

理由は簡単。はやてさんとなのはさんが俺の足にバンドを掛けていたからだ。

「ダメやでロン君。お姉さんの言う事はちゃんと聞かな…」

「早くお風呂行こ…?」

2人共、妖しい笑みを浮かべていた。

……やべえ、今なら簡単に気絶できそう。

「してもいいよ。私達が介抱するから…」 / / / / /

……やっぱり辞めとこ。あと、義姉さんは俺の心を読むな。頼むから。

「それは無理な相談やな」

何故!? Why!?

「だって…声に出てるもん」

ガーン…

「落ち込んでないで、早くお風呂入りに行こ」

我が義姉に抱きかかえられる。マズい！本格的にマズい！

「エリオ！ヘルプミィー…！」

「…ごめんなさい。無理です。フェイトさん達が怖いんです。餌食になりたくないです。本当にごめんなさい。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

エ、エリオまでもかつ…！

「身体をキレイにさましようね」

「イイイヤアアだあああ！！！！」

………

1時間後、俺は男としての大切な何かを失った感覚を覚えながら、義姉さん達に連れられて義姉さん、なのはさん、はやてさんの3人の暮らす部屋の中に入った。

風呂はどっちに入ったかつて？

……言わずとも解るだろ…思い出させる気か？恥ずかしい記憶を思い出させて殺す気か？

「ロン君、誰と話してるのかな？」

「い、いや別に…何でもないです」

「あ、そうやそうや！寝る時は私がロン君の隣に寝るで」

「駄目だよはやてちゃん。私がロン君の隣だよ！」

「ロンは私と寝たいんだよね？」

義姉さん達がまた近寄ってくる。

えっと…服装が服装なので、目のやり場に大変困るのですが…

なのはさん、はやてさん：＼シャツ着て、胸元開けて、下は下着しか着てない。

義姉さん：黒のネグリジエ

そしてもう二つ

一つ目は、はやてさんがどこからだしたか解らないけど、ピンクのパジャマを俺が着てる事。

そしてもう一つは…

「あの…皆さん、近過ぎでは？そ、その…む、む胸とか当たってるんですが…」

兎に角皆さんとの距離が近すぎる事

「違ってロン君。当たってるんや無くて、当たってるんや」

…確信犯ですか。

とその前に…

「ちょっと待った。何故俺は義姉さん達3人と寝なきゃならんのだ。俺は男ですぜ」

「…ダメ…なの？」

やめてっ！上目遣いで俺の瞳を見つめないでっ！潤んだ瞳で見つめないでっ！

しかし！俺はこんな所で折れてはいけないのだ！

「だって俺、男だよ。普通ならしないだろ？」

「大丈夫だよロン君。とつてもかわいいから」

グサツ！ヴェストールは9999999999999999のダメージを受けた。

「かわいいは正義やで」

「やだ。絶対に寝ない。3人とは寝ない！」

「ホンマに…ダメなん…？」

…絶対に…折れてはいけない…

「お願いだから…」…絶対に…折れては…

『一緒に、寝て…』 / / / / / / / /

……

「……解りました」

ごめんなさい。無理でした。

そりゃ無理ゲーですよ！絶世の美女が涙目＋上目遣いですよ！これでも持った方ですよ！少しは褒めてくれても良いじゃないですか！

……リア充氏ねby作者

「……ヲゐ作者、何時か消し炭にしてくれようぞ……」

「どうかしたん？」

「いえ別に。独り言です」

「それじゃ、電気けすよ〜」

パチッ

なのはさんがスイッチを切り、部屋の電気が消える。

「おやすみなさい」

無駄に抵抗とかして余計にややこしくなりたくなかった俺は、さっさと寝ることにした

『おやすみ、ロン（君）』

3人の声を聞いた後、俺の意識は不思議なぐらいにスツと奥深くに消えていった……

side out

……

side はやて

「スウ……スウ……」

『……………』 // // // // //

ロン君、おやすみ言うてからすぐに寝てもうたけど、その寝顔が……
// // // //

「アカン、可愛すぎるわ……」 // // // //

「癒されるの〜」 // // // //

「……ハアハア……ロン……可愛い……ハアハア……」 // // // //

フェイトちゃん、眼がアカン事になつとる。しかも鼻血がポタポタと……ってちよい待ちい！

「フェイトちゃん！鼻血！鼻血出とるで！なのはちゃんはティッシ

「持ってきて！」

「はい！ティッシュ！」

「へっ？あ、ホントだ。ありがと、はやて、なのは。フガフガ」

フェイトちゃんをここまでやるとは…ロン君、侮れんな…

side out

.....

side???

翌日…

午前6時

「…つむう…ん…」

体が重い…息苦しい…

そう感じたヴェストールは眼を醒ますと…

「む———！」

目の前真っ暗、呼吸が出来ないといふかなり危険な状況。しかも顔、右手、左腕が特に重い+柔らかいものが…

そこでヴェストールはその場から脱出しようと思ったら…

「あん…………」 / / / / /

「う…ん…」 / / / / /

「はふっ…」 / / / / /

3人の声が漏れた。

「むぐー！むぐぐー！！」

「ロン君、大胆なの…」 / / / / /

「触りたかったら言ったらええのに…」 / / / / /

「むぐー…ぷはっ！く、苦しかった…！」

「あゝあ、良い抱き心地だったのに…」

「…皆さん、少しは自重して下さい。さもなけば1週間シカト」

三者三様の発言に対してヴェストールの採った事は1週間シカトの刑の宣告だった。

「さ、なのはちゃん、フェイトちゃん。仕事始めるで！」

「うん！さあ、今日もしっかり頑張っ行ってこー！」

『おー！』

やっぱりそれはイヤだったらしい…

「…よし、理性は保った。さて、俺もそろそろ…何故戻ってない」

そう、ヴェストールの身体は未だに5、6歳の時のままだった。

「これは一体…？まあ、気にしてても意味がない。さっさと起きてシユミレーターへ行くか」

因みに服は何時の間にか着替えられ、白のノースリーブワンピースにライムグリーンのカーディガンを着ている。

一番最後に部屋を出て、隊舎の廊下を歩いていると、ザフィーラがロビーを歩いていた。

「あ、ザフィーラさん！おはようございます！」

「…ああ、ヴェストール。ちょうど良かった、探しているところだったんだ」

「俺を…ですか？」

すると突然、ザフィーラがこんな事を口走った。

「そうだ。で、早速だが、何故その身体になつたか、知りたくないか？」

「えっ、知ってるんですか？」

「勿論だ。何せ犯行現場を見たからな……」

実はザフィーラ、一昨日のあの時、なかなか眠れなかつたらしく、少し外にいたらしい。それで部屋に戻る途中、はやてとシャマルの話声が聞こえた為その方へ行ってみると、2人が黒い笑みを浮かべながら、ピンクの液体の入った瓶を持っている所を見たと言つのだ。

「なるほどなるほど……有り難う御座いますザフィーラさん。これで全てが解決です」

「そうか……良かったな……」

「はいっ！」

……

午前8時

食堂

「はい、ロン君。あ〜ん」
//
//
//
//

「あ〜ん」

『はうう〜！かわいいい〜！』 / / / / / / /

昨晚の食堂とほぼ同じ状況の食堂。

違う所を挙げれば、ヴェストールの座っている人物がティアナである事と、ヴァイスが元に戻って普通に朝食を取っている事だろう。

「ふにゆ〜…ヴェストールさん…癒される〜…」 / / / / / / /

スリスリ…

「ティアナ、時間無いから早く食べる。そして頬擦りするな」

ヴェストールはそう言いながら朝食を取っている。(偶に色んな人からあ〜んをされ、それを渋々応じている。)

しかし、そこは流石のヴェストール。昨日で抵抗が出来たのか全く動じていない。

「そうだ。シャマルさん、はやてさん、後で俺の部屋に来て下さい。話があります」

シャマル、はやての反応

『へっ?』

キャラ、エリオ、ティアナ、ザフィーラ、シャマル、はやて以外の「い〜な〜シャマル先生と部隊長」

「後でお話なの。内容によってはロン君共々O H A N A S H Iなの」

「なのは、私も入れて」

「あたしもやるぞ」

「主には申し訳無いですが、私も参加させて頂きます」

ティアナの反応

「はうう〜…ヴェストールさん…ジュルリ…ハアハア…」

ヴェストールの返し

「大丈夫ですよ皆さん。俺がするのはただのお話し（O H A N A S H I）デスから…」

その瞬間、このやり取りを聞いていた全員は、その場の空気が氷点下になったのが解った。

しかし、シャマルとはやては浮かれていた為、自らの命の危機に気付かなかった。

ザフィーラの反応

「……………自業自得……………はぐはぐ」

……………

30分後

ヴェストールの部屋

コンコン

「はい」

「私や。シャマルもいるで」

「どうぞ入ってください」

「お邪魔します」

話の全容に気付かなかったシャマルとはやては、普通にヴェストールの部屋に入っていた。

カチャ

「ん？何の音？」

「……OTANO SHIMIの始まりの合図ですよ……。シ
ルフSet up. Yes my master. Stubby
really, set up.」

「な、何が始まるんや!？」

「ディメンションウォール、グラビティシールド」

d 《Dimension Wall, Gravely shield

部屋の中にディメンションウォールとグラビティシールドを使い、
結界を張る。

「お二人にお訊きしたい事があります。平和に後生を過ごしたければ、正直に俺の質問に答えて下さいね…」

「え、ええで！どんと来い！」

そうですか…それでは早速。お二人は男に隠している事がありますね…」

「な、何の事や？シャマル、隠し事なんて在らへんよな」

「え、ええ。そうですよ！ヴェストールの考え過ぎなのでは？」

シャマルとはやては冷や汗ダクダクで惚ける。

「惚けても無駄ですよ。此方には確かな証言が在りますから」

「その証言とやらはなんや？」

「…ザフィーラさんが一昨日の深夜、あなた達を見たと言っています」

ギクッ！

「そ、それは幻覚なんやないんか？」

「さあ？そしてもう一つ。ザフィーラさんはあなた達がピンクの液

体に入った瓶を持っている所を目撃したと…「な、なんでその事を！確かに誰も…「シヤマルアカン！！」あつ！！…へ…：そうなんですか…」

「な、何がや！」

未だに惚け続けるはやて。

「鎌を掛けたんですよ。…まさかホントの事とは…」

その後、ザフィーラから聞いた事を事細かに言い、2人を追い詰める。

「…これでも否定しますか？」

「くう…ザフィーラめ…後でお仕置きや…！」「その前に俺からお仕置きしておきましょう」「ほ、ホンマなん？ありが…」「あなた達お二人に…」

「イヤやで！そんな事認めへん！シヤマル！ロン君を倒すんや！今なら出来るで！」

「…いい加減にしないと、消し飛ばすよ…」

ヴェストールから蒼いオーラが溢れ出す。

「お、幼い身体になったのにそんな事出来るん…」「シルフ、ダブルカートリッジロード、ストライクブレイカー《Boublencartilage lord・Strike Breaker》」

「…？」

『……………Fire.』

スドゴゴゴゴゴ！…！

「……………ですね」

『ごめんなさい…！』

ガクガクブルブル…

「ふう…解れば良いんです。早く解毒剤を…」「ど、どどどどどどぞ…
！」「…どうも」

……………

かくして、ヴェストールは元の身体に戻す事が出来、シャマルとはやての2人にはお茶会2回分のお預けを罰とされた。

ヴェストールの身体が元に戻った事に不満を漏らした人には、ヴェストール自ら鉄拳制裁を下し、身体が小さい時の全ての記録、データ、写真、画像等はシルフを使って消去した。

その時のヴェストールを見た者はこう語る。

“蒼い鬼神がいた”

と…

s i d e o u t

PV10000達成記念番外編〜男の子 男の娘?〜（後書き）

シ《シルフト》

ヴ《ヴァールの》

シ・ヴ『後書きトークショー!』

ヴ《さてさて、今回は番外編、【男の子 男の娘?】をお送りしました〜!》

シ《マスターの子供姿… good jobです作者…!》

ヴェ「ヲモシルフ、叩き壊されたいか?」

まあまあ、今回はシルフに褒められて少し嬉しい作者の eagle です。

ヴェ「何が“嬉しい”だ今すぐ殺してやる。ヴァール、Set up p.《やです〜!》何故だっ!」

ヴ《作者はいい仕事をしたです〜!ノーベル賞物です〜!》

ヴェ「…俺に味方はいないのか…」

今のところ…ね。

ヴェ「…現実のバカーー!」

シ《…行っちゃいましたね》

…うん、ちょっと弄り過ぎたね。と言っ訳で、この人召還！

フ「えっ！？何？何なの？」

ヴ《すいませんフェイトさん、マスターを慰めて来て下さい。私達が弄り過ぎて泣いちゃいました》

今ならフェイトにたっぷり甘えてくると思っよ。

フ「今すぐ慰めてあげるから待っててね！ロン！」

…成功だな。

シ《…大成功ですね》

ヴ《そんな所で、次回予告いってみよ！シルフお願い！》

シ《部隊ができて早数日、フォワードの新人4人は訓練後、新デバイスを配られた。

そしてその時、機動6課のアラームが鳴り響く。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜ヴァルキュリアの血を引く者〜第5話初任務と蒼き炎》

ヴ《蒼き炎は闇を燃やし…》

…台詞捕られた…

第5話 初出勤と蒼き炎 前編（前書き）

大変永らくお待ちしました！

第5話です！

第5話 初出勤と蒼き炎 前編

side???

午前7時30分

陸戦シユミレーター

「はい！せいれーっ！」

『はい！』

機動6課が設立されて早数日。ここまで休み無しに訓練訓練また訓練の日々だ。

フワード達は既にボロボロ。息もかなり上がっている。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト一本。みんな、まだ頑張れる？」

『はい！』

「それじゃあ、シユートイバージョンやるよ。レイジングハート」

《All right・Accelle shooter》

宙に浮いているのははレイジングハートに命じ、アクセルシューターを発動させる。総数15。

「私の攻撃を5分間、被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを当てればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。頑張って行こう！」

『はい！』

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を5分間、捌ききれれると思う？」

ティアナが3人に訊く。

「無い！」

「同じくです！」

「じゃあ、なんとか一発入れよう！」

「はい！」

「よし、行くよエリオ！」

「はい！スバルさん！」

なのはは全員の用意が完了したところを見計らい……

「準備はOKだね。それじゃあ、Ready……」

なのはが右腕を振り上げ……

「…GO!」

4人のに向かって一気に振り下ろし、全てのスフィアを叩き込む。

「全員、絶対回避！2分以内に決着付けるわよ！」

『おう！（はい！）』

ティアナの掛け声と共に4人全員が散らばり、4人のいた所に全てのスフィアが落ちる。

直後、なのはの右後ろにウイングロードが出現。そこをスバルが突っ走り、反対側のビルからティアナが射撃態勢に入っていた。

「アクセル！」

《Snipe shot》

なのははそれに気づき、近くに在る2つのスフィアを飛ばす。しかし…

…それは当たらなかった。

実はさっきの2人はティアナのシルエットで創り出した罠。

「シルエット…やるねティアナ…」

その時、

「うおおおおおー!!」

ビルの上から地面に垂直に延びたウイングロードにスバルが滑り降り、なのはにリボルバーナックルで殴りに掛かる。

なのははそれをプロテクションでガード。もう2つのスフィアを操ってスバル目掛けて飛ばす。

「うわっ!…と…」

「うん、良い反応」

スバルはバランスを崩すも、辛うじて回避。スフィアから逃げる。

「スバル、バカ!危ないでしょ!」

「うっ、ゴメン」

「待つてなさい。今撃ち落とすから…」

そう言ってアンカーガンの狙いを、スバルを追い掛けるスフィアに定めたティアナ。

アンカーガンの引き金を引く。しかし…

ガチャン!

「えっ!?!」

弾が詰まり、魔力弾が弾けた。簡潔に纏めると、不発に終わったと言っ事だ。

「うわ〜! ティア援護〜!」

魔力弾に追い掛けられるスバルは既に手一杯で、もう少しで追い付かれそうだった。

「〜っ! この肝心な時に…!」

ティアナは再度カートリッジを装丁し、新たに魔力弾を形成。なのはスフィアに向けて射撃した。

「きた…!」

それを見たスバルはウイングロードから飛び降り、回避。なのははさも満足げな笑みを浮かべる。

「我が乞うは疾風の翼 若き槍騎士に駆け抜ける力を…」

《Boost up・Accelerate》

そしてその陰で、エリオはストラダをなのはに向け、キャロはケ

リケイオンを使い、ブーストを掛ける。
途端、エリオの魔法陣は更に強く光り、ストラダの噴射ノズルから魔力が吹き出す。

「あの、かなり加速が付いちゃうから、気を付けて」

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから…行くよ！ストラダ！」
ストラダはそれに応えるように更にブーストを強める。

一方なのは、ティアの魔力弾を回避し続けていた。すると…

「キユク〜！」

フリードからブラストレイが放たれ、なのははなんとかよける。その時にブーストの掛けられたストラダとエリオを発見。それを向かい撃つように接近する。

「エリオ！今！」

「いつけええええー！！」

《Spear aungriff》

エリオはストラダを右手に持ち、なのはに向かって地面を蹴る。それと同時にストラダのブーストも最大になり、なのはへ一直線に飛んでいく。

「でえやああああ！」

ドゴオオン！！

なのはと交錯し、爆発が起きる。

「うわあああ！」

エリオは爆風によって空中に投げ出されるも、なんとかビルの側面に着地し、出っ張りの部分に左手を引っ掛ける。

「スバル！」

「外した！？」

煙が晴れる。

《Mission complete》

「お見事。ミッションコンプリートだよ」

「本当ですか！？」

「ほら、ちゃんとバリアを抜けて、ジャケットまで通ったよ」

エリオの問いに、なのは自らのバリアジャケットの左肩の辺りに付いた小さな焦げ後は指した。

「今朝はここまで。みんな、集合して」

『はい!』

なのははレイジングハートを待機状態にして、整列しているフォワードの所に行く。

「みんな、チーム戦にも慣れてきたね」

『ありがとうございます!』

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ。指揮官訓練受けてみる?」

「い、いやあ…戦闘訓練だけでいっぱい입니다…」

それこそティアナは以ての外もつてのほかでも言いたそうな感じだったが…

「一応ヴェストール君も指揮官だから、時間さえあれば色々教えてくれるかもね」

となのはが続けると…

「はあ…あつでもそれもそれで…」 / / / / /

只今からティアナの妄想タイムby作者

「よし、今日は此処まで」

今日も午後からヴェストールとの指揮官訓練を受けているティアナ。

「あ、ありがとうございます…」

ティアナはその場でへたり込んだ。午前中の戦闘訓練もかなりの物だが、午後からの指揮官訓練はそれ以上の辛さである。

「今日もよく頑張ったな」

そう言って、ティアナの頭を優しく撫でる。

「あ、ありがとうございます……」 / / / / / / / /

撫でられたティアナは顔を真っ赤にして気持ち良さそうに目を細めた。

「さてと、早くシャワー浴びて汗流してこい。続きはまた明日だ」

ヴェストールは手をティアナの頭からはなし、シュミレーターから出ようとすする。

これまで、ティアナはずっと前から言いたかった事が在った。しかしそれを言いおつと思ってもなかなか言い出す事が出来ず、とてもモヤモヤしていて、本当にどうにかなりそうだった。

しかし、今回は違う。今までよりもずつと覚悟や意気込みが桁違いだ

“もし、今日が駄目でも、もつともつと頑張つて、また言うんだ！それでも駄目だったら……いや、今日まで頑張つて来たんだ！だからきつと……あの人も…… / / / / / / / /”

ティアナは3回深呼吸をした後、意を決してその人物の名を呼んだ。愛しいあの人の名を……

「ヴェストールさん！」

「ん？なんだ？質問なら言ってくれても構わない」

ティアナの声にヴェストールが振り向く。

「いえ、そう言う事ではなく、ヴェストールさんに言いたい事が在るんです」

「？」

「ヴェストールさん、あなたにずっと言いたかった事が在るんです。今までずっと、ずっと言いたかった事が…」 / / / /

「????？」

ヴェストールはますます頭の上にハテナが浮く。

「6年前のあの日からずっとあなたの事だけを見てました。あなたと同じ場所で、同じ部隊で、ずっと、夢でした」

「……………」

ヴェストールは腕を頭の後ろで組み、目を瞑って何も言わない。

「今、こうして、あなたと同じ部隊に居ることに誇りに思います…そして…あなたに、この想いを伝えます……………」

「…ロンメル・ヴェストールさん、あなたの事が大好きです。私と

…付き合っして下さい！」／／／／／

ティアナは真っ直ぐヴェストールを見つめる。

「……………」

ヴェストールは何も言わない。

「……………やっぱり、駄目ですよね……」

何も答えなかったヴェストールの横を通り抜けようとした時、

「…俺はまだ何も言っちゃい無い。勝手に話を終わらすな、馬鹿」

そう言っつてティアナの頭を小突く。

「……っ！何するんですか!?!」

「勝手に話を終わらせようとするティアナが悪い。もう一度言っつ。

俺は、まだ(…)(…、何も答えていない(……………)(…)。意味、解るか?」

「?」

今度はティアナが頭の上にハテナを浮かべる。

「俺はあの人からこう言われた。“ティアナの事は頼んだ。お前なら、ティアナを貰っつても良いぞ。その代わり、ちゃんと幸せにしなければなら、その時は呪っつてやる”っつてな」

「!!!!」 / / / / /

ティアナは自分の兄の言葉に驚くと共に、恥ずかしくなった。

「シスコンバカのあの人にこんな事言われて俺もビックリしたよ…
まあ、答えは必然的に、だったけどな…」

「?????」

ティアナの頭は既に、ハテナが何個も飛び回っていた。

「簡潔にその時の応えを言おう。今此处で、お前にな…」

ヴェストールは目を開け、右手をティアナの頬に触れた。

「俺はお前を、ティアナを一生幸せにしてやる。それこそ、嫌と言
わせるほどにな」

ヴェストールはティアナを抱き寄せ、そのまま……

……

「ヴェストールさん……」 / / / / /

「あゝ…えつとゝ……ティアナさんは一体？」

エリオは妄想に浸るティアナを見て、スバルに理由を訊く。

「あ、あはは……ティアはさ、何故だかヴェストールさんの名前を出すだけで、自分の世界にトリップしちゃうんだよね……」

「……なんだかティアナが私達に挑戦してる気がする……もし抜け駆けしたら……O H A N A S H Iだよ？」

「なのはさん……目が怖いです……」

目からハイライトの消えたなのはの言葉にキャロが恐怖し、縮こまる。

「キユク〜？キユクル〜……」

そんな空気の中、フリードは頭を顔を左右に見回して何かを探す。

「どっしたのフリード？」

「そう言えば、なんか焦げ臭いような……」

フリードの素振りに気付いたキャロとエリオはその原因を捜してみると……

「あ〜！スバル、あんたローラー！」

「へっ？」

何時の間にか現実に戻ってきたティアナはスバルのローラーを見る。それにつられて他の3人もそこを見る。

そこには、ローラーがショートして黒煙も出ていた。詰まり、ぶっ壊れてた。

「あっ！うわっ！やっば〜！あっちゃ〜…しまった〜無茶させちやっつた…」

スバルはぶっ壊れたローラーをすぐさま脱ぎ、抱き抱えた。

「…オーバーヒートかな…後でメンテスタッフに視てもらおう？」

こちらも何時の間にか正気を取り戻していたのはがスバルのローラーを覗きながら言う。

「はい…」

「ティアナのアンカーガンも、結構厳しい？」

「はい…だましましたです…」

「…みんな、訓練には慣れてきたし…そろそろ実戦用新デバイスに切り替えかな〜…」

「新？」

「デバイス？」

……

数分後、シュミレーターから出たなのは達は6課の隊舎を歩いている。

「じゃあ、一端寮でシャワー浴びて、着替えてロビーに集まるつか」

『はい!』

その時、ティアナが何かに気付いた。

「ん?あの車って…」

ティアナの見たその車は、黒いスポーツカーだった。それがなのは達の前に止まり、窓を開ける。するとそこには…

「フェイトさん!はやて部隊長!」

フォワードの4人はフェイトのスポーツカーをまじまじと眺める。

「すごい!これ、フェイト隊長の車だったんですか?」

「うん、そうだよ。地上での移動手段なんだ」

「みんな、練習の方はどないや?」

「あ〜…」

「頑張ってます」

「エリオ、キャラ、ごめんね。私2人の隊長なのに見てあげられなくて…」

「あつ、いえ、そんな事は…」

「大丈夫です」

フエイトはエリオとキャラに申し訳なさそうに謝り、それを2人が取り繕う。

「4人共いい感じに慣れてきたよ。何時出動があっても大丈夫」

「そうか、それは頼もしいな」

「2人はどこかお出かけ？」

「うん、ちょっと6番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や。夕方までには戻るで」

「私は昼前には戻るからお昼はみんなと一緒に食べようか」

『はい!』

「そう言えば、ヴェストール君も今日中には戻って来るって言うことだし、夕食は全員揃って食べような?」

因みに、ヴェストールはカリムからの依頼で3・4日前から機動6課にいない。いくら戦闘統括指揮官だからとは言え、実質上は管理

局の特別捜査官である。

『はい(うん)！』

「ほんならな〜！」

フォワードの4人は、はやてとフェイトを敬礼で見送った。

……………

「聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局の理事官。カリム・グ
ラシアさんか…私はお会いした事無いんだけど…」

「あ〜…そやったな…ってそうやったの？ヴェストール君が居るから、てつきり知り合いかと思ったで」

はやてはフェイトの言葉に少し驚き、その理由を訊いた。

「それはね、何時も長期任務や依頼なんかが来る時が、ロンとは入れ違いになる事が多かったから機会が無くて…。はやては何時から？」

「う〜ん…私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リイーンが生まれたばっかの頃の筈やから…8年前かな」

「そっか…」

「カリムと私は、信じてる物も、立場もやるべき事も、全然ちゃう

んやけど、今回は2人の意見が一致したから…そもそも、6課の立ち上げ、実質的な所はほとんどカリムがやってくれたんよ」

はやてはさも嬉しそうに言う。

「そうなんだ…」

「お陰で私は、人材集めに集中する事が出来た」

「“信頼出来る上司”って感じ？」

「うん、確かに仕事や能力は凄いんやけど、あんまり“上司”って感じはせえへんな…どっちかって言ったら“お姉ちゃん”って感じじゃ」

「うふふ…そっか…」

「まあ、レリック事件が解決したらちゃんと紹介するよ。きつと気が合うで。なのはちゃんもフェイトちゃんも」

「うん……そう言えば、はやてはどうやってロンと会ったの？」

フェイトは、ふと思つた事を訊いてみた。

「ヴェストール君と会つたのも、その仕事の時なんよ。私がカリムに挨拶しにいつた時にカリムの部屋に居つてな、その時に自己紹介してもらつたんよ……はあ…今も昔もヴェストール君はええな〜…」
／／／／／／／

「へ〜…その時からロンを狙つてたの……？」「ボソツ

何時の間にか本音の漏れたはやてに、フェイトは敵対心をガンガンにたぎらせた。

「うつ……でも、私は退かへんで！私がヴェストール君のお嫁さんになるんやー！」

そんなフェイトに若干震えつつも、眼に煌々と炎を燃やすはやてがいた。

このはやてとヴェストールの出会いは後程書かせて戴きます。はやてファンの皆さん、はやコンの皆さん、すいませんでした。BY作者

……

機動6課隊舎

フォワードの4人はシャワー浴びて、現在はメンテナンスルーム。台の上に浮いている4機のデバイスを各個人が見る。

「うわぁ……これが……」

「私達の新デバイス……ですか……」

スバル、ティアナは台に浮かぶ青いペンダントと銀のカードをそれぞれ見る。

「そうでーす！設計主任、私！協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんにリイン曹長！そして極めつけは、追加プログラム構成を担当したヴェストール君とヴァールでーす！」

「ヴェストールさんってそんな事まで出来るんですか！？」

「あはは…今に限った事じゃ無いと思うよ…ティア」

シャーリーの言葉に驚きを隠せないティアナにスバルが諦めたようにツッコむ。

…何故か立場が逆転しているも、本人達は気付いて無い。

「ストラダとケリユケイオンは変化無しか…」

「そうみたいだね…」

エリオとキャラロは自らのデバイスを見て呟く。

「それは違いま〜す！」

そこにリインがやってきて、エリオの頭の上に着地する。

「変化無しは外見だけですよ」

「リインさん」

「はいです〜」

リインはエリオとキャラロの目線の位置に降りる。

「2人はちゃんとしたデバイスの使用経験が無かったですから、まずは感触に馴れて貰う為に、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あれで最低限…!？」

「ホントですか…!」

「みんなの使う事になる4機は、6課の前線メンバーとメカニックスタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型!」

今度は4人の丁度真ん中辺りに行くリイン。

「部隊の目的に合わせて、そして、エリオやキャロ、スバルにテイア。個性に合わせて造られた文句無しにして最高の機体です!」

台の上にあった4機がリインの近くに来る。

「この子供はみんなまだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められては、いっぱい時間を掛けてやっと完成したです。ただの武器や道具と思わないで、大切に、だけど性能の限界まで思いつきり全開で使って欲しいです!」

そうリインが話している時にそれぞれの元へデバイスが行く。

「この子供もきつとそれを望んでるから…!」

その時、メンテナンスルームのドアが開いた。

「ゴメンゴメン、お待たせ」

「なのはさん！」

「ナイスタイミングです！今から機能説明をしようかと思ってたんです」

「そう、すぐにも使える状態なんだよね？」

「はい！」

.....

シャーリーがウィンドウを4つ開き、各画面上にはそれぞれ4機のデバイスが映される。

「まず、この子達みんな、何段階かに分けてリミッターを掛けているのね。一番最初の段階だと、そんなびつくりする程のパワーが出る訳じゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱える様になったら、私やフェイト隊長、リンやシャーリー、後、ヴェストール君の判断で解除していくから」

「丁度、一緒にレベルアップしていく様な感じですね」

シャーリー、なのは、リンがそれぞれ言い終えた後、ティアナが思い出したようになのはに質問する。

「あっ、出力リミッターって言うと、なのはさん達にも掛かってま

すよね？」

「うん、私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

『えっ!?!』

その発言にフォワード全員が驚く。

「リミッターがですか!?!」

「“出力限定”って言ってね、うちの隊長も副隊長もみんな。私とフェイト隊長、シグナム副隊長とヴィータ副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「えつと〜…」

「うん…?」

スバルとキャロ、エリオは良く解っていないらしい。

「ほら、部隊毎に保有出来る“魔導師ランクの総計規模”って決まってるじゃない」

「ああ、そうですね…」

スバルが笑ってごまかす。

「1つの部隊で沢山の優秀な魔導師を保有したい時は、そこに上手く収まるよう、魔力の出力リミッターを掛けているですよ」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね…」

「うち場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達が2ランクダウンかな」

「4つ!? 八神部隊長はSSランクだから…」

「Aランクまで落とされてるんですか?」

「はやてちゃんも色々苦労してるです…」

リンは少し落ち込む。

「なのはさんは?」

「私は元々S+だから、2.5ランクダウンのAA。だからもつづく1人でみんなの相手するのは辛くなってくるね…」

この時、なのはの話を聞いていたスバルは、少し、なのは達の事に考えていた。

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直属の上司のカリムさんか部隊の監査役のクロノ提督の許可が無いと、リミッターを解除出来ないでし、許可は滅多な事では降りないです…」

「そうだったんですね…」

「ふうん……ん？」

その時、ティアナはある事に気付いた。

「なのはさん、ヴェストールさんのリミッターってどうなってるんですか？」

他の3人も言われて気付いたらしく、なのは達の方を見る。

「確か、なのはさんと同じS+ですが、今は3ランクダウンのA+の筈です」

「3ランクダウン!？」

「なんでそんなに……」

「特別人員の人の場合、少しながらもリミッターの解除制限が緩くなる事が多くてね、一応リミッターは掛かってるんだけど、ほぼ全てのリミッターを自分の判断で解除出来るようになってるんだ」

なのはが特別人員のリミッターに関しての話をする。それをシャーリーが引き継ぐ。

「だけど、ヴェストール君の場合は例外でね、理由は私達でも解らないんだけど、リミッターが0.5ランクずつに区切られていて、解除出来るのは3つまで。つまり、AAAランクまでしか許されていないの」

「そしてその先は、はよてちゃんやカリムさん、クロノ提督ですら許可が出せないし、はよてちゃんよりも解除制限が遥かに厳しいん

ですう」……」

「そして、この管理局の中で唯一、リミッター解除の許可が下せるのは、管理局本局の総務統括官でヴェストール君の直属の上司、リ
ンディ・ハラオウン総務統括官ただ1人なんだ……」

「……………」

その場の全員が黙り、変な空気が流れる。

「……まあ、隊長達の話は心の片隅ぐらゐに置いていいよ。今は
みんなのデバイスの事」

「……はい」

「はい」

ティアナ、スバルがそれぞれ返事をする。

その時、隊舎のウィンドウ全てに「ALERT」の表示とアラーム
が鳴り響く。

「このアラートって」

「一級警戒態勢!？」

「グリフィス君!」

なのはの声に応答し、ウィンドウの1つにグリフィスが出る。

《はい、教会本部から出動要請です》

《なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、こちらはやて》

教会からはやての通信が来る。

「うん」

《状況は？》

《教会騎士団の調査部で追っていたレリックらしき物が見つかった。場所はエイリス山岳丘陵地区、対象は山岳リニアレールで移動中》

「移動中って」

《まさか…》

“移動中”に反応したのはとフェイト。

《…そう、そのまさかや…内部に侵入したガジェットの所為で車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットの数は、最低でも30体。大型や飛行型も、未確認タイプも出て来るかもしれない。いきなりハードな初出動やけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか？》

「私は何時でも」

《私も》

《スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもOKか？》

『はい！』

《よし、良いお返事や。シフトはA-3。グリフィス君は隊舎での

指揮、リインは現場管制》

《はい》

《はい！》

《なのは隊長とフェイト隊長は現場指揮》

「うん！」

《しかし、なんでこんな時にヴェストール君は居らんのや〜！》

《まあまあ、はやて落ち着いて…》

《ごめんなさいはやて、私が彼を呼んだばかりに…》

この重要な時にヴェストールが居ない事に、はやてがイラつき、フェイトが宥め、カリムがかなり落ち込む。

《あ、ああ…そんなに落ち込んでええんよ。悪いのは時と場合を考えないガジェットなんやから》

「はやてちゃん…緊急事態は待ってくれないよ…」

なのはがすかさずツッコむ。

《うっ…ああもう！締まらんやない！兎に角！機動6課フォワード部隊、出動！》

『はい…』

《了解！みんなは先行して。私も直ぐに追い付くから》

「うん！」

.....

第601管理外世界

ヴェストールはカリムの依頼で、第601管理外世界に調査に来ており、今から帰投する所であった。

「結局、問題無しだったな……」

《そつでしたね……》

「……まあ、油断大敵だ。ヴァール、広域索敵魔法を最大で頼む」

《りょくかいです〜》

ヴァールに頼み、広域索敵魔法を掛け、半径1000？の敵反応を見る。すると……

《10時の方向、距離42000から高速で接近するアンノウンあり。魔力反応も有ります。魔力は……？SSオーバーです！！接触までは約74秒！》

「はあ！？SSオーバーだと！？チィ……シルフ！リミットダブルブレイク！ヴァール！セブンカートリッジロード！AMIMドライブ

ブースト！オープンファイア・フルバレット砲撃態勢に移行！」

《Limit double break!》

《AMIM Drive boost・Seven cartilage Lord・Gear second・Open Fire・Full Bullet Standby ready》

ヴェストールが2機に命じると、膨大な魔力が溢れ出し、ヴァールの銃身に緋色の紫電が覆う。それも、見たことが無いほどに。そして、銃口には、直径がトラックのタイヤ程在る 赤い魔力球が創り出される。

《24000、23000、22000、21000…》

シルフはアンノウンが詰める距離をカウントする。

《15000、14000、13000、1…!!》

「どうしたシルフ!？」

《アンノウンの反応が途絶えました！一体どこに…》

「こ・こ、だよ。フフッ」

『!?!?』

アンノウンの反応が急に無くなったと思ったら、不意に後ろから女

の音が聞こえた。ヴェストールが後ろに振り返り、射撃態勢に素早く移る。そこには、白銀の長髪に透き通るような白い肌、ぷっくりと柔らかそうな唇に人差し指を当てて、妖艶な笑みを浮かべる美女がいた。服装は少々露出の多く、長くスリットの入ったワンピースドレスから太ももを覗かせ、その大きな胸はウエストを実際よりも更に細く見せている。

そして…

「うーん…やっぱり可愛いわね…この赤い眼とか…」

そう言っつてヴェストールに近づき、肌に触れた。

…その美女は、ヴェストールと同じく、ルビーのような鮮やかな紅い眼を持っていた。

ヴェストールはその行動にドキリとした。

そんな雑念を振り払い、再び距離を取っつてその場で職務質問をする。

「俺は時空管理局本局魔導師ロンメル・ヴェストール特別捜査官だ。貴女の氏名、出身世界、どのような目的で本官に接近してきたかを具体的に応えよ。内容によっては貴女を公務執行妨害で拘束させてもらっつ」

「…拘束、ね…ふふっ、考えただけでゾクゾクしちゃっつ…」

「職務質問には真面目に応えよ。質問しているのは貴女ではない」

「んもっ、せっかちなんだから…まあでもいいわ。貴方だけに教え

てあ・げ・る 名前は…そうね… “ワルキューレ”とでも言っておこうかしら…。出身世界は…貴方のよく知っている所よ。目的はズバリ、貴方に会いたくて来たの。可愛い可愛い、愛しのあ・なた・にね」

「?どういう意味だ?それはふざけてるのか?それとも真面目か?」

ワルキューレの応えにヴェストールは露骨に怒りの眼を向けた。

「さあ?私は後者だけど、貴方がどう捉えるかは好きでいいわ。でも、私としては貴方にも真面目に捉えて欲しいわね。それだけだから、待たねー 私の王子様」

ワルキューレが立ち去ろうとしたその時…

「待て!」

「?」

ヴェストールはワルキューレの両手両足にバインドを掛けた。

「どうしたの?あ、もしかして愛の告白?きゃ〜!」

「貴女には、一度管理局に動向願いたい」

「え〜、イヤよそんなの…はっ!さては職務質問と言つのは建て前で、ホントはお姉さんとイチャイチャしたいんですよ。そうならそつと素直に言ってくれば良いのに…」

ヴェストールが顔は伏せ、こう呟いた。

「……ヴァール、カートリッジロード…オープンファイア・フルバレット…」

《Yes my master・Cartilage lord・
Open Fire・Full Bullet》

『Fire』

ドゴオウウンー!!

至近距離から放った巨大な緋色の砲撃はワルキューレを捉え、その魔力の奔流に呑まれた。

「はあ…はあ…やったか？」

様に思われたが…

「何が“やったか”なの？」

『……!?!?!?』

横から聞こえた声に、1人と2機は驚愕した。何故なら、その声の主が、先ほどの砲撃に呑まれた筈のワルキューレが、無傷で尚且つ息すら切れておらず、余裕の表情をしていたからだ…

「クスッ、こうなったら仕返しよ〜えいっ」

「!?!?」

今度はワルキューレがヴェストールにバインドを掛けた。

「くっ…！今すぐこれを外せ！本当に公務執行妨害で逮捕するぞ！」
ヴェストールは抵抗するも、余りに強力なバインドにより何も出来ない。

「良いわよ別に。貴方の唇を奪えるから…」ボソッ…

耳元でそう呟かれ、ヴェストールは背筋をヒヤリとさせ、嫌な感覚を覚えた。

「ふざけん…！？」

その瞬間、ヴェストールの唇に柔らかく、温かい感触と、仄かな甘い香りが鼻を擦った。

「…んん……………ぷはっ、おいし…。やっぱりファーストキスの味は格別ね…でも、本当はもっとしたい所だけど、今日は此処まで…残念。じゃあ、またね」

ワルキューレは触れ合った唇を舌で舐め、再び妖艶な笑みを浮かべてヴェストールに向き、そこから消えた（…）。

「……………」

ヴェストールは手で自分の唇に触れた。そこは確かに、ワルキューレの唇が触れた所だった。

そして、悔しさが込み上げて来た。何も出来なかった自分に怒りを覚えた。ただただ、その二つの感情が溢れてくるのが自分でも解るほどに…

それから数分後、ヴェストールはウィンドウを開き、聖王教会本部のカリムへ報告した。

「…騎士カリム、聞こえますか？」

《ええ、それで、どうだったの？》

「異常や不可解な所、不自然な物は見受けられませんでした。以上です」

ヴェストールはとつさに嘘をついた。思い出すだけで、殺気が溢れ出しそうだった為に…

《そう…あと、すぐで悪いんですが、機動6課に出動要請が出ています。出動可能ですか？》

《？カリム？何を言っとるん？ヴェストール君は今他の世界なんやで。来れる訳…》

カリムの言葉を不審に思ったはやてはそれを否定しようとしたが…

「了解です。【ワープホール】使って良いんですね？」

《ええ、【ワープホール】の使用許可を下します》

《?カリム、【ワープホール】って何や?》

《ロンの固有魔法の1つで、どここの場所、地域、星、世界のへでも行けるの。原理はもう2つの固有魔法、【ディメンションウォール】と【グラビティシールド】を組み合わせて、次元に穴を空けるの。その出口を目的地の座標に合わせれば、移動中の物でも行く事が可能なの》

《ホントに何でも有りやな…》

はやては、カリムの説明に驚くと同時にヴェストールに呆れた。

「そう言う事です。では、ロンメル・ヴェストール一等空尉、現場に急行します」

sideout

第5話 初出勤と蒼き炎 前編（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《さて、今回は第5話をお送りしたした》

シ《いろんな意味で作者を殺したい…》

ヴァ《シルフダメ〜！今本番！》

シ《そんなのに構ってられないです！マスター！早くSet up
を…》

ヴェ「…うう…僕もうお婿に行けない…グスツ…」 部屋の隅っこ
で泣いてる。

シ《……………》 人間で言うところの、口ポカン

あ…なんかアレが物凄く効いてるみたい…作者のe a g l eです。

ヴァ《シルフとマスターが思考停止なので、他の人呼びましょ〜？》

よし、そうしよう！

では、召喚！

ワルキューレ（以降ワ）

「……は…」

はやて（以降は）

「どこや？」

すみませんお二方、使い物にならない1人と1機の代役をお願いしたいのですが…

ワ「ええ、良いわよ」

は「私もええけど、ワルキューレと一緒に大丈夫なんか？」

ヴァ《大丈夫です！お二方はまだ本編では会ってない設定なので》

は「そこ！メタ発言禁止やで！」

ヴェ「……もうお婿に行け（ry）」

シ《……………》

ワ「……ホントにダメそうね…私のキスがそんなにイヤだったかしら？」

は「！なんやて！……ワルキューレ…ちよつとこっちに来い……」
笑ってるけど目が笑って無い+後ろに鬼神が…

ワ「ヒイイ……！！！」

なんかこっちもダメっばい。では気を取り直して次回予告！ヴァー
ルよろしく！

ヴァ《りよ〜かいです〜！

機動6課フォワード部隊のデビューはまさかの一級警戒態勢。スバ
ルとティアナの新デバイスの能力と、フォワード4人の実力は？ヴ
エストールの指揮官の才能に全員は…
そしてワルキューレの真の目的と新たな刺客…ヴェストールの運
命の歯車は、音を立てて急速に狂い始める。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 〜ヴァルキュリアの血
を引く者〜 第6話 初出勤と蒼き炎 後編

蒼き炎の真実を……》

「……もうお嬢（ry）」

《……………》

「ラグナロクウウ……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさい……」

作者・ヴァ『いい加減にしろ大馬鹿共！！』

第6話 初出勤と蒼き炎 後編（前書き）

もう…全てに自信が無い…

まあ、何時もの事だな！（キリッ

それでは、第6話です！

第6話 初出勤と蒼き炎 後編

sideヴェストール

さて、一応【ワープホール】で転移するが、その前に……

俺はウィンドウを展開、操作して、3つのモニターに3人の顔が映る。

「此方、時空管理局機動6課所属、ロンメル・ヴェストール一等空尉。高町なのは一等空尉、グリフィス・ロウラン准陸尉、フェイト・T・ハラオウン執務官、聞こえますか？」

3人にはちゃんと云つとかなきゃな。

《うん》

《どうかされましたか？》

《緊急事態でもあった？もしそうならお姉ちゃんの私が助けに言つてあげる！》

いやいや、そつちが緊急事態の真っ最中でしょうが。それでこつち来たらなのはさん大変だろうが。そしてあなたは今俺が何処にいるか解つてる？異世界だよ異世界。そんな数分で着ける訳が無かるう。

《フェイトちゃんはそのまま行って！私がヴェストール君を助けに行くの！》

いやいやいや、なんでなのはさんもそっちに行くの？しかも俺は大丈夫なんだけど。傷一つ無いどころか困ってすらいないから。あれ？でも心に傷を負ったような負わなかったような……まあいいや。今はともかく

「いや、こっちは無事に片付いた。さつき騎士カリムに任務完了を告げたよ。今からそっちに急行しようかと」

《え？何言ってるんです？ヴェストールさんの現在地は異世界ですよ》

あ…そう言やこれ見せるの初めてだったな…

「大丈夫だ。何の問題もない。なのはさん、フォワードのみんなはどんな感じですか？」

《4人共、初出勤だからちよっと固くなってるんだけど…キャラがなんだか不安みたいで……》

そう言っなのはさんはキャラの方見る。
ふむ…ならば

リラックスついでにキャラも安心させるか

「なのはさん、良い考えがあります。その為に…4人共、俺が見えるか？」

《は、はい》

「今からちよつと見せたい物があるんだ。俺が良いって言つまで目を瞑つててくれないか？リインとなのはさんもお願ひします。出来る事ならヴァイスさんもストームライダーでオートパイロットにして、一緒に目を瞑つて下さい」

《別に良いですが…》

《何するんだ？》

リインとヴァイスさんが俺に訊く。まあ、それ言つちやうと面白く無くなつちやうから黙つとくけどな。

「それは秘密です」ニコッ

今出来る最高の笑顔でそれに応えたと…

《『……………』》／／／／／／

何故か女性陣全員が黙りこくつた。しかも顔真っ赤。ティアナは俺から顔を背けたし…俺変な事したか？

《…ロン…反則だよ…》／／／／／／

《反則ですう…》／／／／／／

……え〜つと…義姉さんもりインもそんな顔されても困るんですが…あと“反則”とは何ぞや？

《…ヴェルはもうちょっと女心を知る必要があるな…》

ヴァイスさんは苦笑いしながら俺に言った。

ヴァイスさん、そんな事言われてもどうしようも無いんですが…
してあなたは“女心”とやらが解ると言うのですか？
そう言う縁は遠い感じがするのですが…

《…ヴェル、後で俺んとこ来い。思う存分教えてやるよ》

「あなたの邪な^{よこしま}考え方を俺が徹底的に叩いてやりますよ。その“女心”の“解る”らしいので、隊長陣相手にそれを見せてもらいます」

《ナマ言ってスイマセンデシタ！》

ヴァイスさんが邪な笑みを浮かべてたので、その自信満々の“特技”を隊長陣相手に殺られて（みせて）貰おうと思ったのに…
チツ、しくったか

《ヴェストールさん…怖いです…》ガクブル

ありや？エリオが怖がってら。これじゃあダメじゃん。取り敢えず謝ろう。

「エリオ、そんなに怖がらせたか？すまないな。後で俺の部屋に来い。アイスやるよ」

《は、はい…ありがとうございます》

やっとこさ本題に入れる…長かったな…

「それじゃ、みんな目を瞑って」

俺が言つとへりの中の全員が目を閉じた。一丁やりますか…

「ヴァール、ダブルカートリッジロード。特殊転移魔法発動」

《W a r p h a l l 》

「ワープホール」

紅い魔法陣が広がり、頭上に出来た“穴”から頭を出す。

「うん、もうあけていいよ」

そう言つと、その場の全員が目を開ける

「……………」

「……………」

『……………』

《……………》

《……………》

『はあああああ!!!!!!???』

全員が叫んだ。疑問詞を。

義姉さん、運転に集中しないと事故るよ。
そしてそれ以前に…

「皆さん、静かにしてくれ。ヘリの中は結構響くんですよ。そして
落ち着こう。エリオ、ヴァイスさん、これでも人間だからな」

「あ、ああ……」

「ヴェル…の…首が…身体が……」

「だから生きてるつつつの!」

腕だけ出してエリオとヴァイスさんの頭をハリセンでぶん殴った。

「いたっ!」

「あべし!」

ヴァイスさんだけ金属製のハリセンを腹にもぶち込んだ。あ、口から血を出してる。まあいつか。すぐに治るだろ。

「ヴェストールさん！か、かか、顔が！うっ腕が！」

「ああ、だから落ち着けスバル大丈夫だから」

「ですが…」

「大丈夫だって。何度も言わせるな。これは俺の固有魔法の一つだから」

2人はモニターの先の俺の体と俺の顔を見比べる。

「そうなんですか…」

《ヴェストールさん、心臓に悪いですよ……もうこれっきりにして下さい…》

グリフィスが顔真っ青になって言う。こりゃ冗談じゃなさそうだな。

「悪い。さっさと出る」

俺はワープホールから完全に出る。

「さてと、そろそろ現場に着くがその前に、キャロ、少しは力抜けたか？」

「は、はい…」

うつむ、あんまり効果無しか？ならばプランBだ。（端からプランBなど無いけどな）

俺はキヤロを抱き締めた。

「えっ？」

「キヤロ、お前は1人じゃない。俺がいる。義姉さんもいる。なのはさんもリインもいる。そして、お前の近くには頼れる仲間が居る」

「……………」

「誰もキヤロを1人にはしない。それに、お前にはフリードが、今まで、ずっと一緒にいる親友があるだろ。1人で全部抱え込むな。少しは俺達に迷惑を掛ける。俺達を頼れ。無理したって後から着いて来るのは、小さくても大きくても、代償だけだ」

「……………はい……………」

「俺はキヤロの事を信じてる。お前自身が思ってるより、強くて、優しく、カッコいいってな。だから、キヤロも自分を信じる。自分を信じて先へ進め。自分の願う事を、夢を持って、進むべき道を行け。俺達と一緒にいて、道を照らしてやるからさ……………」

「ありがとうございます……………」

ふむ、良い顔になったな。それじゃあ……………」

「俺の方から作戦指示を出す。まず、なのは隊長と俺で一帯にいる

飛行型のガジェットを掃討、制空権を奪取。その後、スターズが前方先頭車両から、ライトニングは最後尾車両から車内のガジェット群の無力化、及びレリックの確保を」

『はい!』

「フェイト隊長は現場に到着次第、俺達に加勢。もし制空権を奪取していた場合、ライトニングの補助に向かって下さい。なのは隊長も同様に、制空権を奪取し次第、スターズの補助へ」

「うん!」

《解った!》

「グリフィスは広域索敵レーダーを用いて監視を、リインは現場管制を頼む」

「ハイです〜!」

《了解しました!》

「よし!これにて作戦指示を終了、俺となのは隊長はヘリから出る。何か質問は?」

「ありません!」

「同じく!」

スバルとキャロが応える。

「了解。機動6課フォワード隊、ミッション内容は“リニアレール内部のガジェットの破壊、及びレリックの確保”。それでは…」

俺は右手の手の甲を上にして、右腕を突き出し、

「ミッション…スタート！」

『はい！』

作戦開始の狼煙を上げた。

side out

side キャロ

…遂に初出勤か

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい！」

「頑張ります！」

「エリオにキャロ、それにフリードもしっかりですよ！」

「はい！」

「はい！」

「きゅる〜!」

「危ないときは、私やフェイト隊長、ラインがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう!」

『はい!』

「大丈夫…?」

「う、うん…ごめんなさい…大丈夫だよ…」

エリオ君が私を心配してくれた…

…けど、エリオ君をこれ以上心配させないように、とっさに言っちゃった…

本当はとっても怖い。

…だって、私は危険なんだもん…人を傷つけちゃうんだもん…

…私がフェイトさんに保護される前は、とある郷にいた。私はそこでずっと育てられてきた。

だけど、長老に“私の能力が余りに強すぎる”所為で、“災いをもたらされる”って言われてしまって、結局、フリードと一緒にその郷から追い出されてしまった。

…私は1人になった。いろんな所に行ったけど、やっぱりダメだった…。

そんな時に、フェイトさんに出会った。それで、フェイトさんは、私にフェイトさんの弟の話をしてくれた。

その人は、“とてもしっかり者で、時々甘えて、それで、とても強い人だ”って言ってたけど、本当は“1人で全部抱え込んで、ずっと塞ぎ込んで、苦しそうだった”って言ってた。そして、“その人の過去の事はよく解らない”という事を話してくれた。

その時のフェイトさん、ちょっと悲しそうな顔をしていたのを覚えてる…

…でも、私は怖い。もしかしたら、本当に、大切な人を傷つけてしまいかもしれないから…

そんな事を考えてたら、ヴェストールさんから通信が届いた。

なんだか話してたけど、私はそんな事よりも、ちゃんと自分の能力を使えるか心配だった。

そしたら…

《こっちは無事に片付いた。さつき騎士カリムに任務完了を告げました。今からそっちに急行しようかと…》

「え？何言ってるんです？ヴェストールさんの現在地は異世界です

よ

私は疑問に思った。なんで異世界にいるヴェストールさんが、ここに出来る事が出来るのだろうか。

《…4人共、俺が見えるか？》

「は、はい！」

《今からちょっと見せたい物があるんだ。俺が良いって言つまで目を瞑つてくれないか？リインとなのはさんもお願ひします。出来る事ならヴァイスさんもストームレイダーでオートパイロットにして、一緒に目を瞑つて下さい》

「別に良いですが…」

「何するんだ？」

リインさんとヴァイスさんが訊いたら…

《それは秘密です》ニコッ

笑顔でそう答えた。

ヴェストールさんの笑顔…素敵だな… // // // //

「反則ですう…」 // // // //

《…ロン…反則だよ…》 // // // //

フェイトさんもリインさんも顔を真っ赤にした。

…ヴェストールさん、凄いな…

その後、ヴェストールさんとヴァイスさんがまた何か話してる。そして、ヴェストールさんにヴァイスさんが土下座をした。

その時のヴェストールさん、なんだかとても怖かった。ヴァイスさん、何言っただろう？

《それじゃ、みんな目を瞑って》

ヴェストールさんの言う通りに私達は目を瞑った。
少しして、

「うん、もうあけていいよ」

って言われたから目を開けると…

「……………」

「……………」

『……………』

《……………》

《……………》

私も含めて全員が固まった。

だって……

……ヴェストールさんの顔だけが宙に浮いてたんだもの。

『はあああああ!!!!???』

「皆さん、静かにしてくれ。ヘリの中は結構響くんですよ。そして
落ち着こう。エリオ、ヴァイスさん、これでも人間だからな」

「あ、ああ……」

私の横で、エリオ君が口をパクパクさせていた。

「ヴェルの……首が……身体が……」

ヴァイスさんはコックピットから身を乗り出している。

「だから生きてるつつつの!」

ヴェストールさんが腕だけ出してエリオ君とヴァイスさんの頭をハリセンでぶん殴った。

「いたっ!」

「あべし!」

ヴァイスさんだけ金属製のハリセンを腹にも叩き込まれてる。あ、口から血を出してる。……大丈夫かな?

「ヴェストールさん!か、かか、顔が!うっ腕が!」

「ああ、だから落ち着けスバル大丈夫だから」

「ですが…」

「大丈夫だって。何度も言わせるな。これは俺の固有魔法の一つだから」

スバルさんとティアナさんは、モニターの先のヴェストールさんの体と顔を見比べる。

「そっなんですか…」

《ヴェストールさん、心臓に悪いですよ……もうこれっきりにして下さい…》

グリフィスさんが顔真っ青になってる。…大変そっだな…うっ…

私もなんだか気持ちが…

「悪い。さっさと出る」

ヴェストールさんが穴からから完全に出る。

「さてと、そろそろ現場に着くがその前に、キャロ、少しは力抜けたか？」

「は、はい…」

…またとっさに嘘ついちゃた…でも、他のみんなには迷惑掛けたくないし…

「えっ？」

突然、ヴェストールさんが抱き付いてきた！何で急に？

そう思っていたら、ヴェストールさんが私の耳元で話し始めた。

「キャロ、お前は1人じゃない。俺がいる。義姉さんもいる。なのはさんもリインもいる。そして、お前の近くには頼れる仲間が居る」

「……………」

「誰もキャロを1人にはしない。それに、お前にはフリードが、今まで、ずっと一緒にいる親友があるだろ。1人で全部抱え込むな。少しは俺達に迷惑を掛ける。俺達を頼れ。無理したって後から着いて来るのは、小さくても大きくても、代償だけだ」

「……はい……」

……暖かい……

ヴェストールさんの話を聞いていたら、自然に想ったことだった。まるで、本当の“兄”がいるみたいに……

「俺はキャロの事を信じてる。お前自身が思ってるより、強くて、優しくて、カッコいいってな。だから、キャロも自分を信じる。自分を信じて先へ進め。自分の願う事を、夢を持って、進むべき道を行け。俺達と一緒にいて、道を照らしてやるからさ……」

「ありがとうございます……」

心の底から“暖かい何か”が溢れて来る感覚がある。それに、今ならちゃんと頑張れる気がする！

ヴェストールさんが今の私見て、満足げな顔して、私を放した。その後、ヴェストールさんの目が、一瞬で変わった。

「俺の方から作戦指示を出す。まず、なのは隊長と俺で一帯にいる飛行型のガジェットを掃討、制空権を奪取。その後、スターズが前方先頭車両から、ライトニングは最後尾車両から車内のガジェットの無力化、及びレリックの確保を」

『はい！』

「フェイト隊長は現場に到着次第、俺達に加勢。もし制空権を奪取していた場合、ライトニングの補助に向かって下さい。なのは隊長も同様に、制空権を奪取し次第、スターズの補助へ」

「うん！」

《解った！》

「グリフィスは広域索敵レーダーを用いて監視を、リインは現場管制を頼む」

「ハイです〜！」

《了解しました！》

「よし！これにて作戦指示を終了、俺となのは隊長はへりから出る。何か質問は？」

「ありません！」

「同じく！」

「了解。機動6課フォワード隊、ミッション内容は“リニアレール内部のガジエットの破壊、及びレリックの確保”。それでは……」

ヴェストールさんは右腕を突き出して、

「ミッション…スタート！」

私達の初出動が始まった。

『はい！』

side out

side???

「そろそろ空域だな…ヴァイスさん！ハッチ開けて下さい！」

「おう！しっかりやって来いよ！」

ヴァイスはストームレイダーに命じて、ヴェストール達の乗る輸送ヘリ【JF704式ヘリ】のメインハッチを開ける。

「解ってますとも！んじゃ、俺達で空はしっかり片付けるから、お前らはちゃんとリニアの敵を叩いてこい！そんなもって、レリックを無事回収だ！」

『はい！』

「リインもそつちの管制を頼むぞ！こつちが終わったら俺が管制やるから、そしたらロングアーチと一緒に広域索敵をしてほしい」

「りよ〜かいですー！」

「ヴェストール君、行くよ！」

「了解です！それじゃあ…イージス1、ロンメル・ヴェストール！
「スターズ1、高町なのは！」

『出る（行きます）！』

2人は宣言し、ヘリのハッチから飛び降りる。

「行くよレイジングハート！」

《Yes my master. Stubby really.》

「セーットアップ！」

なのはが制服からバリアジャケットに変わる。

「シルフ！指定空域の敵戦力はどれ位だ？」

《ここから3？先の山の裏手に？型が50、リニアレール周辺に？型が200、2？先の山の麓に？型が100、リニアレール内に？型が39、？型が1の、合計、390です》

「リニアレール内に？型が！？」

「なんつう戦力だよコン畜生…ヴァール！広域索敵魔法を最大と、視力強化を頼む！」

《Yes my master. search, wide are a. Hawk eye.》

瞬間、ヴェストールの眼前にウィンドウが展開、数多くの赤が敵、自分が青、見方は緑で表示される。そして、ヴェストールの紅く輝く両目は、猛禽類を彷彿とさせる鋭い目になった。

ヴァールがレーダーを出して数分後、ウィンドウに映る数多くの赤い点が、青い点と緑の点に接近する。

「なのはさん、リニアレールの所にいた？型が俺達に気付いたみたいです。散開して、この谷の深くにおびき寄せて、挟撃を仕掛けようと思います」

ヴェストールがなのはに作戦を提案する。

「それにはちょっと反対だなあ…だって、罠になる人のリスクが高すぎるし、何よりも失敗したら元も子もないよ」

「大丈夫ですよ。罠に使うのはコレですから」

ヴェストールの意見をなのはは反対。それを見たヴェストールはベルトに付いたボックスから5?程の円柱状の物体を出す。

「…それは？」

なのはが首を傾げる。

「俺が開発したダミーポインターです。使い方は、コレにカートリッジを2発込め…」

ヴェストールが円柱の側面にカートリッジを2発、縦に込める。

「上に付いたこの赤いボタンを押すと…」

ヴェストールが上に付いている赤いボタンを押すと、2人の目の前に自分達がいた。

「にやっ！?私とヴェストール君が2人!？」

「これは、ティアナのフェイクシルエットに良く似たようなものです。カートリッジの魔力を使う事により、フェイクシルエットみたいに自らの魔力を使う必要が無いんです。そしてコレは、ガジェットから見ると、もろ“生身の人間”として捉えられるので、これを狙ってくる筈です。そこを一気に叩きます」

「なるほど……うん！じゃあ、その案は承認するね」

「解りました。なのはさんは俺の合図でアクセルシューターを撃つて下さい。俺が撃ち漏らしを叩きます」

「うん、それじゃあ早速始めようか！」

「了解！」

青と白の“無人の”飛行物体は、近くで見つかった魔力反応に向かって、5機編隊を組んで飛行し続けている。

一番前を飛行していた編隊は、自らの前部にある“目”で、その正体を確認。物体の発射したレーザーが、寸分狂わずその“魔力反応のある2人”の身体を貫く。

しかし“2人”は墜ちなかった（……………）。否、そこに墜ちる事は無かった（……………）。

何故なら、2人は…

……人では無いのだから。

「今です！」

「レイジングハート！」

《Accelerate shooter》

「シュート！」

次の瞬間、先頭の5機編隊は、桃色の魔力弾を確認したと共に、その後の世界を映すことは無かった。

ちょうど中間にあたる編隊は、その魔力弾の数、スピード、仲間は何をしたかを確認、記録し、その魔力弾を回避したが……

「ヴァール！」

《Plasma lancer, Phalanxes shift》

「Fire！」

緋色の雷を纏った魔力弾が彼らを爆発四散させた。

「…大方、片付いたかな…」

なのはとヴェストールは、先程、全200機の?型ガジェットを破壊し終えた。

「そうですね…それじゃあ、さつさと次の地点に…」

行こうとした時、ロングアーチから通信が入る。

《北西から航空戦力の増援を確認！至急、迎撃にあたって下さい！》

「んな！？また来やがったか！シルフ数は！」

《?型が…！！500！先程のものより武装、機動力、スピード、防御力、共に大きく上回ってます！》

「キリねえなあ畜生…！しょーがねえ、新人達の為にも、一肌脱ぎますか。ロングアーチへ、此方イージス1！至急迎撃に向かう！そっちで戦闘記録と向こうのスペックをとってくれ」

ヴェストールは呆れて、頭をボリボリとかくも、しっかりとロングアーチに指示を出す。

《了解！》

「なのはさん！行きましよう！」

「うん！」

「義姉さん、そっちは大丈夫か？」

一応、？型の残りと麓の？型は全滅させたよ

「了解、じゃあ向こうで合流、一気に墜とす！」

うん！

一方その頃…

へり内部

「今回の任務は2つ。ヴェストールさんの言った通り、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、レリックを安全に確保すること」

ラインが新人達に任務の概要を、ウィンドウに表示された情報と共に説明する。

「ですから、スターズ分隊、ライトニング分隊の2人ずつコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。レリックのある位置はここ。7両目の重要貨物室。スターズがライトニング、先に到達した方がレリックを確保するですよ！」

『はい！』

「でー!」

リインがその場でくるりと一回転すると、服装がバリアジャケットに身を包んでいた。

「私も現場に降りてみんなを管制するです!」

視点は戻り、ヴェストール、なのは、フェイト。

「……視えた!」

増援の航空戦力を、ヴェストールが“目”で確認する。

《距離4566、会敵まで残り45。敵は私達を確認、戦闘体勢に入りました》

「了解!…なのはさん!義姉さん!一気に叩くよ!」

「うん!」

了解!

3人はヴェストールの声と共にスピードを上げ、散開する。

《ライトニング1、スターズ1、イージス1、engage!》

ロングアーチから通信が飛ぶ。

「先ずはコレからだ！シルフ！」

《Plasma lancer, Wide bullet》

「Fire！」

生成された数多の緋色の雷弾はフェイトのそれよりも速く、複数のガジェットを捉え、複数の火球を作る。そして、それを回避した物は、反転した雷弾の餌食となり、オレンジ色の火球を上げる。

「レイジングハート！」

《Accel shooter》

「シューート！」

レイジングハートの作り出した数多の桃色の魔力弾は複雑な軌道でガジェットを翻弄し、確実に仕留めていく。

「バルディッシュュ！」

《Haken Saber》

「はあああ！」

バルディツシユの魔力刃はそこから飛んでいき、複数のガジェットを真つ二つに切り裂いていく。

「こんな所で時間を喰ってなんか居られない！ここらを一掃するぞ！シルフ！Gear 2nd解放！」

《Yes my master.Gear 2nd.Strike mode》

シルフィードが白光に包まれ、ヴェストールの両手には銀のハンドガンが1つずつ。

「トリプルカートリッジロード！その速さ、光の如く！打ち抜くは闇黒の影なり！」

《Triple cartilage lord.Thunder Breazer》

「サンダー…ブレイザァー…！」

ヴェストールの周りから、これまた大量の雷を纏った魔力弾が一斉に飛び出し、先の“プラズマランサー・ワイドバレット”よりも速く、たった一撃さえ当たればガジェットは全て爆発四散し、貫通した魔力弾は次の目標へ方向を変え、またガジェットを貫く。

「……………凄…！」

流石ロンだね！

ヴェストールの圧倒的火力と、その多数の魔力弾を楽々と、且つ正確に制御する能力に、なのはは驚き、フェイトは惚れ惚れしている。

「さっさの“プラズマランサー”って元はフェイトちゃんのだよね？」

うん、この“サンダーブレイザー”違うけど、ロンの射撃魔法は私直伝の“プラズマランサー”をアレンジしたんだと思う

「ふん…ヴェストールって何でも出来ちゃうんだね…」

まあ…大体の事は1人で出来るから…

「よし！私、ヴェストール君に負けないようにがんばるの！」

私もだよ！

その日、青い空から紅い魔力弾と桃色の魔力弾のスコールと、金色の魔力刃の暴風が吹き荒れたとか…

時同じくして

へり内部

へりは暴走するリニアレールの一両目の上空に到着した。

「さあて新人共、隊長さん達とヴェルが空を抑えてくれてお陰で、安全無事に、降下ポイントに到着だ！準備はいいか！？」

《はい！》

「スターズ3！スバル・ナカジマ！」

「スターズ4！ティアナ・ランスター！」

『行きます！』

2人がヘリのメインハッチから飛び出す。

「行くよ…マツハキヤリバー…！」

「お願いね…クロスミラージュ…！」

2人は真新しい相方に語る。

『Set up!』

《『study really.』》

「次、ライトニング！チビ共、気い着けてな」

スターズを降ろしたヘリは、ライトニングの2人の降下ポイントに到着する

キャラは不安に顔を曇らせる。

「一緒に、降りようか」

その様子を察したか、エリオが右手を差し出す。

「……うん！」

キャロはその手を握る。

「ライトニング3！エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4！キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キユク〜！」

『行きます！』

手を繋いだままメインハッチを蹴り空へ舞う。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

『Set up!』

4人はそれぞれの位置に無事降下、その時に自分達のバリアジャケットのデザインに気付く。

「あれっ？ね、このジャケッって…」

「もしかして…」

「デザインと性能は、各隊長さん達のを参考にしてるですよ」「
ラインが降下しながらバリアジャケットの説明をする。

「ちょっとクセは在りますが、高性能ですよ！」

「へえ〜…はあ〜…」

スバルはすっかり、お気に召したようだ。

「スバル！感激は後！」

ティアナが車内のガジェットの動きに気付く。

瞬間、ガジェットのレーザーが天井を破り、姿を現す。

《Drive ignition》

《Barrierbullet Bullet》

2機の音声を合図に、スターズ、ライティングの戦いが始まった。

同じく上空

「スターズ1よりロングアーチへ！制空権を奪取！」

なのはがロングアーチへ通信を入れる。

《了解！追撃態勢へ移行して下さい》

「航空戦力撤退の予備行動を確認、追撃します！」

「了解！ロン！久々に“アレ”行くよ！」

「OK！シルフィード！ダブルカートリッジロード！」

「バルディッシュ！カートリッジロード！」

《PlasmaLancer，WideBullet》

《PlasmaLancer》

「ランサーストーム！」

《Lancer storm》

「Fire！」

2人の指示に、シルフィード、バルディッシュは雷を纏う魔力弾を数多に生成、合図と共に50機程度にまで減ったガジェット群に追い討ちを掛けるように撃ち放つ。

放たれた魔力弾は吸い込まれるように着弾、残り全てを赤の火球に作り替えた。

「久しぶりのコンビネーションなのに結構上手くいったな〜」

ヴェストールが手を翳してそこを見る。

「やっぱり、愛の力は最強だね！」

「コレ…“愛の力”って言うのか？」

「にははは…よく解らないけど、無事片付いたね…（私もヴェストール君とコンビネーションしたいよ〜！…よし！今日ヴェストール君にお願いして私も…ノノノノノ）」

ヴェストールの疑問に苦笑いで応じるも、心の中では欲望が渦巻く
なのはであった。

「さて、早く新人のカバーに回らないと…！？」

リニアレールへ顔を向けたヴェストールの目線には、車内にいた？
型アームによって車外に放り出されたエリオと、それを救う為に飛
び降りたキャロとフリードリヒの姿が。

「エリオ！キャロ！」

「待って！ヴェストール君！」

なのはの制止を振り切ったヴェストールは飛び出した。全ての元凶
である物体に向かって…

「許さねえ…俺は…お前を…許さねええええ…！」

「ロンー！」

「ヴァール！トリプルカートリッジロード…！」

《Yes my master. Triple cartilage
e lord. Ranker Hammer.》

「うおらあああああ!」

大切な物を、大切な存在を、亡くした彼にとって、エリオとキャロの落下。それだけで全ての引き金なりえた。

ヴェストールの身体は、変わった(……)

髪は白銀に染まり、腰まで伸びる。紅い眼は輝きを増し、身体は蒼い“炎”に包まれる。

「てめえはさつさと…潰れていやがれ!」

実は一瞬の事だった。?型はそれに応戦するようにアームを伸ばして楯にするが、アームは潰れて根元から吹き飛び、自分を守る物が無くなった。

レーザーを放つもヴェストールの姿はブレて消える。

「クラツシュウウ…アンカアアアア!」

次に現れた時、?型は木っ端微塵に潰され、原型を留めなかった。ガジェットが完全に破壊された途端、ヴェストールの身体は元に戻る。

「ヴェストールさん!」

振り返ると、巨大な白龍に跨ったキャロとエリオがいた。

「エリオ！キャロ！大事無いか？」

「はい！」

「すみません…心配掛けてしまつて…」

「いいよ別に。お前らが無事なら…」

申し訳無さそうなキャロとエリオに対して、頭を撫でる。

此方スターズ4！7両目の重要貨物室にて、レリックを確保しました！

「ナイスティアナ！それじゃあ車内のガジェット一掃に専念しろ！」

「はい！」

ティアナの報告に一同は歓喜の声を漏らすか…

《此方ロングアーチ！高魔力反応がそちらに急速接近！警戒して下さい！》

「またかよクソ！イージス1！今から調査に向かう！スターズ1、ライトニング1は俺のサポートに回して下さい！4人はこのままガジェットの破壊に！リインはリニアールを停止させる事に専念してくれ！」

《『了解！』》

戦いの第二幕が上がる。

side out

side ヴェストール

ロングアーチからの報告に、今俺と、なのはさんと義姉さんでそっちに向かっているのだが…

「なんだって今日はこんなに疲れるんだ…はあああ…」

「あはは…これには私も参るな…はあああ…」

「あゝ…ヴェストール君にコンビネーションと練習したかったのに…はあああ…」

『はああああ…』

なんとも…テンションというかモチベーションというか…兎に角何も上がらないのだ。

《マスターも、なのはさんも、フェイトさんも！しっかりして下さいさ

いよ〜!》

「しかしな〜…」

そんな気の抜けた話をしていると…

「管理局魔導師であろう者がそんなだらけた態度で、しかもデバイスにまで注意されるとは…我も嘗められたものよ」

頭上から渋い声が聞こえてきた。

「……っ!」

そして、その姿に圧倒された。

身長は190?近くあり、筋肉隆々で、かなりゴツイ印象を与える。眼光は鋭く、眼はつり上がっており、右目には深い傷が走って、髪は碧で短め。ぱっさり言くと、俺と同じ髪色であった。

彼の身に着けている物は正に侍の着るような物で、右手に幅50?、長さ2m程の大剣を、左手には柄が2m、刃は1mは在ろうかと思われる程の薙刀を手に行している。

そして…

「我が名はヘルボルグ。そなたと同じ血を引いておる、【鍵】よ」

俺を【鍵】と呼び、腕に巻いたりボンを見せた。“ダルクスのリボン”を。

「なっ…！？くっ…ではヘルボルグ。貴殿が此処に飛来された理由を述べよ。そして【鍵】とは何だ？」

俺は驚愕した。しかし、そんな事はどうでも良いと考え、ヘルボルグに問う。

「私の理由はただ一つ…」

ヘルボルグはゆっくりと右手の大剣の先を俺に向ける。

「貴様を殺めにきた」

「なっ！？何ふざけた事を…」

義姉さんはかなり頭に來たらしい。

ヘルボルグは更に続ける。

「【鍵】とは…言わないでおこう。どうせ死ぬのだから」

「そうか…ならば仕方無い。ヘルボルグ、貴殿を公務執行妨害、並びに殺人未遂で…拘束させてもらうっ！」

俺はヴァールを構え、ヘルボルグへ飛びかかる。

「ヴァール！カートリッジロード！」

ヴァールから薬莖が一つ排出される。

「轟雷…一閃！」

「はあああああ！」

しかし…

「愚かな…アンタレス」

《Impact Air Break》

「ふん！」

ズドン！

右手の巨大な大剣から、重い音と共に強烈な衝撃波が俺を襲った。

「ぐっ………！」

「まだだ。シリウス」

《Flame Lancer》

ヘルボルグの周りを灼熱の炎槍が囲む。

「撃て…」

静かに薙刀の先を、先程の攻撃で怯んだ俺に向けると、炎槍は真っ直ぐに飛んできたが、

「レイジングハート！」

《Acceler shooter》

「シューート！」

「バルディッシュ！」

《Photon Lancer》

「Fire！」

俺の目の前で、桃色の魔力弾と金色の魔力弾が、炎槍を相殺した。

「ありがとうございます！なのはさん！義姉さん！」

「ほう…：そう言えば3人居るのであったな。ならば、3人纏めて掛かって来い！」

ヘルボルグは余裕を含んだ声で俺達を挑発した。

「そんなに」

「私達は…」

「甘かねえぞ！」

「レイジングハート！カートリッジロード！」

「バルディッシュ！」

「ヴァール！4thカートリッジロード！AMIMドライブブースト！」

「デイベイイン…バスタアアアー！」

「ハーケン…セイバアアアー！」

「オーブンファイアア…フルバレットオオ！」

一つの魔力刃と桃色と緋色の砲撃は、恐ろしい威力でヘルボルグに直進していく。

が…

「こんな物で…我に通用するとも思ったかつ！アンタレス！カ！トリツジロード！」

誰も視たことがない魔法陣が展開。

《A i r i a l C a n n o n 》

「撃て！」

大剣を振り下ろした瞬間、その魔法陣から濃緑の砲撃が飛び出した。

「はあああああ！！」

それは意図も簡単に俺達の攻撃を飲み込み、

《P r o t e c t i o n 》

3人で張ったプロテクションに輝を入れ、

「無駄だ！」

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

俺達は、たった（・・・）1人に、完全に力負けした。3人ばらばらになって、そこに墜ちていった。

「ぐっつ！」

高所から落ちた俺は地面に強く叩き付けられ、肺の中の空気が吐き出された。

「さあ、その息の根を止めてやる。楽になるぞ」

全く動けない俺に、空から降りてきたヘルボルグは、アンタレスを振り下ろす。

俺は死ぬ覚悟を決めた。

しかし……

俺の身体は繋がったままだった。

「な……んで……」

「貴様は助けられた。運にも、エリフィア様にも……」

エリ……フィア……誰だ一体……？

俺は新たな疑問と共に、その意識を奥深くに落とした……。

sideout

sideヘルボルグ

一体どうしたと言うのだ。エリフィア様に

「【鍵】を壊せ」

と命じられ、ここまで来たと言うに、止めを刺そうとした時に、

「【鍵】を壊すのは中止だ。これは“絶対命令”だ」

と言われ…やはり、よく解らないお人だ。

…しかし、我はあのお方に仕えている事に“何か”を感じている為に、背く事は先ず無い。まあ、背く事など出来る筈が無かるう。何よりも…

…あのお方の足下にも及ばないのだから。

「…早く戻らなくては…私の身が…」

兎に角、あのお方は気が短い。一刻も早く帰還せねば…

……痛いモノは我とて嫌いだ。

数刻後、我は無事に戻る事が出来たのだから……

何故か“罰”を喰らってしまった。何でも、

「なんだか失礼な事を言われた気がするから」

らしい。

このお方は私の心でも読めるのか……？
プライバシーもあつた物ではないな……

「ヘルボルグ！エリファイ様がお呼びだ！何故か知らんがかなり不機嫌だ。お前なんかしたか？」

「……私の墓標でも造っておいてくれ」

「はあ？」

はああああ……鬱だ。

side out

第6話 初出勤と蒼き炎 後編（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《さて、第6話、如何だったでしょ〜か？》

シ《さて、作者は何処ですか？》

…此処にいるよ…

ヴァ《うわぁ！急に怖いですよ作者！つて、大丈夫ですか…？》

かなりキツイ。もうなにも出来ない。脱力仕切ってやる気がでない作者の eagle です…

子ヴェ「さくしゃ〜、だいじょうぶ〜？」 作者をツンツンしてる。

そう言えば…贈り物があつたな…シルフ、お願い。

シ《本当にグロッキー状態ですね…それでは私から紹介させて戴きます。

清浦刹那さんより、作者とワルキューレにストライクカノンを2門からのありつたけを、マスターに清浦刹那さん特製のアップルパイを、ヴァールにはイムカを、私にはThe 3rd birthday より、アヤ・ブレアを元に作った後書き用（さすがに本編では…）

の擬人化データをそれぞれ頂きました!》

ああ…そんなのあったような…まあいいや、ワルキューレ召喚…

ワ「あら?また此処?」

ん?魔法陣が…

ワ「何か出てきた…」

ヒュイイイイイン…

嫌な予感しかない…

ドゴゴゴゴオオオオオオ!!!

作・ワ「……………」 驚きに固まり、そのまま呑み込まれた。

ヴァ《じゃあ、ヤツちゃいませう!》

イムカ(以後イ)

「…………問題ない…」 ヴァールを構えて発射態勢

『Open Fire!』

シ「コレが人の感覚ですか…少し不思議な感じがしますが、気に入りました!それでは…」 自分の【ストライクモード】で砲撃態勢

シ「ストライク…ブレイカー!」

ドガアアン!!
ズゴオオン!!
ゴシヤアアン!!
ズドゴゴゴ!!
バゴオオン!!

……スカガガゴゴゴオオオ!!……!!……!!
戦慄の音が響く。

子ヴェ「ハムツ!むぐむぐ……おいしい〜!」 めっさお気に召したようです。

子ヴェ「ハムツ!むぐむぐ……ハムツ!むぐむぐ……ハムツ!むぐむぐ……なくなっちゃった。せちゆなさんとこいって、またつくってもらおう!とそのまえに、ぼくがじかいよこく!

ヘルボルグに大敗を喫したヴェストールは、その数日後、聖王教会へ。そして、新たな予言は、世界を次の世界へ誘う。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS 〜ヴァルキユリアの血を引く者〜 第7話悪夢の始まり

人の叫びは闇を呼ぶ……」

第7話 悪夢の始まり（前書き）

第7話です！

第7話 悪夢の始まり

side???

「……ん……此処は…?」

清潔感のある真っ白な天井と壁、何故か掛けられている白い布団と横になっているベッド。ツンと鼻を突く消毒の臭いと見慣れぬ景色の中、ヴェストールは目覚めた。

「！ヴェストール君！大丈夫なん？」

「はやて…さん…?」

横を見ると、少し前まで泣いていたらしく、目を真っ赤にしてヴェストールの手を握っているはやての姿があった。

「うん！そうや。良かった…本当に…良かった…」

安堵から再び涙を流すはやて。

「すみません…心配を掛けました…ところで、此処は一体…?」

「聖王病院の病室や。ホンマにビックリしたで。“なのはちゃん達が墜ちた”って聞いて…」

その時、ヴェストールの頭に、記憶が映る。

「そうだ！なのはさんは、義姉さんは大丈夫何ですか！？っうっ
っ！」

「暴れたらアカンで。3人の中で一番酷かったんやから…。で、なのはちゃん達は大丈夫や。今は報告書を纏めてるんやと思う。デバイス達も無事やったけど、一応点検してもらってる。勿論、レリックは無事確保、リニアールを停止させる事も成功や」

「そうですか…俺、どれくらい寝てました？」

「そうやね…大体3日位やな。ヴェストール君の分は、なのはちゃんとフェイトちゃんがやってくれてる」

「じゃあ、退院したら俺の分の報告書、自分で纏めます」

「うん、そろそろ時間やし、6課に戻るな。ほな、お大事に」

はやてはヴェストールに手を振って、病室から出て行った。

「はい！ありがとうございます」

それに応えるように、ヴェストールも手を振った。

「フフツ…ヴェストール君と2人つきりで話せた…コレでまた一歩前進や！」

その時、廊下でガッツポーズをしてはしゃいでた美人時空管理局員が、看護師に注意されている所を目撃した人が多数いたとか。

機動6課隊舎

はやてが隊舎に戻って来たとき、フォワードの4人とフェイトとな
のが詰め寄って来て、ヴェストールが目を覚ました事を伝えた。

「良かった〜ヴェストールさん、目を覚ましたんですね」

「うん。そこそこ元気そうやったね。あと2日位で退院出来るそ
うや」

「ロンが…良かった…本当に…本当に良かった…グスッ」

「フェイトちゃん…」

「ヴェストール君が帰って来た時は、みんな笑顔で迎えてあげよう
な。勿論、パーティーを開いてお出迎えや!」

『はい(うん)ー』

side out

sideワルキューレ

第601管理外世界

アジト内部

「姉様…これはまさか…！」

「ええ…その様ね」

スクリーンに映るのは、私の大事な大事なロンと、彼を狙う輩。

「スノウ、奴らの規模は？」

「主要人物は6人、雑魚を含めれば20人程度ね」

「私達の4倍の戦力。でも、私達と同等、又はそれ以上はほんの数人。良い勝負ですね」

「エリア、管理局とあの馬鹿ドクターを忘れてるわよ」

「そう言えばそんな変態マッドサイエンティストもいましたね」

この娘つたら、すっかりその事忘れてたみたいね。まあ、実質上、私の眼中にはロンとアイツ等しか無いけど。

「そう言えば、メルトとリンはどうしたのかしら？今日はまだ見てないけど…」

「ああ…あの2人なら、奥でなんか模擬戦してるわよ。何でも、

“最後の一個のプリンは誰の物か”って話だったような…」

はあ…またあの2人は…戻ってきたら「私の物よ」って言って2人の前で食べてやるわ。フッフ…リアクションが楽しみね…

「姉様…黒いです」

「今のワルキューレに構ってちゃ駄目よ。碌ろくな事にならないから…」

ウッフ…楽しみだわあ…

side out

……

side ヴェストール

無事退院する事が出来、今は義姉さんの車に乗せてもらっている。

「義姉さん、ごめん。心配掛けて…」

「別にいいよ。健康な状態で無事に6課に戻れるんだから」

「うん、ありがとう…」

「どう致しまして」

少し、言うのが気恥ずかしかったから、俺は窓の外を見た。
そこに流れる景色は、何時も見慣れたクラナガンの街並みだけど、
少し懐かしい感じがした。1週間とは言え、意外と永くものだな。

……俺、なんだか爺臭い事考えてるな。
それはさておき、

「義姉さんもなのはさんも、支障をきたすような怪我じゃなかった
んだよね」

「うん、あの時ロンが私達の前にいて庇ってくれたから、怪我は殆
ど無かったよ」

「そっか…良かった」

それから、俺と義姉さんは6課に着くまで、たわいもない事をずつ
と話していた。自分達の昔話やなのはさんの事、はやてさんの事な
どを…

……

「ん〜！懐かしいぞ〜！」

「ロン、1週間居なかったただけだよな？」

「まあ、そうなんだけど…」

自分の発言に自分で苦笑い……
今更ながら、なに言ってるんだろ。

「私車置いてくるから。ちょっと待っててくれる？」

「いいよ」

「ありがとう！」

……一瞬ドキッとしたぞ。いや……我が姉ながら破壊力抜群の笑みだな。うん。

「ロン、どうしたの？一人で頷いて……」

背後から義姉さんの声が聞こえた。

何時の間に！？俺そんなに考えてたのか？……ヤバい、俺変態だわ。本格的に……

「？ロン？」

「ああ……え……と……何でもないよ。早く行こ！」

「うん！」

無理やり話反らせたけど、何とかなった……やべえ、顔が熱くなってきた。絶対顔真っ赤だよ。

「ロン？ホントに大丈夫？顔真っ赤だよ？」

「のわあ！だっ、大丈夫だから！さっさと行こ！」

やっぱり顔真っ赤だったか。しかも顔覗き込んで見られたし……は、恥ずかしい……

さて、気を引き締めますか。今日から復帰だ。迷惑掛けた分、頑張るZE！

6課隊舎のドアが開く。

「皆さん……ヴェストール（君）（さん）！退院おめでとう（いざいませ）！」……は？」

俺は、クラッカーの弾ける音と6課の皆さんの声に出迎えられた。壁には

『ヴェストール君！退院おめでとう！』
とカラフルな文字で書かれた横断幕が。

「これは一体……ロンが帰って来るときにビックリさせようって、はやてが考えたんだよ……義姉さん……」

「……お帰り、ロン」

「……義姉さん、はやてさん、みんな……ただいま。そして、これからもよろしくお願いします！」

その夜、俺の退院を記念にパーティーが開かれたのだから……

「ロン〜一緒にねよ〜」／／／／／

「えへへ〜……ロン君も一緒にねよ〜」／／／／／

「一緒に寝てくれへんか」ロン君：「……………」

あろう事か、義姉さん、はやてさん、なのはさんが酔っ払って俺に抱き付いてきた。しかも一緒に寝ることをご所望だ。
勿論、俺は自分の理性と貞操の為に拒否。何時の何倍もの労力を使っ
て逃げ延びたのは言わずもがな。

……………

数日後、朝から聖王教会へ行く用事が在ったため、俺は6課の駐車場から車を出した。因みに車は青いスポーツカー。義姉さんのより少し安いけど、スペックはこっちの方が上。見た目は、地球のスライ
イラインGT-R・R35になると思う。

駐車場を出ると、シュミレーターの方から歩いてくる集団を発見し
た。

「おはよ、みんな、なのはさん」

「おはようございます！」

「ヴェストールさん、お出掛けですか？」

スバルが元気よく挨拶を返し、キャラが行き先を訊く。

「ああ、聖王教会にちよつと……」

「そうなんですか…あと、その車、ヴェストールさんのだったんで

すか？」

ティアナとエリオが俺の車をまじまじと眺める。

「ああ…そうだが…見るの初めてか？」

「はい。駐車場で見たことはありませんが…」

「それがロン君のだとは知らなかったな」

新人達は解るけど、なのはさんまでとは…

「あたしは乗ったこと有るから知ってたぞ」

「そう言えば、ヴィータさんを何の用事が忘れたけど、送った事があつたな…」

「そつなのヴィータちゃん？」

「おう。座席の座り心地は最高だったな」

「へえ…そつなんだ…」

なのはさんが明らかに不機嫌にな顔をした。何故だ！？

「…ヴェストールさん、鈍感な重犯罪です」

ティアナが何か呟いた。なに行ってるか解らないけど。

「…ロン君なんて知らない」

「んな理不尽な……」

『あははは……』

……

結局、今度2人でどっかに行く事なのはさんは許してくれた。因みに、何故かティアナもスバルもお願いしてきた。別に拒否する事も無いからOKした。

そして現在、聖王教会の執務室で義兄さんとカリムさんと一緒に座って、初出勤の時の話をした。

「……と言う事だ。何も思い当たる事も無いし……やっぱり、この力の所為なのか？」

「余りに情報が少な過ぎるが……否定は出来ないだろうな」

……この血を恨めば、俺の父さんと母さんを否定する事になっちまう。だけど俺の所為で他の人に迷惑は掛けたくない……。かと言って自分1人で解決出来るような話でもない。

そして何より……

「蒼の破壊者は 聖者に対する 全てを握るは 【世界の鍵】 なり」か……全く話が読めない」

「でも、“鍵”の所がロンを指しているのは合っているのでしょうか？」

そう…アイツ、ヘルボルグがあの性格上、嘘は無い事だと考えられる。

「多分…間違っではないと思う」

【鍵】って何のことだ？一応、ユーノさんは調べてくれるらしいけど…

兎に角、今の俺の考える予測の1つの線が、濃くなってきた。

……近い内に、全てを奪う醜い争いが起きると…

世界の歯車は狂う。

以前よりも更に早く、音を立てて…

悪夢の入り口は、謎めいていた。

s
i
d
e
o
u
t

第7話 悪夢の始まり（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《何時もながらに始まりました〜！今回は第7話でした〜！》

シ《また私達の出番無しですか…メンテなんでしょうがないですが》

実際は出そうか考えたけど、ややこしくなるから今回は出番無しにしました。作者の eagle です。

ヴェ「やっとこさ元に戻れた…主人公のロンメルだ」

なのはさん、色々とありがとうございました。

な「にははは、コレくらいならなんともないよ。（やったー！ロン君とトークショーに出れた！）」

ヴァ《心の中の叫びがだだ漏れですね〜…》

それぐらい嬉しかったんだよ。

さて、今回も贈り物を頂きました！

シ《清浦刹那さんより、マスターにチーズケーキ（意外に簡単でし

たねえ」を頂きました。ありがとうございます《

ヴェ「むぐむぐ……チーズが濃い……ほんのりレモンの香りが……総評！星5つでっすっ！」

ヴェストールは少し味にうるさいです。

ヴェストールも上機嫌な所で、なのはさん！次回予告お願いします！

な「なんで私なんだろう……でもちゃんとやるの！」

初出勤から数日後、機動6課に初の出張任務が。そして、その出張先で運命の再開が……？

次回 魔法少女リリカルなのはStrikerS 〈ヴァルキュリアの血を引く者〉 第8話 出張任務は郷帰り？ 前編

古の炎は伝説の始まり……」

第8話 出張任務は郷帰り？ 前編（前書き）

お待たせしました！第8話です！

因みにOPイメージは「DARKER THAN BLACK 流星の双子」よりステレオポニーの「ツキアカリノミチシルベ」です。

第8話 出張任務は郷帰り？ 前編

sideヴエストール

初出勤から数日後

はやてさんから派遣任務の話で呼び出されて部隊長室行ったら…

「【地球】…ねえ…」

《どうしたんですか？マスター？》

「ああ、いや、なんでもない…」

《そうですか？》

…急過ぎて緊張しちゃったよ、全く…何年振りだろ？まあ、義母さんと義兄さんに許可貰うか…

みんな元気にしてっかな？今まで行く機会が減多に機会無かったからな…偶には顔見せないと…

sideout

s i d e エリオ

機動6課に来てから初めての主張任務。フェイトさん、なんだか嬉しそつだったな…

「エリオ君、早く準備してヘリポートに行こ？フェイトさん達待ってるかもしれないよ」

「うん！」

それにしても…なんで私服を着ていくんだろ？しかも着替えまで持つて行くなんて…

s i d e o u t

s i d e ????

約2時間後

機動6課屋上

ヘリポート

「…あ！エリオ！キャロ！」

スバルが扉の方に声を掛ける。

「スバルさん！ティアさん！」

「すみません。お待たせしました」

エリオとキャロが到着。

「まだ大丈夫よ隊長達来てないみたいだから…」

ティアナが扉の方を向いて話していたら…

「“誰が”、まだ来てないって？」

4人の後ろから優しそうな、そして此処では聞き慣れた人の声が。

『…！！！！…？』

「…何だ？俺に変なものでも付いてるか？」

「ヴ、ヴェストールさん！？」

4人の後ろには、青いパーカーに白いワンピースシャツ、黒いジーンズと黒と白のハイカットスニーカー、首にヴァール、左腕にシルフを付けたヴェストールの姿が。

「あ、ああ。そうだが…。…ティアナ、俺ってそんなに驚かすような真似したか？」

「い、いえ！そんな事は…（ああ…ヴェストールさん、ふつくしい…／／／／）」

ヴェストールはフォワードの4人に露骨に驚かれ凹む。

ティアナはヴェストールを見た瞬間、心を奪われていた。

何時も寝る前にヴェストールのあんな姿こんな姿を妄想しながら寝るだけあるな。by作者

「あれ？なんか悪寒が…気の所為か？」

「どうかしましたか？」

「…いや別に」

スバルは珍しく熟考し、導き出された答えは…

「何時の間にそこに…はっ！まさか…」俺はロストログアじゃねーよ、スバル」…ですよね。あ、あははは…」

思っていたらしいが、ヴェストールにツッコまれて応えようが無くなった。

「…スバルさん、それはちょっと…」

キャラが若干引いた…

「…なあティアナ」

「な、何でしょう？」

「…やっぱり辞めとくわ」

「いや、途中で止めないで下さいよ。気になるじゃないですか」

「気にするな。あんまり意味の無い事だから……」

「はあ……」

「まあ、それは置いといて、そろそろか……」

ガチャ……

屋上のドアが開くと……

「みんなお揃いやね」

「あれ？八神部隊長にヴィータ副隊長」

「おう」

「シグナム副隊長とシャマル先生まで……」

「ああ」

「は……い……」

「ラインもいるです……」

「リイン曹長も!？」

はやて&リイン&ヴォルケンス(ザッフィー以外)となのはとフェイトが。

「まさか…この全員で出撃ですか？」

「うん、部隊はグリフィス君が指揮を執ってくれるし、ザフィーラがしっかり留守を守ってくれる」

「詳細不明とはいえ、ロストロギア相手だし、主要メンバーは全員出撃って事で」

「後は…行き先も、ちよつとね」

「行き先、何処なんですか？」

ティアナがフェイト達に訊く。

「第97管理外世界、現地惑星名称、【地球】」

はやての応えにフォワード4人は顔を見合わせた。

「その星の小さな島国の小さな町。日本、海鳴市。ロストロギアはそこに出現したそうや」

「【地球】って、フェイトさんが昔住んでた…」

「うん」

「私とはやて隊長はその生まれ」

「そつちや」

「私達は6年程過ごしたな」

「うん…向こうに帰るの久しぶり」

「まあ、ある程度の広域捜査になるから司令部も必然やしな」

「つつつ事では出発だ。準備はいいか？」

『はい！』

「では…出発！」

因みに、その間ヴェストールはと言つと…

「……と言つ訳でお願いしたいんだが…」

《良いわよ。みんなきつと喜ぶわよ》

《ずっと…何時までも…見ていてくれるわけだし、ちゃんと挨拶して来いよ》

「……ありがとう、義母さん、義兄さん」

《気にしない、気にしない。なんたって私達は…》

《家族だからな》

「ああ。んじゃ、行って来ます」

.....

へり内部

「丁度この間みんなの故郷の話をしたばかりで、なんか、不思議な
タイミングですね」

「えっへへ、ホント！」

スバルとエリオが談笑している横でキャロとティアナが開いたウイ
ンドウで地球の情報を閲覧している。

「えっと……第97管理外世界、文化レベルB……」

「“魔法文化無し、次元移動手段無し”って、魔法文化無いの？」

「無いよ。うちのお父さんも魔力0だし」

スバルがティアナ達に向けて言う。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

「うん！」

「いや、何でそんな世界からなのはさんとか八神部隊長みたいにオ
ーバースランク魔導師が…?」

「突然」と言うか“たまたま”な感じかな」

そんな呟きに応えるようにティアナ達に話すはやて。

「へっ!? あっ、すみません…」

「ええよ別に」

「私もはやて隊長も、魔法と出逢ったのは偶然だしね」

「な」

『へ〜(は〜)…』

「あっ、故郷と言えば…ヴェストールさんは何処なんですか?」

ふと思いついたのが、キャロがヴェストールに訊く。

「ん? 知らないの? って言うか、聞いてないのか?」

「はい、誰からも…」

「なのはさん達は?」

「私も知らない」

「私も」

「義姉さんは流石に…」

「…ゴメン、知らないんだ」

「…何で誰も…自意識過剰かな？…まあいいや。ぶっちゃけると、なのはさんとはやてさんに同じく地球出身だ」

『…………ええええええ！！！！？？？』

その場にいる全員が疑問詞を叫ぶ。

「…だから五月蠅いって、こん中響くんだぞ。…ん？前にも同じ様な事言ったような…………まあそれは置いて、地球出身だけど、日本じゃない」

「何処ですか？」

「俺はヨーロッパの小さな内陸国、アルプス山脈のど真ん中に位置する自然豊かな永世中立国、スイスだ」

ヴェストールはウィンドウを開き、スイスの情報、映像を全員に見せた。

「スツゴい…………」

「綺麗ですね…」

「全くだ。“美しい”の一言尽きるな」

三者三様の反応だが言っていることは決まって褒め言葉だった。

「どうも。つても、俺はスイスの代表じゃないからなんとも言えないが」

ヴェストールはそんな事を言いながらも嬉しそうな顔していた。

「ヴェストールさんはどうやって魔法に…？」

「……………ちょっと、な」

「ちょっとスバル！すいませんヴェストールさん…」

「いや、気にするな」

スバルがヴェストールに訊くが、ヴェストールは窓の外を見てごまかした。

何か、壊れそうな感覚に襲われて…

「…今は話せないけど、来るべき日が着たら必ず教えてやる。俺の魔法との出逢いを…」

……………

少ししてシャマルがガサゴソと何かを取り出し、それをラインに渡す。

「はい、ラインちゃんのお洋服」

「ふわ〜！シャマルありがとうです〜！」

それは普通の子供サイズの洋服だったが…

「えっ？リインさん、その服って…」

「はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」

「ああ、そうではなく…」

「なんか普通の人のサイズだって…」

「俺もエリオとキャロに同意」

いくらはやての幼い頃のお下がりとは言え、リインには些か大きすぎる。

「お…あは、フォワードのみんなとヴェストールさんには見せたこと無かったですね」

『ん？』

5人の視線がリインに注がれる。

「システムスイッチ、アウトフレーム・フルサイズ！」

リインから眩い光が溢れ、それが治まると…

『ああっ（おお〜）！』

子供サイズにまで大きくなったリインがいた。

「っと。一応、これくらいのサイズには成れるですよ！」

「でかつー！」

「いや、それでもちっちゃいけど…」

「それでも十分でかくなっただと思うぞ」

「普通の女の子のサイズですね」

4人の中で最年少のキャロだけがまともな感想だった。

「向こうの世界では、リインサイズの人間もいなければ、ふわふわ飛んでる人間もいねーからな」

「あの…一応ミッドにもいないとは思いますが…」

「はい……」

ヴィータの発言に言い辛そうだがツッコむティアナとスバル。

「ん〜…大体エリオとキャロに同じくらいの大きさだな」

ヴェストールがリインとキャロ、エリオを見比べる。

「ですね」

「リインさん、かわいいです」

「リイン曹長、その大きさの方が便利じゃないんですか？」

「こつちの方が燃費と魔力効率が余り良くないですよ。コンパクトサイズで飛んでる方がラクチンなんです！」

「なるほど〜…」

「なんとなく納得出来るような……ん、そろそろ時間が…」

キャロと共に納得していたヴェストールが、自らの腕時計を見てはやて達に言っ。

「すみませんはやてさん。俺そろそろ向こう行きます」

「ん？ちよつと早過ぎとちやうん？」

「ポートにも着いてないよ」

「どつちやって行くの？」

はやて、なのは、フェイトの順に訊く。

「時間は皆さんより早めに行く事になってたので。移動手段は初出勤の時のワープホールで俺のお世話になった人の所へ。その人は魔法の事は既に知っていますし、問題ない筈です」

「そ、そうなんか……って、ロン君海鳴に行った事在ったんかい！」

はやてがヴェストールの言った事にツツコんだ。

「はい、2年前の出張捜査先があそこだったんで。エイミイさんと

義兄さん、義母さんに協力してもらって、高校にも“留学生”って事で1年間通ってました」

「それじゃあ向こうの人もその高校の人だったんだ」

「そう言う事。それじゃあそろそろ」

「うん。それじゃあまた向こうでな」

「はい、また向こうで。行って来ます」

ヴェストールははやて達に挨拶し、足元からせり上がってくる次元の歪みの穴に消えた。……………

シグナムが操作していたウィンドウを閉じる。

「はやて部隊長、そろそろ…」

「うん、ほんならなのは隊長、フェイト隊長、私と副隊長達は今日寄る所があるから…」

「うん、先に現地入りしとくね」

「ほなな〜」

はやてはなのは達を向いて別れを告げた。

『お疲れ様です!』

s i d e o u t

.....

s i d e ヴェストール

第97管理外世界【地球】

日本・海鳴市

現地時間10:20

「ん〜まだかな〜」

海まで見ることの出来る見晴らしの良い高台の一角の公園のベンチで、1人の見覚えのある女性がキョロキョロしながら座っていた。背は160弱とそこそこ高く、足は長い。ショートヘアにした黒い髪は肌の白さを更に際だ出せる。

目は茶色でまん丸。身体の割には少し幼く見える。

ピンクの半袖Tシャツに黒いパーカー。裾の解れたジーンズ生地のホットパンツから長い足が伸び、ヒールの高い白のサンダルを履いている。

「1年ぶりか〜...どうしてたかな〜...」

足をブラブラ、腕を高く上げて延びをする。

「くくつと！今日もいい天気だな」

「全くだ。ここもあんまり変わって無さそうだしな…」

挨拶ついでに驚かせようと静かに近づき、すぐ後ろまで来たときにそう言った。

「むっ！その声は我が嫁ローニーのかつ！？」

声に気づき、俺の方に向く。

「誰がお前の嫁か馬鹿やろう。そして“ローニー”はやめね。ってかそんな風に呼ばれた覚えもねえ」

ベシッ！

「あうっ！？1年ぶりに逢ってそのツッコミの鋭さ…流石はボクの嫁！」

ベシッ！

「だからお前の嫁では無いと言ってんだろっが、“馬鹿ぼたん”」

「むう〜！“馬鹿”言うな〜！」

俺の所に来てぽかぽか殴る。

こいつの名前は御媛ぼたん。俺が高校に居たときの親友であり、俺が魔導師という事を知っている数少ない知り合いだ。

んでもって、自分の事を“ボク”と言っているところから解るだろうが、所謂“ボクっ娘”だ。そしてこんな風に俺とふざけあってるぼたんだが、なんだかんだで“美人”の部類に入る。だから学校でファンクラブがあったりしたりしい。詳しくは知らないが。

「わりいわりい…久々だったもんで、つい弄りたくなった。出来心でやった。反省はしていない」

「久々に逢って弄りたくなった”って、言ってる事最低だよ！？しかも反省しなさいや！」

俺のボケに怒涛のツツコミ。うむ、こやつも腕はナマっていないようだ。

「ははっ！しっかし…変わってないな。ここもお前も。逢った時からそのまんま、懐かしー…」

「ロン、ボクだって大きくなったんだよ！背とか、その……“胸”とか……」／／／／／

「恥ずかしいなら言わなければいいだろうが」

「べ、別に恥ずかしくなんかないよ！だってロンだもん！あと、さっきの言葉おやし臭かったよ」

え？マジか…

なんか“俺だから別にいい”発言は気にしないけど、おやし臭いのは勘弁。

「それはそうと、みんな待ってるよ。早く行こ？」

「おう！」

「それじゃあ、しゅっぱあ〜っ！」

……全く、何時も通りに元気な奴だ。それだけがあいつの自慢だがな。

「なんか失礼な事言った？」

ぬおっ！？心読まれた！

しか〜し！俺はそれを隠さずにスルーといこっ。

「……いんや別に？」

「その間は何！？何なの！？そして何故疑問型！？ボクが解らないよ！それで何でボクの事無視するの！？」

「……今日もいい天気だな〜」

「シカトしないでっ！」

今日も愉快になりそうだ。

心底からそう思って笑うことが出来たのは何時以来だろうか…

s i d e o u t

.....

s i d e ????

第97管理外世界【地球】

日本・海鳴市

月村邸

現地時間 11:00

その日も月村邸の猫達は、何時も通りに陽向でお昼寝、じゃれあい。ゆったりまったり気長な1日を過ごそうとしていた。

しかし、それは突然の来訪者によって“少しだけ”乱された。

猫達の頭上が明るく光り出し、光が治まるとそこには、3人の大人と1人の幼j...

「オイ作者、グラフィアゼンの錆びになりたいか？」

.....ゲフンゲフン、もとい4人の女性が現れた。

「ヴィータは誰に話していたんだ？」

「気にすんなシグナム。独り言だ。それよりはやて、さっさと行く」

うぜ」

「そうやね。久しぶりに逢うんやし」

この4人の目的、それは1人の人物と逢うことだ。そしてその人物とは…

「はやてちゃん！」

「すずかちゃん！」

なのは達の幼なじみの1人で、この邸宅の所有者の1人。資産家の次女の大学生の月村すずかである。

「久しぶりやすずかちゃん！元気やったか？」

「うん！元気元気！」

「何時もメールありがとうな。あと、にゃんこの写真」

「ううん、はやてちゃんこそ。ありがとう、何時も気を使ってくれて」

「あゝもう！そんなん、お家のお庭転送先に使わせてもらってるんやし…」

はやてと一通り話し終わると、すずかはヴォルケンスの方を向いた。

「皆さんも、お久しぶりです」

「ご無沙汰しています」

「お久しぶりです」

「すずかちゃん、ますます美人さんに」

「あ、ありがとうございます」

上からすずか、シグナム、ヴィータ、シヤマルの順に挨拶した。(シヤマルの場合、挨拶と言うより褒めただけ?)

「お仕事だから、あんまりゆっくり出来ないんだよね?」

「うん…なくし物探し何やけど、実際はそうでもないみたいやね。クロノ君もリンディさんも、何か隠してるような…まあ、詳しくはロン君にでも聞けば大丈夫やろ…」

“ロン君”とはやてが言ったとき、すずかが反応した。

「ねえ、はやてちゃん。その“ロン君”ってロンメル・ヴェストール君の事だよな…?」

「うん、そうやけど…って、何ですずかちゃんがロン君の事知ってるん!?!」

まさかの新事実!

“月村すずかはロンメル・ヴェストールとの面識が有った!”

「2年前位に高等部の2年生に留学生で来た人でね、私とアリサち

やんが絡まれてる所を助けてくれたんだよ！勿論、管理局の凄い魔導師さんって事は聞いたから知ってたけど……」

「そうだったんか！知らなかったな……」

「それじゃあロン君は今このどこかにいるんだ……」

「うん、用事があるらしいから単独行動してると思う」

「そっか……じゃあ頑張つて、時間在るようならご飯とか一緒に食べよう……」

「きつと……」

「車、使うよね。今ガレージから出してくるから……」

「あつ、私も一緒に行く！ほんならみんな」

「うん、行ってらっしゃい」

「入口の方で待っています」

「今日はアリサちゃんとお出かけの約束だから、途中まで一緒に行ってもいいかな？」

「ふふっ！もっちろん！」

入口の方へ移動し始めていたヴォルケンスは、楽しそうな2人の姿を優しく見つめていた。

.....

第97管理外世界【地球】

日本・海鳴市

同時刻

バニングス家別邸

美しい湖の畔に建てられたらコテージ。そこ近くに眩い光と共に7人の男女が現れた。

「はい、到着です！」

「わあ〜……」

「ここが……」

「なのはさん達の……故郷」

4人がきよろきよろと見回しながら呟く。

「そつだよ」

「ミッドと殆ど変わらないでしょ」

「空は青いし、太陽は1つだし…」

「山と、水と、自然の匂いもそっくりです!」

「キユクル〜!」

キャラの言葉に同意するよつにフリードが相槌を打つ。

「うん」

「と言うか、ここは具体的には何処でしょう?なんか湖畔のコテージって感じですが…」

ティアナが今現在の場所に疑問を抱いた。

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く許諾してくれたんですよ」

「現地の方…」

その時、自動車のエンジン音がこちらに近付いて来るのが解りそつちを向くと、1台の自動車が近くに来て止まった。

「あつ、自動車…」

「こつちの世界にも自動車って在ったんだ…」

…ティアナよ。君の考えていた地球ってどんな文化を持っていたんだ…by作者

そして、その車の中から出てきたのは…

「なのは！フェイト！」

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

このコテージの所有者であり、すずかと同様になのは達の幼なじみの1人。アメリカ人実業家を父に持つ大学生、アリサ・バニングス本人だった。

「何よもう！ご無沙汰だったじゃない！」

「ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって…」

「あたしだって忙しいわよ。大学生なんだから」

「アリサさん！こんにちはです！」

なのは、フェイト、アリサが話しているところにフルサイズ（それでも10才位の身長だが）のラインが加わった。

「ライン！久しぶり」

「はいです〜！」

フェイトがフォワードの4人に向き直り紹介する。

「紹介するね。私となのはとはやての友達で幼なじみの」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

『よろしく願いします！』

「うん！あつ、そう言えばはやて達は？」

はやてがいない事に気が付いたアリサ。

「別行動です。違う転送ポートから来る筈ですので」

「多分、すずかの所に……」

「ふん……」

「あともう1人いるんだけど、その人も別行動で私達とは別の所から来るよ」

なのはが更に付け足した。

「確か“管理局最強”って言われてて、ケーキとか作るのが上手なのよね」

「うん！……ああ……早くロンのケーキが食べたい……」

「にははは……フェイトちゃん……よだれ垂れてるよ。しかも本音がただ漏れ。でも、実際ロン君のケーキを食べたいのが本音だね」

なのはが苦笑いでツツコむ。

「ん？“ロン”って言った？」

そこに反応したアリサはすかさず2人に質問した。

「うん。私の義理の弟で、なのはと同じ一等空位のロンメル・ヴェストールだよ」

アリサがその事実を知った瞬間、

「えええ〜！！それホントなの！？ホントにロンが来てるの！？」

凄じ勢いでなのはとフェイトに問い詰める。

「う、うん……」

「落ち着きなよアリサ。夕方には私達と合流するから、その時に会えるよ」

「う、ううん！解った！そうするわ。…まさかロンが来てるなんて

……」

「アリサちゃん、ロン君と会ったことあるの？」

余り態度の豹変さになのはが質問した。

「うん。2年前、私とすずかが不良に絡まれてる時に助けてくれて、それで次の日に“後日ちゃんとお礼しよう”って話になったのよ。それで学校着たら“2年の所にカッコいい留学生が来た”って噂が回ってて、行ってみたらそこにいたのがロンだったの。それからロンは1年間こっちにいて、私達が高等部卒業と共に管理局に戻ったのよ。確か、なんかの調査で来たって言ってたわね……」

「ふうん……」

「そうだったんだ……」

アリスの話に頷くのはとフェイトであった。

……

「ここ歩くの1年ぶりだな……ってか全く変わってないな」

「そんな1、2年で変わったらたまったもんじゃないよロン」
「それもそうだ」

ちょうど同じ頃、ある学校の前をゆつくりと歩く2人、「ロンメル・ヴェストール」と「御媛ぼたん」はある場所を目指していた。

「おーい！ぼたん！ロン！」

その時、前方に手振る男女がいた。

「おおっ！龍也！佐依も！」

「おっひさ〜ロン！元気してた〜？」

2人を見つけたロンは走り寄り、女性とハイタッチをした。

「当たり前だ。そっちの2人も元気そうだな」

「あたぼうよ！俺の全ては元気だからな！」

「龍也は元気だけが唯一の取り柄だから」

「全くその通りだよロン！馬鹿は元気しか価値が無いからね！流石はボクを虜にしただけあるね！」

何時の間にか追い付いたぼたんがヴェストールの横で自慢気に言う。

ベシッ！

「俺はお前を虜にした覚えはない。勝手に引っ付いてるだけだろうが」

それをツツコミで返すヴェストール。

「えっ！？何！？“馬鹿は元気しか価値が無い”って所はお咎め無しなの！？」

「だって合ってるじゃん。龍也が馬鹿なのは」

「佐依」と呼ばれた女性が「龍也」と呼ばれた男性に止めを刺した。

「みんなして酷いですっ！！」

それではここで紹介

女性の名は「季櫛佐依^{きこし}」。背は156程、長く艶のある黒髪に整った顔立ち、凜とした目、雪の様に白い肌は、大和撫子を彷彿とさせ

るが、活発で偶に暴言を吐いたりなど、イメージと実際のキャラに大きなギャップがある。

次に男性の方を。

名は「仲澄龍也」なかずみりゅうぜ。背は192となかなかの長身。がたいが良く、面倒見も良い。高等部の最終学年ではサッカー部のキャプテンをしていた。日焼けした浅黒い肌に優しさを含んだ鋭い目、髪は黒く、短く切りそろえられている。但し、勉強に関しては風の前の塵に等しい。

また、2人共高等部での人気は今尚衰えない。勿論ぼたんもだ。

そして2人はぼたん同様、ヴェストールの親友であり、ヴェストールが魔導師であることを知っている。

「ロンは大丈夫なの？今日は部隊の主張任務なんですよ。仕事しないと駄目なんじゃない？」

「そこは大丈夫。ちゃんと義母さんには許可取ってるから」

「ほお…んじゃあ早速行きますかあ？」

龍也が3人に訊く。

「いざ！「喫茶翠屋」へ！」

佐依が掛け声を上げる。

「おおおお！！！」

ぼたんが蒼空へ拳を突き上げる。

「全く……元気良すぎて五月蠅いぞ、親しい大馬鹿共」

と言いながらも満面の笑みを浮かべるヴェストール。

「それが」

「私達の」

「トレードマークだよ!」

「ぼたんと龍也は良いとして、せめて俺だけはそこから外してほしい」

「無理だな」

「無理だね!絶対!」

「……………テンション下がるわ……………」

『何でホントにイヤそうなんだ!?!』

ぼたん「と龍也がツツ」む。

「だって……………なあ?」

「私に言われても……………でもロンには賛成するかな?」

『佐依の裏切り者!?!』

『いやいや、裏切ってないから。そもそもお前ら2人と一緒にする

な馬鹿』

『ヒド過ぎやしませんかお二方!!』

『いや、正論だが』

「ぼくは龍也と一緒になの!？」

「そうねえ……ぼたんは私達と同じで良いわ。デメリットないし」

「やた〜!」

「俺だけ……仲間外れ……」

『今更?』

「ロン達のばかああああ!!」

「ばいばい!」

賑やかな4人組は思い出の母校から通い慣れた喫茶店へと歩き始めた。

【聖者の血を引く者】の休暇は、この日を境に【聖者による世界の聖戦】の序章になる事は、神でさえ知り得なかった。

s i d e o u t

第8話 出張任務は郷帰り？ 前編（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《さてさて、毎度同じく始まりました【後書きトークショー】
！今回は第8話をお送りしました〜！》

シ《今回も出番が殆ど無いですね》

うん、君達の事、書いてる途中から忘れてた。作者のe a g l eで
す。

シ《それにしても…この調子で行くとオリキャラだけで優に20人
行っちゃいそうです。作者はちゃんと書き分け出来るのでしょうか？》

…なんとか頑張ってみます。

ヴェ「それで、何故俺の親友がヤンデレだったのか、教えてくれる
か？」

ただ単にこの後の展開をひっちゃかめっちゃかにして欲しかったか
ら。

「それだけで!？」

うん。では、この人召喚！

ぼたん（以後ぼ）

「おや？ここは何処だい？」

ヴェ「何故このヤンデレ呼びやがった！？」

え？それは……ガクブル

ヴェ「……すまん。聞いて悪かった」

ぼ「ねえロン、なんかあっちにあるよ？」

ヴェ「へっ？」

指した先：何故かピンクな空気を醸し出した防音室

ヴェ「……」 冷や汗どっさり顔真っ青

ぼ「いつてみよ？」

ヴェ「い、いや、えええんりりりよさせていただきます！！」

ぼ「ねえ……行こ？」 どっから出したか知らないが、ヴェストールにマグナムを当ててる

ヴェ「……はい……」

ヴァ《ねえシルフ、2人はどこ行くの？》

シ《……あなたはまだ知らなくていいです》

ヴァールはピユアだね。

ヴァ《？》

シ《ですね》

気を紛らわすために、ヴァール！次回予告よろしく！

ヴァ《へっ？あ、うん。

ぼたん達と再開したヴェストールは、喫茶翠屋で高町夫妻とも再開。そこにスターズとライトニングが合流し…

変わって夜、BBQにスーパー銭湯、ロストログアの確保を終えたヴェストールにすずかから贈り物が。そして、遂にヴェストールを狙う理由が証される。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers 〈ヴァルキュリアの血を引く者〉 第9話 主張任務は郷帰り？中編

白銀の髪は聖者の証…

それで2人は？》

作・シ『君はまだ知らなくていいよ』

第9話 主張任務は郷帰り？中編（前書き）

お待たせしました！

第9話です！

第9話 主張任務は郷帰り？中編

side???

第97管理外世界【地球】

日本・海鳴市

喫茶翠屋

「土郎さん！桃子さん！こんにちは！」

『こんにちは！』

店の扉を開けて、威勢の良い声で挨拶したのは「仲澄龍也」。それに続いて「御媛ぼたん」と「季楢佐依」が入ってきた。

「おや、龍也君にぼたんちゃん、佐依ちゃんまで。いらっしやい」

それに対応したのは「喫茶翠屋」のオーナー「高町土郎」

「あら、みんな今日も来てくれたの？」

そして、土郎の妻でここのパティシエを務めている「高町桃子」だった。

「ええ、でも今日はフルメンバーで来ました！」

「フルメンバーってことは……まさか！」

龍也の“フルメンバー”に反応したのは高町夫妻の長女「高町美由希」。

「その通りですよ美由希さん」

その3人の影から出て来たのは「ロンメル・ヴェストール」本人だった。

「おお！久しぶり。また大きくなったね、ロンメル君」

「はい！お久しぶりです。土郎さん、桃子さん、美由希さん………
つて、あれ？恭也さんは？」

その時、1人足りない事に気付いたヴェストールは土郎に訊く。

「ああ、恭也なら、今は忍ちゃんと一緒にドイツだよ」

「拳式の場所でも決めてるんですか？それとも…はっ！まさかお2人はもうすでに…」

「いや、まだみたいだから。ただの仕事だから。…ロンってこいつ
うのでポケ取るの好きね」

「いやあ、一番しやすいからさ…」

「あはは！ラクしてるね」

「まあな！で、土郎さん、桃子さん、頼みがあるんですが…」

ヴェストールが土郎と桃子の方へ向く。

「ん？また何時も様にケーキでも作るのかい？」

「はい。新作考えてみたんで、作りたいんです」

「良いわよ。じゃあ今回も期待してもいい？」

「程々をお願いします…」

桃子の明るい声にヴェストールは苦笑いで返し、そのままキッチンへ入っていった。

「ついに…ですね」

「うん、そうだね…」

ぼたんと美由紀が顔を見合わせて、笑った。

「それじゃあお母さん、ボード変えてくるね！」

「ええ、お願いするわ。決まり文句は？」

『【幻のパティシエ】！』

ハモった一言に桃子はOKサイン。美由紀とぼたんは店の外の出で、ブラックボード1つのメニューを付け足した。そのメニューとは…

“ 1日復活！数量限定！幻のパティシエ「ロンメル・ヴェストール」の日替わりケーキセット！何が出るかはお楽しみ！”

side out

sideスバル

夕刻

海鳴市内

一通り、サーチャアの設置が終わり、さっきフェイトさんが私達を迎えに来て貰えることになったんだけど、なのはさんが何か考えている。

「ん〜手ぶらで帰るのもなにな〜…」

そう言って、徐に携帯を取り出し電話を掛け始めた。

「あっ、お母さん？なのはです」

「へっ？」

お母さん？なんで今なのはさんのお母さんに電話してるんだろう？

「じゃははっ！…うん、お仕事で近くまで来てて…そうなの…うん…ホントすぐ近く。…現場のみんなにも…」

>…なのはさんの…お母さん…<

>…そ、それは…存在はいてて、当然なんだけど……<

……うん、なんでなんだろう？

ティアと念話でなのはさんのお母さんの事を考えてみる……。

…やっぱり、なんかしっくり来ない。うん、なんでなんだろう？

>スバル、同じ事繰り返してるわよ。…まあ、私も似たようなもん
なんだけど……<

>あ、あはははは……はあ〜……<

苦笑いしかできなかった。自分で思うんだけど、コレって失礼に当た
るよね？

「……うん、あと10分位で着くから、うん、それじゃあ」

なのはさんが電話を切り、こちらに向く。

「さて、ちょっと寄り道」

「はいです〜！」

「あの…さっき“お店”って…？」

ティアがさっきの電話の事を聞いてみた。

「うん、家、喫茶店なの」

「【喫茶翠屋】！オシャレでおいしいお店ですよー！」

「ええ！？」

“オシャレ”で“おいしい”！？

ゼツタイ行かなきゃ！！

……

遂に…遂に…

「着いた〜っ！！」

【喫茶翠屋】！

「スバルうっさい！」

「えへへへ〜…ついテンション上がったちゃって…」

「にはははっ！久々に帰って着たけど…なんだか私がいたときよりも繁盛しているような……」

そうやってなのはさんがお店の方に向く。

確かに…お客さんがたくさんいる。制服を着ている人もいれば、私服の人も。私達と同じ位のお客さんから子供連れのお客さんまで、いっぱいいる。

「お母さん、ただいま!」

「おかえりーなのは!」

お店のドアを開けると、そこにはなのはさんのお母さんなる方が。
しかし…

お母さん若っ!!

…ホントだ…

呆れるぐらいの若さ。あの人ホントになのはさんのお母さん?

「桃子さん、お久しぶりです!」

「あら、リンさん、お久しぶり」

「おお、なのは、帰って着たな」

「お帰り、なのは!」

更に男の人と女の人がやってきた。まさかと思うけど…

「お父さん、お姉ちゃん!」

…やっぱりだった。

なんでこんなに皆さん若いの?

そうこう途方に暮れていると、なのはさんのお父さんがこっちに気

づいた。

「この子達が私の生徒」

「ああ、こんにちは、いらっしやい」

なのはさんのお父さんがにこやかに挨拶してくれた。

「は、はい」

「こんにちは…」

私とティアも、姿勢を正して挨拶した。

「今、ケーキ箱詰めしてるから」

「うん、それはそうと、なんか物凄く繁盛してるね。かわいいウエイトレスの娘もいるし…どうしたの？」

「あ…ウエイトレスの子達は偶に手伝いに着てくれてるんだ。よく働いてくれてとても助かるよ」

そう言つてウエイトレスの人達を眺める。確かにかわいい人だ。男の人もカッコいい。

「お〜い！日替わりケーキセット2つ出来たぞ！早く2番さんとこ持ってつて〜！」

「わかった〜！今行く！」

厨房の方からどこかで聞いた事のある声。それに男の人が反応した。

「あとどこだ？何皿いる？」

「あと5番さんと8番さん、どっちも4つずつ！」

「了解！あと作れて…その8つはカウンントしないで6つな！」

「OK！ラストスパートだけ、ロン！」

「そっちもな、龍也！ぼたんと佐依にも言っといてくれ！あと士郎さん達にも！」

そんなやりとりのあと、男の人が厨房からクレーム・ブリュレとフルーツタルトの乗ったお皿を2つ持って行った。

……ん？

「ねえティア、さっき“ロン”って…」

「え、ええ、私も聞こえたわ…」

すると、なのはさんのお姉さんが思い出したように私達にいった。

「そつだ！なのは達も食べてく？ロン君のケーキ」

「？ロン君がなんでここに？」

「さっきの子達と同じでさ、ロン君はここで1年間、都合の付く日に来て“日替わりケーキセット”を作ってくれてるんだ。勿論うちの大人気メニューなんだよ」

「へえ…でも自分達だけじゃなんだし…みんなの分足りる？」

「十分！大きいホールのフルーツタルトをいっぱい作ってたもん」

「じゃあ、そうしようか」

ヴェストールさんのフルーツタルト…想像しただけで涎が…ジュルリ勿論、断る訳はないので…

『はい！』

その話、のります！

「ふい…っつかれた…ん？なのはさんにリンとスバルとティアナ…来てたんですか」

「うん、差し入れにケーキをね」

「そうですか。ん…では、一応お客さんって事で挨拶を…皆さん、ようこそいらっしやいませ。喫茶翠屋へ。パティシエのロンメル・ヴェストールです」

ヴェストールが深々とお辞儀。顔を上げると今まで見たことも無いほどの神々しい微笑み。まるで執事さんみたい…

そう考えていたら…

『きゃああああああ！』 / / / / / / / /

『！！！？』

急に店内に女性の黄色い声が響きわたる。

「ほ、本物のヴェストール様よっ！」 / / / / / /

「こっち向いて〜っ！」 / / / / / /

「きゃっ！こっちに手を降って下さったわ！」 / / / / / /

「あの笑み…お美しい…」 / / / / / /

「ヴェストール先輩！素敵です！」 / / / / / /

『……………』

もう、何がなんだか……

「…ヴェストールさん、大人気なんですね」

「それは勿論。“聖祥の貴公子”とか“陸上界のプリンス”だったり“史上最高のケーキ職人”、中には“聖祥最強の英雄”って言う人もいる程、ファンがいるのよ」

「そしてさっきの男の子とウェイトレスの女の子2人を合わせて、“聖祥の4聖人”と呼ばれてたり、バニングスさんと月村さんも含

めて“海鳴6大美少年・美少女”とも言われてた気がするな……」

うつわあゝ…ヴェストールさん自身がずば抜けてるけど、あとの3人も確かに凄くステキ…ヴェストールさんの周りの人って凄い人ばかりだね

…
ここになのはさん、フェイトさん、はやて部隊長が加わると一体

私もティアも、考えただけで目を回しそうになった。

side out

side???

あの後、ヴェストールは厨房に戻り、

「最後の仕事だ」

と言ってケーキ作りを再開。最終的に、日替わりケーキセットは完売。売上高は過去最高を記録した。
現在、仕事の無いヴェストールは、お茶を楽しみながらなのは達に3人を紹介した。

「え〜っと…なのはさん達もぼたん達も、どちらも知らないと思うから紹介しておく。まず、ぼたん達」

ぼたん達が椅子から立ち上がる。

「どうも〜！初めまして。御媛ぼたんです。ロンの同級生でこちらの民間協力者です。皆さんの事はロンから聞いてます。どうぞよろしく！」

「初めまして。季櫛佐依です。ぼたんに同じく、ロンの同級生でこちらの民間協力者になります」

「初めまして。俺は仲澄龍也って言います。この流れの通り、俺もロンの同級生であり、こここの民間協力者やっています」

3人が挨拶したところでヴェストールが補足を少し。

「俺も含めて、こいつらは聖祥のOBで、なのはさんの事は勿論、義姉さんとはやてさんの事は知ってます。こつちでもなのはさん達は有名人みたいなもんですからね因みに3人共大学1年の18です。続いてなのはさん達、よろしく」

ヴェストールがなのは達に振る。なのは達も、ぼたん達同様に椅子から立ち上がる。

「にはやはは…有名人とはちよつと違う気がするけど…初めまして。高町なのはです。ロン君の同僚で、聖祥の中学部卒で今は19、だからぼたんちゃん達の1つ上になるね。よろしく」

「リインフォース？（ツヴァイ）です〜！よろしくですよ」

「スバル・ナカジマです！なのはさんの生徒です。よろしくお願ひします！」

「ティアナ・ランスターです。スバルに同じく、なのはさんの生徒にあたります。よろしくお願いします！」

「ぼたん達はこの後義姉さん達も来るからその時また紹介すると思う。時間大丈夫か？」

「ああ、今日は特にないから大丈夫だと思う」

「了解、また義姉さん達が来たら来てくれよ」

そうしてぼたん達は少し休憩した後、また仕事を再開した。

……十数分後、翠屋にフェイト達が到着。ヴェストールは再びぼたん達3人を呼び、フェイト達に紹介した。そしてヴェストールとリイン、スターズはアリサ達の待つコテージへ向かった。

……

1台の自動車がコテージの近くに止まる。

「運転お疲れ、フェイトちゃん」

「ありがと義姉さん、送ってくれて」

「どうぞ致しまして」

そこから降りたのは、なのは、リン、ヴェストール、フェイトとスターズ、ライトニングの計8人。

「ん…なんか、ちょっといい匂いが…」

キャラが車から降りた時、その匂いに気付く。

「キョクル〜」

「うん」

フリードリヒとエリオもそれに頷く。

「はやて達がもう晩ご飯の準備、始めてるのかな？」

「あっ、お帰り！」

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

アリサとすずかが気が付き、なのは達に近寄る。

「すずかちゃん！」

「すずか」

なのはとフェイトもすずかに走り寄る。

「あははっ！久しぶり〜！」

「すずか、元気だった？」

「うん！」

「写真とメールばかりで、声聞けてなかったもんね」

「だよね」

「大学の方、相変わらず？」

ティア、やっぱり隊長さん達が普通の女の子だよ

同感。どうよ、ライティング的には？

あの…僕的には、なのはさんもフェイトさんも、普通の女性ですので…

そっか、エリオ君、私達の中だと一番昔からなのはさん達の事、知ってるんだよね

うん

なのは達のそんなやり取りを傍観していた4人は、エリオ以外は隊長陣の3人を、普通の女性とはちょっと違うように見えたのかもしれない。

なのは達と再開の喜びにはしゃいでいたはずかとアリサは、次に目に飛び込んできた蒼い長髪の紅い目をした青年へと視線を変えた。

「あっ！ロン！久しぶりじゃない！」

「お久しぶり、ロン君！」

「どうも、ご無沙汰してます。バニングス先輩、月村先輩」

「全然連絡無かったから、心配したんだよ」

「全く…この姉有りにしてこの弟有りね。心配させないでよ！」

「す、すみません…すずか先輩、バニングス先輩、少々ごたついで。でも、メールも、猫達や犬達の写真もちゃんと見させていたできました。何より、お2人が元気そうで何よりです」

2人に微笑みながら話す。なのは達が翠屋で見た微笑みとは違う、心からの優しい微笑み。勿論、そんなヴェストールを見て、

「あ、ありがとう…」 / / / / /

「な、何よもう…」 / / / / /

顔を赤くした。

「そ、そんなことよりもっ！なんで“先輩”って付けてるのよ。無くていいって言ったじゃない！そして呼ぶときは名前よ！」 / / / / /

「そ、それはちょっと…いくらそう言われても、先輩にそれは…」

「いいの！やるったらやるの！いい？もしそうしなかったら、そうするまでボッコボコにしてやるんだから！」

「そ、それもそれで…嫌な現実味のある話でs」な　に　か
言　っ　た　　？」「いつ、いえ！解りました！早速、早急に、
瞬時に、刹那的にそうさせていただきます！すずかさん！アリサさ
ん！」

「ううん…さん付けかあ…まあでも、特別にOKね」

「あ、あはは…アリサちゃん…厳しいね」

…ヴェストールさんまで…

…どう見ても普通の好青年ね…

今までのヴェストールさんとは大違いです

ロン君…楽しそうだね

そうだね、なのは。あんなロン、久々にみるな…

新人4人はヴェストールのキャラの違いに驚き、なのはとフェイトは懐かしむように、アリサとすずか、ヴェストールの会話を聞いていた。

と、そこへ自動車のエンジン音が…

「あれ…？」

「車が…」

自動車が止まり、そこから降りてきたのは…

「ハ〜イ！」

「みんな、お仕事してるか？」

「お姉ちゃん、s 参上！」

「エイミーさん！」

「アルフ！」

「それに、美由紀さんまで…！」

「でも、それだけじゃないんだよね〜」

「俺達もきたぜ！」

「さっきぶりね、ロン、皆さん」

「んなあ！ぼたん！」

「龍也君に…！」

「佐依までいるじゃない！」

何故か勢揃いで少しばかり騒がしくなったコテージの前。

「何故お前らがここに？」

「手伝いが終わった後、エイミーさん達が私達を誘ってくれてね」

「それで今ここにいるんだよー！」

「は、はあ……って事は美由紀さんもシフトの合間を…！」

「そう言う事ー！」

「そ、そうですね…」

これにはびっくり、若干苦笑い。そんなヴェストールはエイミィと、エリオ、キャロと話しているアルフに近付いた。

「ご無沙汰してます。エイミィさん、アルフ」

「うん！久しぶり！いや、あんまり見ないうちにまた背が伸びたね
）」

「最後に会ったのは2年前だったからな…ところでところで、料理の腕、また上がったか？」

「まあ、そこそこは。ケーキ作って来たんで、BBQの後にでも」

「やったー！ロンのケーキだー！」

「アルフ、ロン君のケーキ好きだもんね」

「そんじょそこらのケーキよりも100倍好きだ！」

うーん…誰かの使い魔かな？

…犬耳に尻尾…わんこ素体？

見た目10歳位？ちっちゃくてかわいー！

はしゃいでるアルフを見ていたスバルは目を輝かせた。

ヴェストールは車からケーキの箱を取り出し、アリサ達に顔を向ける。

「さてと、はやてさんとおの手伝いして来ます。あと、ケーキ入れるんでコテージの冷蔵庫借りて良いですか？」

「うん」

「好きに使っていいわよ」

「ありがとうございます！アリサさん」

アリサから許可が降り、ヴェストールは急ぎ足でコテージへと向かった。

数分後……

どこから香ばしい匂いと何かの焼く音が。

「この音……」

「この匂い……もしかして」

全員がそこを向くと……

「おお！みんなお帰り！」

「お帰りなさい」

『や、八神部隊長！！？？』

はやてが自分で鉄板焼きをしていた。

「部隊長自ら鉄板焼きを……」

「そ、そんなの、自分達でやります！」

「でも…待ち時間あったし、お料理は元々趣味なんよ」

「はやく隊長の料理はギガうまだからな。ありがたく頂けよ」

『はい!』

「ヴィータさん…それは死語の様な気が…」

「何か言ったか？ヴェストール」

ヴェストールの呟きを聞き逃さなかったヴィータはヴェストールを睨む。

「シャマル、お前は手を出して無いだろうな？」

「まあ！シグナム酷い！」

「ちよつと手伝ってくれたよなあ、材料切りとか…」

「まあ、切るだけなら…」

「大丈夫だな」

「シャマル先生、もしかして…」「違っもん！シャマル先生お料理下手なんかじゃないもん！」「あ、あはは…」

「シャマルさん…その反応は認めてると一緒ですよ。良かったら教えましょうか？料理のコシ」

はやての隣で何かを作っていたヴェストールがシャマルに救いの手を伸ばした。

「ほ、ホント？」

「ええ……そうですね……それじゃあ簡単な煮物にしましょうー！いいですか？」

「はい！」

「……やる気十分だな」

「ヴェストールもいる事だし、失敗はねえだろ」

「それじゃあフォワードの4人は食器出しといてな」

『はい！』

side out

side ヴェストール

「うん！はやてのご飯はギガうまだな！」

「流石です。主はやて」

「はやてちゃん、また腕上げたよね」

「そうなん？なんかてれるなあ……」

「美味しいね、エリオ君！」

「うん！」

「ああっ！エリオそれ私の肉〜！」

「うっさいバカスバル。まだ肉は沢山有るわよ」

「にはははっ！そんなに急いで食べなくてもまだあるよ」

現在、6課メンバーと現地協力者の皆さんと一緒にBBQの真っ最中。

「……なんとまあ、平和だねえ〜……」

「それが一番でしょ。やっぱり」

「平和に越した事はねえよ」

「全くね」

「そう、だな……」

3人の言葉を聞いて、空を仰いだ。満点の星空を。

平和…人間誰しも考える、安心安全な微笑ましい時間。今、そんな“平和”を肌で触れ、耳で聞き、目で見て、匂いを感じて…俺は充実している。それと共に、一抹の不安も、若干ながら、抱いていた。

（何故だか、おかしい）

そう考えて、ならない。

「ロンく〜ん！煮物ちゃんと出来ましたよ〜」

不意にシャマルさんの声が後ろから。手には煮物が入っていると思われる深めの皿が。

「はい！これどうぞ」

中を見ると野菜のたくさん入った煮物が。匂いが食欲をそそる。とても美味しそうだ。

「じゃあ、まずは味見で。頂きます」

皿から人参をつまみ、そのまま口へ。

ふむふむ…ダシの旨味と野菜の甘味と…ピリツとスパイシーで若干渋めで酸味が強く…あれ？こんな味だったか？やべっ…意識が朦朧と…し…て…

ボタン。

side out

side???

ヴェストールは倒れた。ヴェストールがコツを教えた筈なのに、シヤマルの作った煮物は、見かけと匂いは100点、味は殺戮兵器というまさに壊滅的な物だった。

よって

『シヤマル（先生）：覚悟はいいDeathかあああああ！！！！』

「い、ごめんなさい！！」

エリオ・キヤロ・龍也・佐依以外：鬼神化

シヤマル：死刑囚

エリオ・キヤロ：気絶

龍也・佐依：平然とBBQ中

ヴェストール：生死の狭間に旅行中

どう見てもカオスとしか見えないchaosになった。

数分後……

「……………」

シヤマル：死刑執行により、現世からのlogoutの手続き中

『ふう〜…すつきりした!』

『ロン（君）、ちゃんと仇は取ったよ』

『ヴェストール、お前の雄志は今後一生忘れはしない』

死刑執行人達（またの名を“ヴェストール守護騎士団”）：肌艶やかなのぷるっぷる。これ以上無いほどの満足顔

更に数分後……………

『じちそつなまー!』

「いや〜…流石はロンだな。フルーツタルトは最高にうまかったぞ

」!

「また食べたいなあ〜…」

「ロン！凄く腕が上がったんじゃないか？美味しいぞ！」

「ありがとう、みんな」

「さて、ロン君の美味しいデザートも完食したし、サーチャーの様子でも監視しつつ、お風呂済ませとこか」

『はい！』

なんとか意識を取り戻したヴェストールもBBQに復帰、お楽しみデザートでフルーツタルトを思う存分食べて、無事に夕食を済ませた6課メンバーと現地協力者の一同（1人は除く）は、風呂に入ることに。

「まあ、監視って言っても、デバイス身に付けてりゃなんの問題もないんだが」

「最近ホントに便利だよね」

「技術の進歩です！」

《なのはさん、それは若干年寄り臭いですよ》

《シルフに同意します〜！》

久々の登場のシルフィードとヴァールは出番早々の悪口。

(少しは遠慮と言つ言葉を知れよ…)

ヴェストールは心の中でツッコんだ。因みに本人には辛うじて聞こえていなかったようだ。

「あゝ…でもここお風呂無いし、湖で水浴びって季節でもないし…」

「そうすると…やっぱり？」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう！」

「あそこしかない！」

「あそこしかないな」

すずかに続けてエイミィ、美由紀、ぼたん、龍也の順に顔を見合わせた。

「それでは、6課一同、着替えを用意して出発準備」

「これより、市内のスーパー銭湯へ向かいます」

「スーパー…」

「せんとう？」

「行けば解る。付いて来い」

そう言つて、シグナムは屍になったシャマルを引き摺って行ってしまった。

「早くしないと置いてくぞ」

『は、はい！』

「はい！海鳴スパラクーアへようこそ！団体様ですか？」

「えっと…大人16人と」

「子供4人です」

受付の人に人数を教えるはやてとフェイト。

「エリオとキャロと…」

「私とアルフです！」

「えっと…ヴィータ副隊長は…」

「私は大人だ」

じと目でスバルを睨み付ける。

「あっ…はい！こちらへどうぞ」

（絶対受付の人も子供だと思ってたな…）

ヴェストールは心の中で呟いた。

「会計しとくから先行つといてな」

『はい！』

「あ…よかった。ちゃんと男女別だ…」

風呂の脱衣所の前まで来たとき、エリオは男女が別な事に安堵した。

「広いお風呂だって、楽しみだね、エリオ君！」

そこへ期待で一杯のキヤロが。

「あっ、うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「えっ？エリオ君は？」

エリオの言葉に少し落ち込むキヤロ。

「えっ？ぼ、僕は男の子だし…」

「うん、でも…ほらあれ！」

キヤロが何かを目ざとく見つけて、明るい声を出す。

「注意書き…えっと“女湯への男児入浴は11歳以下のお子様でお願いします”…」

「フフツ！エリオ君10歳！」

エリオは注意書きに見放された。

「折角だし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん!？」

フェイトによる追撃。しかし、エリオにも“男のプライド”という物がある。そこで、反論して逃げ切るうと考えた。

「えっ…あ、い、いや、あ、ああですね、それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか…アリサさん達もいますし…」

「私は別に構わないわよ」

「って言うか、前から“頭洗ってあげようか”とか言ってたじゃない」

「うっ…」

エリオはティアナとスバルのまさかの問題無い宣言に狼狽える。

「あたし等もいいわよ。ねっ」

「うん!」

「いいんじゃない。仲良く入れば」

「そうだよ、エリオと一緒に風呂は久しぶりだし…入りたいなあ…」

八方塞がりになったエリオは、最終手段にヴェストールと龍也を出した。

「でっ、でも!ヴェストールさんと龍也さんがいてくれますし、困

ったときは何とかなるんじゃないかと…」

かなりあたふたとしたエリオを見かねて、ヴェストールは救いの手を差し伸べる。

「まあ、義姉さん達もそこら辺で。エリオ、めっちゃ困ってんじゃない。エリオも男な訳だし、異性と風呂入るのは気まずいんだよ、きつと」

「ヴェストールさん…」

「俺も何だかんだでロンには賛成かもな。男同士の付き合いってのもいいしな」

「龍也さんも…!」

しかし、

「ふうん…ロンはそんな事言う子じゃなかったにな…」

何かを企んでいそうな笑顔のフェイトは、反撃の矛先をヴェストールに向けた。

「そ、それは…一体…」

心当たりでもあるのか、ヴェストールは顔を真っ青にする。

「ロンがエリオと同じ位の時は私と一緒にホントにすいませんでした!お願いですからその先は言わないで下さい!エリオはそちらにお預け致します!」… よろしい」

「ヴェストールさん!？」

ヴェストールは遂に、必死に土下座をしてエリオの身柄をフェイトに委ねることにした。

「ロン?お前、フェイトさんとな「お願いだから聞かないで!これ以上聞くな!今すぐ!この場で!命を落として!自害して!自殺して!謝罪しなくてはならないから!」…お、おう。すまない」
ヴェストールは鬼気迫る形相で龍也に懇願した。

「何があつたの?フェイトちゃん」

それを後目になのが質問する。

「確か、ロンも小さい時に私と母さんと一緒にお風呂に入った事があつたんだ。その時のロンってさ、何時もは真面目でしっかり者なんだけど、その時だけは少し甘えん坊になるんだよね」

「義姉さん!」

「あっ!」

つい、ヴェストールの昔話を暴露してしまったフェイトは気まずそうに口を押さえた。

「へ〜…そうだったんやあ…」

「あのロンがねえ〜…」

「ふん…」

何時の間にか会計を済ましていたはやて、その隣にいた佐依とティアナがじと目で蔑む。

「ロン、お前を見損なつたぞ…」

龍也までもが敵になった。

「グスツ…もう、いいです……」

責められたらヴェストールはとぼとぼと男湯に入っていた。

その後というものは、結局ロストログアが出現してもヴェストールが立ち直る事はなく、任務から除外。なんとか話せるようになったのはそれから2時間後だった。

side out

sideすずか

海鳴市内

深夜1:00

「ただ」

「へっ……!?!」

「これ…」

そう言つて、黒い重量感のある箱を渡す。

「開けても、いいですか?」

「うん」

ロン君が箱を慎重に開けると…

そこには、1つのペンダントが入っていた。

「コレって…まさか…」

「そうだよ。ロン君の探してたモノ、ヨーロッパに古くから伝わる1つの魔導具のペンダント」

「……………」

無言でそのペンダントは持つ。銀の枠の中に、淡く、青白く光る、剣を模した十字が填められている。

「……………」
【Geweihtes Kreuz】(ゲヴァイテス・クロイツ)
「……………」

「えっ!?!」

ロン君がそう呟いた瞬間、ペンダントが青白く光り輝いた。

「クツ……って！」

「これは…！」

光が収まると、ペンダントの握られていた手には、長さ2 m以上、幅30?以上ある、青白く輝く大剣があった。

その輝きは神々しさのある、清らかなもの。私もロン君も息を呑んだ。そして…

「！ロン君！その髪！」

「はい？」

ロン君の紅い目は輝き、髪長く色は銀に変わり、全身には蒼い炎のようなオーラが揺らめいていた。

「これは…あの時の…」

「やっぱり君は血を引き継いでいたんだね。ロンメル・ヴェストー
ル君」

『！！！？？』

不意に、湖の方から女性の声が聞こえる。見てみると、長い髪をポニーテールにして、空中に佇んでいる女の人。年は私と同じ位。だけど、その人は同じだった。

“今の”ロン君の“姿”と…

「私はメルト。あなたを迎えに来たわ。“聖騎士”様」

「“聖騎士”…だと？」

「ええ、あなたは解っているのでしょうか。あなたが“何者であるか”」

「…ああ、俺はヴァルキュリアとダルクスの血を引いている。ただそれだけだが？」

「あなたは“それだけ”では収まらない。あなたの血は、【私達の始祖】と同じ。1つの行動だけで世界1つを一瞬で思い通りに出来る。私達はそのあなたを迎え入れたい」

何？何なの？“聖騎士”？“ヴァルキュリア”？“私達の始祖”？
…解らない。あの2人が話している内容について行けない。

「…俺を手に入れて、どうする気だ？」

「世界を【真の世界】へと正す。【全て】を生まれ変えさせる。【人々の行く末】を導く」

「それで、何が変わる？」

「運命が、未来が、いま現在が変わる。劇的に。全世界が、【神】（あなた）と、【神の使い】（わたしたち）を崇拜する」

「ふざけた理想論……いや、戯言だな」

「そう思うなら、これを見て」

そう言つてメルトは、自らの目の前に左手をかざし、唱えた。

「我、古より続きし聖者なり。神の能力ちからを持つて全てを燃す蒼き炎を纏え……」

メルトの身体から、恐ろしい程の魔力が溢れ出し、その魔力はまるで炎のように蒼く燃えていた（……）。

「聖者の槍は蒼炎を纏い、世の万物を貫く。聖者の楯は蒼炎によつて全てを通さず……」

翳した左手に青白く輝き、規則正しく渦を巻いた金属製の物体が現れ……

「能力を宿しその楯槍を持って、全てを消し散らせ！」

右手を物体の尖った方に翳し、それを握りしめ、引き抜いた（……）。

『……………』

メルトの手にあつた物は……

「……………ヴァルキュリアの……槍と楯……………！まさか……！」

「そう…私は、あなたと同じ“ヴァルキュリア”」

私達の前に、戦の女神が舞い降りた。神々しく、禍々しく、蒼い炎を纏って……

s i d e o u t

第9話 主張任務は郷帰り？中編（後書き）

シ《シルフト》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ 《さてさて、今回は第9話をお送りしました〜！》

シ《ほとんどの人が入れてるお風呂のシーンとロストログアのシーンをカットとは…どういう風の吹き回しですか？》

次回の次でそこを補うところがありますんで、そこからつなげて行くか。作者の eagle です。

ロ「ちゃんと繋がらねんだろうな？主人公のヴェストールだ」

大丈夫です！次は基本的にバトルパートですんで何とかかります！

ヴァ《それって関係ないよ〜な》

…それはそうと、新しいデバイスとキャラを出しました！

ロ「逃げやがったな…まあ、今はいいとして、俺の新デバイスは何なんだ？」

剣の姿をしたアームド・デバイスです。次回のキーになるものです。今はそれだけしか言えません。

シ《作者の癖に焦らすなんて…生意気です》

そして贈り物を頂きました！

ヴァ《清浦刹那さんより、マスターにお手製モンブランを、ぼたんにアリシアの、佐依にリエラのヴァルキュリアの装備を頂きました！》

ロ「モンブランうまいっす！」

ぼたん「わ〜い！私達にも贈り物だっ〜！」

佐依「そうみたいね。清浦刹那さん、ありがとうございます」

ぼ「ありがとう〜！刹那さん！」

でもこれやったら次回のネタバレになるんで。スイマセン…
では、次回予告を佐依に！

佐「解ったわ。」

突然ヴェストールとすずかの前に現れたヴァルキュリア人のメルトは、ヴェストールを力づくで捕らえるために彼と戦う事に。そして新たなヴァルキュリアが覚醒する。月夜の海鳴は聖戦の開戦地となる。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜ヴァルキュリアの血を引く者〜 第10話 出張任務は郷帰り？後編

蒼き聖騎士に神の加護を…

やったから報酬に何か買いなさい。いいわね作者」

嫌です！

「断つたら、コレよ」

佐依：何やら物騒なダイナマイトが

えっ？ちよつ、ま、待つて

佐「はい、時間切れ」

時間制限あつたんかい！

佐「ばいばい」

誰か助けぎやああああああ！！

第10話 出張任務は郷帰り？後編（前書き）

第10話です！

第10話 出張任務は郷帰り？後編

sideヴエストール

「…私も、あなたと同じ“ヴァルクユリア”」

目の前の女「メルト」は、俺にとって馴染みの深いモノを手にして
いた。

夢だ。

俺の意識の何処かが、この現実から目を背向けようとしている。

逃げるな！

俺の一部がそう叫ぶ。

意味の無い葛藤が頭を巡る。でも、身体は本能的に動こうとしている。
油の切れたガラクタロボットを動かすかのよう。

「…だからなんだ」

「あなたは私達と同じ（・・・）。【世界を創る者】（Would
Maker）としての義務がある。だから私達と共に【新たな世界】
を創造する。現実いまを捨てて」

…そうかい。じゃああなた達の考える“【新たな世界】の創造”と
やらは、所詮、そんなもんだったか。なら俺は…

「なら俺は、その“義務”とやらを見捨ててやる。あなた達の考え

には理解しがたい。故に俺は、あんた達の“迎え”とやらを拒否させて戴く」

「赦されない。あなたの義務は“絶対運命”」

「もし、それすら拒否するなら…?」

俺はずかさんを庇う様にして、新たな俺の相棒【ゲヴァイテス・クロイツ】を右手に構える。

「…力づくで」

メルトが楯を前に突き出し、俺に突っ込む。

「はあああああ!」

メルトのいる夜空に向かって跳躍、大剣を上段から叩き降ろす。

「……………」

引いていた槍を前に突き出す。

ガキイイイ!!!

甲高い、金属同士のぶつかり合う音。

静寂な湖畔に火花を散らし、その音を響かせる。

拮抗したのはほんの数秒。大剣を横薙に払い、メルトとの距離を

取る。地面に足が着く。勢いは多少残ったらしく、少し地面を滑る。もう一度、今度は下から斬り上げる。メルトも楯で応戦。

「くっ……！」

ビクともしない。固い岩盤を押ししているような感覚。あんな細かい身体から、一体どれ程の力が？

メルトを見ると、先程と変わらず。「全く力なんて入れてませんよ」みたいな涼しい顔。

槍が突き出される。もう一度、距離を取る。今度は魔力で空中に留まり、加速で一気に間を詰める。

また楯。

しかし、加速と体重の掛かった斬撃は楯は弾いた。

その反動で一回転、ゲヴァイテス・クロイツを横薙に一閃。

メルトは一旦身を引き、距離を取る。同時に俺も地上に降りる。

不意に、違和感。

——今すぐ月村すずかをここから“脱出”させる！

その本能に従い、すずかさんに振り向いた瞬間、違和感は現実になつて襲ってきた。

“世界が変わった。”

風が止み、湖の波が消え、雲が止まり、星の輝きが失せ、月が“蒼く”輝く。

すずかさんの様子も違う。普段とは違う、“何か”がそこに漂ってきた。

「すずか…さん？」

「やはり…“月村家”の者か。いや、【夜の一族】と言った方がしっくりくる」

メルトが何かを呟いた。

【夜の一族】。

その名だけなら聞いたことがある。バツサリ簡潔に“答え”を言うのと、【夜の一族】は【吸血鬼】の一族である。

それが“存在する”かすら、よく解っていなかったが、今ここで【それ】を見た。とても身近にいた。

「…ロン君、ごめんなさい」

すずかさんはそれだけ言うと、

「…!!!??？」

何時の間にか俺の前に立っていた。そして、

ドゴオオ!!

「!グホオ!!」

右足が俺の鳩尾に決まり、吹き飛んだ。ゲヴァイテス・クロイツが

手から放れる。

「す……ずか、さん……どう、して……？」

肺から強制的に空気を吐き出され、一言話す事でさえ困難な状態に。肋骨も2本もつてかれた。口の中が鉄臭い。

「……本当に……ごめんなさい」

また、すずかさんが目の前にいた。辛うじてすずかさんの顔を見る事が出来た。ゲヴァイテス・クロイツを両手で握ったすずかさんは、泣いていた。

涙が頬を伝っていく。

「何で……謝るん、ですか？」

苦痛に歪めながらすずかさんの前に立つ。

「だって……私の“本当”を知られてしまったからには……こうするしかないの」

涙が一筋、また頬を伝う。

すずかさん、貴女はそれで良いんですか？

「間違い、多すぎですよ。すずかさん」

「間違えてない」

「今のあなたは、俺をそれで斬るほど…強くない」

「そんなこと無い…」

「俺は信じます。貴女が今やるべき事が何なのか、解っていると」

「…止めて…」

「貴女の考える【掟】という物に、意味はないことを」

「止めて！」

すずかさんがゲヴアイテス・クロイツを振り下ろす。しかし、俺には掠る事すらなかった。

「な…んで…?…どうして…!？」

すずかさん、貴女に問う。

「本当に、それが良いと思ったんですか？」

出来るだけ、穏やかな微笑みですずかさんに近付き、抱き締める。

「貴女は、そろそろ“自分”に対する“戒め”を解いても良いと、俺は思います」

「……………」

すずかさんは声を出さなかった。それでも、しっかりと、俺の顔の横で頷いた。涙をこぼしながら。

俺はメルトに向き直る。

「メルト、貴様とはもう少し、“話し合った方”が良いみたいだな」

「そうね。もう終わりかしら」

メルトが槍を高く突き上げる。

「!!!?」

槍全体を蒼い炎が包む。明らかに魔力を濃縮していると見る。しかし、その魔力は有り得ない程の高濃度。色が一層濃くなり、俺達の方へ向ける。

「…燃え散りなさい」

蒼い炎は光線となり、俺達の方へ飛んでくる。

今のすずかさんは自分の足で逃げる事は出来ない。

「すずかさん、すいません！」

すずかさんを担いでその場から離れる。

直後、着弾。そこから10m程、深い溝を作った。物質が“消された”様な跡。判断が数秒遅れたら俺達はこの世から“根元から”消されていた筈だ。

すずかさんを少し離れた木の根元に座らせる。

「……ここで隠れていて下さい」

「待つて……」

微かな声、よく凝らして聞かないと解らない程の小さな声。

下を向くと、服の袖を掴んだすずかさんの手が。

「ちゃんと、戻ってきて……何処かへ……行かないで」

涙をこぼしながら俺をじっと見詰める。

悲しみ、不安、恐怖……

どれをとつても当てはまり、どれもすべて・（マイナス）の要素ばかり。

俺はそれら全てを＋（プラス）変える義務がありそうだ。

「わかりました。ちゃんと戻ってきますよ。すずかさんの元へ、戻ります。今の俺は、貴女の【守護騎士】ですから」

それだけ告げて、俺は“戦場”へ赴く。勝利の手にするために。

side out

side???

「ほお…逃げずに戻ってきましたか」

湖のド真ん中。そこに佇む独りの美女「メルト」。

「当たり前だ。あの人に約束したからな。“絶対に守る”ってな。貴様などに負けられるか」

それに対抗するように森から出てきた“騎士”「ロンメル・ヴェストール」。

「よくそんなクサイ台詞を吐きましたね」

「…今思うとかなり恥ずかしい。まあ、そんな事駄弁ってる暇なんて無いが」

「では…続けましょうか。【聖騎士】様」

「ああ、言わずともそうするつもりだ。【略奪者】」

「【略奪者】とは…大層な名前を付けられました。……今からやる事には変わりはありませんが」

「やらせねえよ。貴様などに」

「今の貴方に止めるのは無理ですね」

「ほざいてる。こっからが本気だ。ゲヴァイテス・クロイツ！」

ヴェストールがコールすると、ヴェストールは碧い光に包まれる。

「ならば、私もです」

メルトもまた、同様に碧い光に包まれる。

「…聖なる十字の能力…ちから今ここに解き放つ！ゲヴァイテス・クロイツ！」

ヴェストールが大剣を振るうと光が弾け、新たなヴェストールの姿をさらけ出す。

上半身のアーマーのほぼ全てとショルダーアーマーが銀。胸の左端と裾、ショルダーアーマーの両足両端に青のライン。足に履いているブーツも銀、ズボンとアーマーの下のウエアは黒。

右手には長さは変わらず、幅が50？程に広くなり、鏢の部分と柄の部分に豪華な装飾の施された聖剣【ゲヴァイテス・クロイツ】が。

「西洋の騎士」。

その言葉がぴつたりの姿になった。

「【聖騎士】様に同じくらい美しい騎士甲冑ですね」

「お前に褒められたくなど無い」

「そうですね。とても残念ですが、私のモノも見て戴けると嬉しいですね」

ヴェストール同様、メルトを包んでいた光も弾ける。

デザインがほとんどヴェストールと同じ騎士甲冑。違う所は全体的

に少し軽い甲冑で下半身が黒いスカート、ブーツも若干ヒールが高くなっている。

両手に持っていた西洋槍と楯は更に大きさを増し、槍に至っては3m近くにまで長くなっていた。

「はあああああー!!」

ヴェストールが地上から消える。普通の人間ならばそう見えてしま
うが、

「遅いですね」

楯を上に向けてそこを見る。刹那、重い斬撃がメルトを襲う。

ヴェストールが振り下ろしたゲヴァイテス・クロイツが楯とぶつかり合ったのだ。

「……………ッ!」

さっきまでとは違って違い、メルトが苦痛に顔を歪める。それ程まで、ヴェストールの放つ斬撃が重く、強くなっている証拠だ。

「クッ……………はああああー!!」

メルトが叫ぶと共にゲヴァイテス・クロイツを弾き、槍で一気に突き上げる。

「ぐっ……………!!」

今度はヴェストールが呻く。

後方一回転した後にゲヴァイテス・クロイツを翳し、突きを防ぐ。

聖刃一閃を途中で中断。叫びのある方へ飛翔する。

ヴェストールのいなくなった湖上に独り佇むメルトは、叫びのあった方へ顔を向ける。

「……知り合いに助けられるとは……運が強いですね。しかし、この反応……まさか彼女も……!?」

この時のメルトの予測は、悲惨にも、的中していた。

s i d e o u t

……

s i d e ぼたん

お風呂から帰って着てから、ロンはずっと大変だった。

人と会う度に怯え怖がり、何時ものロンとは全然違う。でもそこに母性を掻き立てれる感覚がする。

あんな可愛いロン……守ってあげたいなあ……そのままの雰囲気でロンと一緒にニヤンニヤンしちゃって……ずっと一緒にいてあげて……
……ジュルリ、ハアハア……ロン可愛いようロン。今すぐにも襲っちゃいそう……ウフフフフフフ……」

エストールの思考回路は全停止した。

碧く光り輝くモノの正体は、叫びをあげた「御媛ぼたん」本人。しかし様子が異常だった。髪が銀に輝き、目は透き通るような紅に光り、身体は蒼い炎に覆われていた。つまり、

“御媛ぼたんはヴァルキュリアだった”

この事実は、誰が死んでも変える事の出来ない、考えられない程の悲惨なモノ。それから目を背ける事は出来ない。

「はっ……！ぼたん！！」

意識を引き戻したヴェストールは、苦痛の声を上げるぼたんに近づく。

「ああゝあゝあゝああゝあゝあゝあゝ！！」

「ぼたん！しっかりしろ！落ち着け！」

「いやああゝあゝくるなああゝあゝ！！」

混乱、暴走するぼたんはより一層その炎を強くした。元々濃密だった魔力は更に濃密、膨大になり、ヴェストールを近付けさせない。

「落ち着けばたん！俺だ！ロンメルだ！」

「いやああゝあゝあゝ！！！！」

がいる事に気付く。

「…ロン……なの？」

「ああ」

「本当に…ロン…？」

「そつだ。本物の、ロンだよ」

「そつか…よかつた……な」

本物のヴェストールだと解ったぼたんは、ゆっくりと自らの意識を暗闇に落とした。

段々とぼたんを包んでいた炎は消え、髪も目も普段と同じになっていた。何時の間にか、風が吹き始め、雲が動き出し、月は何時ものように星の煌めく夜空に光り輝く。

この時、ヴェストールは決意した。ぼたんとすずか。

“この2人は死んでも守りきらなくては、世界が変わる”と。

「絶対に…守ってやるからな…だから、安心してくれ」

気を失ったぼたんの髪を、優しく撫でた。その黒髪は、何時も様にサラサラだった。

side out

第10話 出張任務は郷帰り？後編（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《何時ものように始まりました〜【後書きトークショー】〜！》

シ《今回は第10話をお送りしました》

何故シルフがヴァールの言葉を？作者のe a g e eです。

シ《良いじゃないですか。特にコメントを必要としない程の出来の悪さだったんですから》

うっ…それ言われると胸が苦しい…

ロ「だったらちゃんとしたのを書きゃいいだろうが。ロンメル・ヴェストールだ」

そうですね。すみません（棒

ヴァ《作者〜！ちゃんと反省しなさい！》

シ《何時も優しいヴァールが怒った！》

ロ「でもどこかかわいいような…」

お前そつち方面？

ロ「違うわ！俺は普通に女性が好きだ馬鹿！……って何言わせんじやボケエエ！！」

そんなヴェストールの一人漫才は置いて、今回も贈り物を頂きました！

ロ「お前がさせたんだろぅが！今回は清浦刹那さんより「大和使用券」をシルフとヴァールに頂きました！」

シ《これがあれば大和を好きに出来ると…》

ヴァ《今度遊びに行ったときからかってみようかな？》

では、次回予告をヴェストールに！

ロ「OK！」

メルトとの一戦後、ヴェストールは6課メンバーと龍也、佐依、ぼたんとアリサ、すずかと共にスイスへ。そして明かされる、ヴェストールの一族とゲヴァイテス・クロイツの謎の1つ。悲しみの連鎖は、まだ始まったばかりである。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜ヴァルキュリアの血を引く者〜 第11話 過去と今と悲しみと

悲劇の聖騎士に栄光あれ……」

第11話 過去と現在（いま）と悲しみと？（前書き）

第11話です！

すみません。話が長くなったんで何分割かにしてお送りします。

第11話 過去と現在（いま）と悲しみと？

side はやて

第97管理外世界【地球】

日本・海鳴市郊外

バニングス家別邸

7:00

チュン……チュンチュン

「……うん……」

朝日の光が部屋に射し、部屋を明るく照らす。

「ん〜！気持ちええ朝や！」

側で寝ているリインを起こさんようにしてベッドから抜け出す。時計を見るともう8:00。随分とゆっくり寝てたみたいやな。

清々しい気分で部屋のドアを開けると…

「フェイトちゃん！そっちは？」

「ダメ！居なかった」

「なのはの方は？」

「こっちも居ない」

「他の部屋も見てきましたが…」

「やっぱりどこにも…」

なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃんにフォワード全員が何かを搜索しとった。

「みんなして、朝っぱらから何探しとるん？」

清々しい気分を邪魔されて、少しぶっきらぼうに聞いてみた。

「実は…」

「さっき、ロンの部屋に行ってみたら…」

「ヴェストールの姿がなくてさ」

「それで他の部屋を探したんですが…」

「すずかちゃんとぼたんちゃんも居なかつたんです」

「で、結局今のところ3人の消息は解らんまま、と…」

結論を纏めると、みんなの顔が見るからに暗くなった。

「まだ搜してへん所は？」

「後はお庭と…」

「湖の周りだけです」

「ほんなら、急いで搜索開始や！」

『はい(うん)(おう)！』

一直線にコテージの玄関に行き、ドアを開け放つと、庭の方から見知った顔の3人がこっちに歩いてくるのが見えた。

「すずか！」

「ロン君！」

「ぼたんさん！」

ぼたんちゃんはロン君にお姫様抱っこされてるみたいやった…羨ましいな…

「はやて、今はそんな事考えてる暇なんて無いよ」

フェイトちゃんにジト目でツッコまれた。

「ロン！どこ行ってたのよ！？で、でも、別に心配してなんかないんだから！」

アリスちゃん…今の状況でツンデレにならんでもええんとちゃうか…

「ヴェストール、今までどこに行っていた？」

「すずかちゃん、心配したんですよ」

「……………」

「……………」

シグナムとシャマルが2人に聞いても、すずかちゃんは気まずそうに、ロン君は顔を伏せていて表情がよう解らんやったか、黙ったま

ま。

「すずかちゃんにロン君、黙ってても解らんで。どこに行つてたんか言つてくれへん。みんな心配したんやで」

「うつ……そ、そん「はやてさん、なのはさん、すずかさんをお願いします。アリサさんと義姉さんはぼたんを介抱して下さい」ロン君？」

ロン君はフェイトちゃんにぼたんちゃんを押し付けると、コテージへ黙って行ってしまった。

「ちよっ！ロン！逃げる機なの！？何か言いなさいよ！」

ロン君、君に一体何があつたんや？少しは私達を頼つてくれてもええのに…なんで1人で背負い込もうとするんや？

side out

side ヴェストール

ぼたんを落ち着かせた後湖に行くと、メルトは忽然と姿を消していた。

空は既に明るくなり始め、朝になっていた。ゲヴァイテス・クロイ

ツをペンダントに戻すと、髪も元の色に戻った。
その後、すずかさんを回収し、コテージへ歩く。その間、どんよりと重い、気まずい空気が終始流れていた。

コテージに着くと、義姉さん達が走り寄ってきた。

「ロン！どこに行ったたのよ！でも、別に心配なんてしてないんだから！」

アリサさんお得意のツンデレ。何時も思うけど、なんで素直に言えないかな？

「ヴェストール、今までどこに行っていた？」

「すずかちゃん、心配したんですよ」

シグナムさんとシャマルさんが心配そうに訊いてくる。

でも、これはまだ言えない。もし言っても、早くて明日になるだろうし、この場の全員が今よりももっと危険な立場になる。

「すずかちゃんにロン君、黙ってても解らんで。どこに行ってたんか言ってくれへん。みんな心配したんやで」

はやてさんの言及。

「うつ……そ、そっ」はやてさん、なのはさん、すずかさんをお願いします。アリサさんと義姉さんはぼたんを介抱して下さい「ロン君？」

すずかさんが言いそうになる。俺はすずかさんとぼたんを預けてコテージの自分の部屋へ。

「ちよっ！ロン！逃げる機なの！？何か言いなさいよ！」

アリサさんが何かを叫んでる。でも今は、それに構っている時間がない。

一分一秒でも時間が惜しかった。

自分の部屋に着くと、特殊結界を部屋全体に張る。

「シルフ、ヴァール、今すぐ聖王教会本部のカリムさんと本局の義母さん、クラウディアの義兄さんに繋いで。今すぐに。あと、無限書庫のユーノ司書長にも」

《了解です》

《はい！》

2機の返事の後、俺の目の前に4つのウィンドウが開かれ、同時に4人の顔が映る。

《どうかしたのか？》

「昨日、すずかさんがこれを」

そう言って4人の前に青白い光を淡く放つ十字のペンダントを出す。

《それは…》

「未だに位置すら特定できず、見た人間も居らず、確認できたのは地球の新話の内容で名前のみ。管理局本局のロストロギア判定、危険度特Sランクロストロギア。【ゲヴァイテス・クロイツ】」
それを告げた途端、4人の顔が驚愕に染まった。

《なっ…！何故そのロストロギアが地球に…》

《しかも、何故すずかさんが持っていたのかしら？》

「ゲヴァイテス・クロイツは、元々俺の両親が探していた物、すずかさんはその事を知っている。そしてすずかさんはこれをずっと探し続けてくれたらしい。本当に感謝しなければならぬ」

《ええ、そうですね》

「そしてもう2つ、言う事がある」

《何だ？》

「俺は…このゲヴァイテス・クロイツの、マスターに選ばれた」

《何ですって…！？》

《それは一体…！？》

俺は、その事を細かく伝えた。

《成る程…それじゃあ僕の方で詳しく調べてみるよ》

「ありがとうございます。ユーノ司書長」

《…では、あともう一つの内容は？》

カリムさんが神妙面持ちで訊く。

「…ヴァルクユリアと対峙した」

《なっ……！！》

「そいつは俺の事を“【聖騎士】”と呼んだ。そして俺を“迎えに来た”と“あなたは私達と同じ義務を持つ”“【新たな世界】を作る”みたいな事を言っていた」

『……………』

4人は完全に沈黙した。驚愕の余り、話す事すら忘れている。

「しかも、そいつの言った言葉とカリムさんの予言は、酷似している所が幾つかあった。つまり、カリムさんの予言は【俺を中心とした世界の運命】と予測できた」

《そんな…》

「でも、飽くまでも“予測”。そうなるとは限らない」

《確かにな…》

だからこそ、ここで予防策を打つ。

「これより、【統括指揮官特殊権限使用権】第29項“戦闘統括指揮権”に基づき、戦闘統括指揮官より、今から【未知なる強大な時空間勢力に対する完全防衛網の構築】を管理局全体で開始する事を宣言。フェーズ3での発令だ。各部隊に通達、準備を急げ！」

『了解！』

それと共にモニターは閉じた。

「ふう……」

予想以上の深刻さ。

すずかさんの事も、ぼたんの事も…普通に考えてもおかしいと言っているのに、例によってゲヴァイテス・クロイツの所持者になってからたった1時間でこの有様。

現実には狂ってやがる。

“紅き雷に 数多もの闇を抱えし 蒼き炎が対する時 時の船の全てを無くし 万の史と 兆の民の終焉を観る。”

紅き雷は 現を亡くし 新たな闇を 呼び込まんとする”

“蒼の破壊者は 聖者に対する 全てを握るは 【世界の鍵】なり”

若干ながら、予言の内容が解る。【世界の鍵】と“紅き雷”は少なくとも俺に当たる言葉。

“聖者”と“蒼き炎”はメルトみたいなヴァルキュリアを指すものだろう。

しかし、“蒼の破壊者”が全く解らない。お手上げも良いとこだ。

でも、これで今やなくなっちゃならないのが1つ出来た。これからは

始まりなのかもな…

そうとなればいざ決行。結界を解いて部屋を出ると…

「……何で皆さんが俺の部屋の前にいらっしやるんでしょうか？返答によつては、今すぐここで消し飛ばして差し上げましょう」

ドアの前で必死に聞き耳立てていたはやてさん、なのはさん、アリスさんにすずかさん、フォワード全員とシグナムさん、ヴィータさん、シヤマルさんとリイーン、終いには義姉さんとぼたんまでいる始末。つてかぼたんは寝てなくて大丈夫か？些か疑m「大丈夫だよてへっ」「…何故読心j「乙女に言及するのは禁則事項だゾ」…そろそろ本気で消し飛ばしたい。ここら一帯を。

「…何か言い残すことは？」

出来るだけ冷徹に言ってみた。

「ロン君、何で君は1人で何とかしようとしてるん？」

「!?!?」

はやてさんの思いも寄らない一言に動揺した。

何故俺が1人でしてるかつて？

「愚問ですね。何故あなた達に教える義理があR「何故教えなくちゃならないかつて？それは、私達は“仲間”だからだよ！」「…“仲間”、ねえ。それg「だからこそ私達も頼つて！ロン1人で解決させようとしなないで！何で…1人で背負い込もうとするの…?」「……」

義姉さんが怒った。久々の表情、久々の涙。俺はまた勝手に先に進んでいたみたいだ。

だが、そうでなくちゃ義姉さん達は、“俺”なんかの為に命まで狙われる羽目になる。俺はそれが嫌だから、今まで義姉さん達には秘密で捜査をしていた。

ただでさえずかさんとぼたんは、この先、かなり荒れた未来を進まなきゃならんと言うのに、それを増やさせる訳には行かない。絶対に、“深入り”させてはならない“事実”。俺は【それ】に深く関わっている。俺がハラオウン家に迎え入れられたら時、いや、生まれた時からずっと、この血の流れているお陰でな。

でも、母さんと父さんの事を恨む気は微塵も無い。寧ろあの2人の子供でよかったと心から思っている。勿論、義母さん達にも感謝しなければならぬ。大好きな両親と仲のいい幼なじみを、醜い私利私欲の為に殺した。ふざけた考えの持つ時空犯罪者の所為で殺されたんだ。

俺はその所為でこの力に目覚めた。そしてハラオウン家に迎え入れられた。幼い俺を保護して、両親の代わりに育ててくれた。少しして、カリムさん達と出会った。ティアナと知人になった。義姉さんがやってきた。はやてさんと知り合いになった。なのはさんと共にスバルを助けた。シルフを貰った。ヴァールを作った。考えてみれば俺も色々あったんだな。

「…事の内容は少しお話ししましょう。ですが、ここじゃ些か不足している物が多すぎるんで、場所を移しましょう」

「どこへ？」

「…俺の“始まった”所ですよ。アリサさん、ずずかさん、早速ですが用意できますか？」

「ええ」
「出来てるよ」

流石はさすがさんとアリサさん、行動がお早い。

「それじゃあ、また成田で会いましょう。大急ぎで出発の準備をして下さい」

「にやつ？一体何がどうなって…」なのはさん、早くしないと置いてきますよ？来るなら早く準備して下さい。俺は龍也と佐依を呼んできます」…う、うん！急いで準備してくるの！」

さて、これで後戻りは出来なくなつた。あとは俺がどの運命を決めるか、それだけでこの人達全員の命も未来も、現実いまですら変えられる。だから俺は、

「絶対にこの人達全員を守る。守りきつてやる。一人たりとも帰ってこられない人間を出さない為に…」

この時、俺を中心とした、世界の運命の Roulette は回り出した。カラカラと音を立てて Roulette を回り続ける球は、少しずつポケットとの距離を縮めていく。

side out

side???

第97管理外世界【地球】

日本・成田空港

12:00

昼間の成田空港、そこに大人数でやってきた16人の男女（内3人だけ男性）にほとんどの人間が目を向けた。明らかに男性の比ではないほどの女性の数。しかもその全員がレベルの高い美男美女揃い。特に目を惹いたのは女性からある1人の男性。大学生ぐらいの年の青年は、“格好いい”と言うより“美しい”と言った感じ。他の女性からは明らかに好意の視線を送られた。

しかし、そんな視線もすぐに青ざめて反らす。理由は至極簡単。彼の周りの女性陣が鋭い目でキツと睨めつけているからだ。

（ダメ。もうダメ。この視線に耐えらんない。ギブ。完璧ギブ。だからそんなに俺達の方見るな。精神的に参るから）

かなり苦しそうに汗をかきながら出発ゲートへ向かう彼、「ロンメル・ヴェストール」は早く飛行機に着いてほしいと切実に願っている。

そんな中、うかない顔をしている1人の少女に声を掛けた。

「スバル。まだあれ引き摺ってるか？」

「い、いえ！そんな事は……あります」

消えるような声で答える少女「スバル・ナカジマ」は、5年前の空港火災の被災者だった。そんな彼女を救ったのは、今現在、鋭い目で睨んでいる内の1人の女性「高町なのは」と、話し掛けたヴェストール本人である。

「そっか…まだ空港は怖いか？」

「えっと…その…まだ少し、怖いです。こここの景色を見るだけで若干ですが、足がガクガクすると言っつか何と言っつか…」

その視線は、明らかに廊下の床。周りの掲示板などから目を逸らしているのが手に取るように解る。

「大丈夫だ。ここであんな悲惨な事には絶対ならない。もしそんな事があっても、俺達が着いてる。だから、安心しろ」

「……はい……！」／／／／／

ヴェストールの言葉に安心感を持ったスバルは、少しだけ、乙女の心を持った。

「…スバル、あんた今何考えてた？」

「えっ？い、いや…その…何でもない！」／／／／／

「スバル…はぐらかさないで教えなさいよ！」

「ティアには秘密だよ〜！」

失礼しました。完全に乙女の仲間入りを果たしたみたいです。

「こら！空港内で走り回るな〜！… ったく、元気になってよかった
…」

叱るヴェストールも、元気になったスバルの様子を見て安堵した。

「ロン君、何話したの？」

何時の間にか、なのはがヴェストールの隣に寄ってきた。

「ちょっとしたおまじないですよ」

「ふ〜ん… どんな感じの？」

「ん〜と… 安全第一と家内安全を足して2で割った感じです」

「私にも教えて欲しいかな〜…」

「… 教える時になったら他のを教えますよ」

笑顔ではぶらかす。

「え〜！… 実はロン君って、女の子を焦らして楽しいとか思っちゃ
う人？」 / / / / /

「まずあり得ませんから。そしてティアナはその走らせているペン
を止めようね。“ヴェストールさんのペット&mp;奴隷になる
為の方法” ってメモ帳のページの頭に書いてあるけど、俺はノーマ
ルだから。そんなアブノーマルな性癖持ち合わせてないから」

「はい、ご主人様。この汚い【自主規制】にもつと罵声を、もつと辱めを…！そして【閲覧禁止】して【見ちゃらめええええ】を…！ハアハア…」／／／／

何故か悦に浸っているティアナ。しかも、ヴェストールを見る目がかなり危ない。如何にも悦びに狂ったかのような目。たまらずヴェストールは質問した。

「ティアナ、今のお前は俺の事がどう見える？」

「はい！この醜い【ドキュウウウン】の飼い主様で、わたくしめの【バキュウウウン】の【核爆発の音】を見て下さる聖煌なご主人様ですう〜…」／／／／

1人悦楽に浸るティアナを見て、ヴェストールは後悔と責任を感じた。

と言うかティアナのキャラが轟音をたてて崩れ去っていく。

「……皆さんごめんなさい。俺がティアナを壊してしまった…」

「ウフフ…ヴェストールさん……もつとこの【ゲフンゲフン】を罵って下さい…そしてこの汚い〇…いい加減自重しろやド変態がっ！」「ひゃうっ！…あれ、私、一体どうしたの…」／／／／

ヴェストールの容赦ない一発に意識を取り戻したティアナは、自分のメモ帳に書かれているのを見られ、激しく恥ずかしかった。そして羞恥に顔を真っ赤に沸騰させてあうあうと口を動かした。

「めんどくさい。ってか時間無いな。急ぐか」

…その20分後

「ねえティア…これ、飛行機の中だよな？」

「その筈なんだけど…」

「なんて言うか…」

「ホテルですか？」

フォワード4人から出た言葉は驚愕と驚きと驚嘆だった。

「まあ、アリサちゃんと…」

「すすかからしたら…」

「まあ、普通ね」

「そうだね」

「やっぱりお金の感覚が狂つとる…」

「主はやて、それは失言に当たるかと…」

「でも…いくら何でも凄すぎないか？これは…」

「ヴィータちゃんには賛成かな」

「です〜！」

隊長陣は凄さの余り、呆れかえっていた。

「うん、流石は月村、s & a m p・バニングス、sクオリティーね」

「流石だよね〜！」

「やっぱりあのお二人は可笑しいと思うのは少数？」

「いや、それはないわね」

なんだかんだで2人に尊敬と指摘を入れるぼたん、龍也、佐依。

そして我等が主人公はと言うと…

「広々としてて、かなりくつろげそうだな…うん、すずかさん。向こうのシアターの方に行って良いですか？」

「うん、いいよ」

『順応性高っ！！！？』

「えっ？これが普通じゃないの？」

『コイツ（この人）も金銭感覚がおかしかった！！？？』

「へっ！？な、何がどうしたってんだ…？」

『ダメだコイツ（この人）、本格的に狂ってる…はあああああ…』

…『

「あの…俺だけ置いてかないで？1人はキツいんだよ？」

「まあ、みんなはほつといて、シアター行くんじゃないの?」

「あつ、そうでした」

「何みたい?」

「じゃあ…トラ スー マーリ ンジを…」

「ああつ!それあたしも見逃したのよね…」

「…一緒に見ます?」

「い、いやあつ…う…み、見るわよ!見てやるわよ!でつでつでも、かつかか勘違いしないでよねっ!あたしがただ見たいだけなんだから!」 / / / / /

「いや、そんなこと言われても…」

「早く来なさい!」 / / / /

「えっ!?!ちよつ、待って下さいよ!」

「フッフ…アリスちゃんったら、素直じゃないんだから…」

「すずか!何か言った?」

「全然、言っていないよ。クスクス…」

「その笑顔止めなさいよ!段々ムカついてくるわ!」

…まあ、ヴェストールはアリサとすずかに同じ部類の人間でした。因みにこの飛行機、月村家とバニングス家のプライベートジェットで、元の機体は世界最大の旅客機【A380】^{エアバス}。ただ機内は普通に高級ホテルばりの内装。シアターがあつて、バーカウンターがあつて、会議室があつて、個室があつて……

外見からは考えられない程の内装の豪華さである。

話を戻して機内。

ちょうど30分前に離陸したプライベートジェットは成層圏に到達。これからチューリッヒまでの約12時間30分の長旅のまだ始まったばかりだ。

「……………」
「……………」
「……………」

シアター内は映画に夢中で話無し。

「さて、あの3人がシアター行っちゃったから俺らで何かをしようかと考えているんだが……」

「何しましょうか？」

「一応、アリサちゃんから案内用紙貰ったから何がどこにあるかは解るよ」

なのはが案内用紙を取り出すと、ぼたんがある1つのコーナーを指す。

「ん？【バーチャルリフレクト】…ってコレ、最新ゲーム機だよね…？しかもゲーセンで置いてるような奴だった気が…」

「ええ、【バーチャルリフレクト】はSORRYが作った3Dバーチャルゲーム機の最新版ね。中身は…【ガリア戦記？】聖騎士の再臨…」ってこれ、最新作！？まだどこにも配信されてないわよ！」

佐依が驚嘆の声をあげる。

「ガリア戦記って、ミッドでも人気なんですよ！」

スバルが目をキラキラさせる。

「私もやった事あります。確か？がLv・62だった気が…」

「甘いわね。私は？…とVの全て、全クリ&全ミッションSランク！世界ランク1位よ！」

「流石は佐依。ゲームマニアに恥じない戦果だな」

「フフツ！まあ私からしたらこれぐらいよ！」

佐依が髪を手の甲で流す。コレがもつとまともな事ならカツ「良く見えるのだが…」

「そう言えば、ガリア戦記ってミッドで映画になるんでしょ？」

「そうなんですか！？」

地球組が目を輝かせてフェイトに詰め寄る。

「う、うん。監修はシグナムとヴィータと…あと、ロンだった気がする」

「ああ」

「そう言えばなんかそんな感じの依頼があっただな…」

シグナムが頷きヴィータが顎に手を当てた。

『へ…』

3人以外の方々はガリア戦記が入っているバーチャルリフレクトのあるコーナーへ歩いていった。

チューリッヒまであと11時間30分。飛行機は雲海上を突き進む。

side out

第11話 過去と現在（いま）と悲しみと？（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ《さて、今回は第11話をお送りしました〜！》

シ《完全なギャグパートですね》

いや、頭のシリアスはどうしたの？作者のeagleです。

ロ「お前の後半の所為で無意味になっちゃったよ！ロンメル・ヴェ
ストールだ」

やっぱりティアナはこれぐらい壊れてる方が面白いと思うんだ。

ロ「明らかに壊れすぎた馬鹿！」

バスン！！ 強化ダンボールのハリセン

くぼおお！！

ロ「うわ〜…予想以上の威力だなこれ」

ふう、身代わりが飛んでった。

ヴァ《本物の作者が現れた〜！？》

さて、次回予告は久々にヴァールで。よろしく！
ヴァ《ホントに久々だなあ》…

飛行機で空の旅を楽しむ一行。特に佐依達はバーチャルリフレクト
のガリア戦記に熱中。シグナムはそれのライブを見て何かに気付き…

魔法少女リリカルなのはStrikerS《ヴァルキュリアの血を
引く者》 第12話過去と現在いまと悲しみと？

現在は動く。歴史は繰り返す》

第12話 過去と現在（いま）と悲しみと？（前書き）

第12話です。

前回書き忘れましたが、PVが50000を超えました！

ありがとうございます！

これからも頑張っていくしますので、生暖かい目で見ていただくと幸いです。

第12話 過去と現在（いま）と悲しみと？

side???

第97管理外世界【地球】

『おお〜!』

さて、冒頭から感嘆の声で何が何なのかよく解らないと思うので、手早く簡単に今の状況をまとめます。

先程の声の主は機動6課メンバーのヴェストール以外と、現地協力者の御「御媛ぼたん」、「仲澄龍也」、「季檜佐依」の物であり、場所は雲海をスイスに向けて航行中の月村家・バニングス家のプライベートジェットの内。機体は【A380】で、位置は2階の中間程。

そこにはSORRYの最新ゲーム機【バーチャルフレクト】が4台置かれたコーナーがある。ゲームの様子を観戦出来るようにスクリーンもソファも用意されており、ソフトはまだ配信されていない筈の大人気RPGゲーム【ガリア戦記】の最新作【ガリア戦記? 聖騎士の再臨】である。

「ゲーセン以外でコレ置いてあるところ初めて見た…」

「早速プレイして早々に全クリしてやるわ!」

「ティア！私達もやるー！」

「ええ、言われずともやるわよ！」

「じゃあ、俺もボクやるー！いいでしょいいでしょ？」いやだ
「良いわよ。早く入りなさい！」「はいー！……現実なんて、現
実なんて……」

参加させて貰えなかった龍也は床にの字を書き始め、佐依、スバル、ティアナ、ぼたんの4人はバーチャルフレクトの中に入っていた。

「私達は外で観戦と洒落込もうじゃないか」

「おう！あいつ等がどれ程の腕前か、見して貰うぞ」

立ったままスクリーンを見つめるシグナムとヴィータ。

「私達も座ってゆっくりしよか？」

「うん」

「賛成です」

ソファアーに身を沈めたのははやて、フェイト、リイン、なのは、シヤマル。

4分割されたスクリーンの中心にカウントが始まる。

《さあ、show timeの始まりよ!》

佐依の一言と共に画面にスタートとの文字。

今回は初めてだからフリーモードの中の【コロシウム】を選択。限られたフィールド内で、4人がつぶし合うものだ。

《おらおらおらああああ!》

「佐依ちゃん怖っ!と言うより佐依ちゃんキャラ変わりすぎや!」

佐依の雄叫び(?)にツッコむはやて。

早速の注目カード、「佐依VSティアナ」は開始数分で始まった。

ティアナは弓兵、佐依は剣兵。

弓兵は全コマンドの中で最長の攻撃範囲と命中力を誇る。そして剣兵は全コマンドの中で一番バランスのとれたコマンドである。

(間を詰められれば佐依の勝ち、間を詰めさせなければティアナの勝ちだろう)

そう予測したシグナムはスクリーンの一角を凝視した。

まずティアナが発見と同時に矢を最大ゲージまで溜めて一気に3本放つ。

佐依は無駄にHPを減らさないために一時物陰に隠れ、ティアナに向かって走り出す。

「真っ向から勝負なんて…明らかに失策ですよ!」

ゲージの中盤辺りで矢を放ち、また矢をつがいての繰り返しを行う。絶妙なタイミングで放たれた矢は佐依の腕や足等の稼働域と頭部、心部を的確に狙っていた。

「私を嘗めて貰っちゃ…困るねっ！」

佐依はその矢全てを走りながら意図も簡単に薙払った。

《嘘っ！》

「…凄すぎやん佐依ちゃん」

「シグナムに負けないぐらいの太刀筋…」

「フッ…一度手合わせでも願いたい物だ」

「いや…シグナム相手じゃ勝てねえんしゃねえか？結局アレもゲムだし…」

「…佐依は剣道と空手と弓道の有段者で日本有数の槍術の正当後継者ですよ」

『ええええええ！！？？？』

「佐依の実力なら、今のシグナムさん相手でも充分張り合えますよ」

「…佐依ちゃん恐ろしいなあ…風呂で怒らせなくて良かったわ…」
ボソッ

（はやて先輩、何か青ざめてるけど何かあったのか？）

龍也は人知れずため息を付いたはやてを見て首を傾げた。

一方、シアターで映画鑑賞しているヴェストールとすすかとアリサはと言つと…

「……………」
「……………」
「……………」

静かに楽しんでいたのだが、

こてんとヴェストールの右肩に乗るものがあつた。それを確認するために右を見ると

「……………すう……………すう……………」

静かに寝ているすすかの姿があつた。

（昨日あんながあつたから全然寝れてないんだよな…静かにしとくか…）

ヴェストールはまたスクリーンに目を向けた。途端、
コテン

「ん？」

今度は左肩に重みを感じた。

「……すう……んむう……すう……」

見てみると、アリサが左肩に頭をのっけて、左腕に体を寄せて寝ていた。

(あ、アリサさんまで？まあ別に良いんだけど……体寄せられると……うう……か、考えるな。考えるな自分！そう！コレは夢！夢なんだ！！！)

ヴェストールは現実逃避と言うカードを切ったが……

「……すう……すう……すう……」

「……すう……すう……すう……」

(どうこの状態を夢と考えるんだ自分！)

両肩に感じる重みと客観的視点から見た結果、どうやっても現実逃避出来そうもなかった。

「……んん……ろん……すう……」

「……ろん……君……すう……すう……」

「……はあ……今はゆっくり寝かせて上げるか……」

溜め息の後、苦笑い気味に一人呟き、またスクリーンに顔を向ける。ゆったりとした笑顔と安心しきった心地良さそうな寝顔はヴェストールにもう一つの決意を作り上げる基礎となった。

3時間後……

「二人とも、映画終わりましたよ」

ヴェストールがすずかとアリサを起こしにかかる。

「ん、んん〜」

「ふああ〜……」

……

ポツ！

2人は目を擦って状況を確認した後、顔から火が出た。

「そっ、そそそのっ！」 / / / / /

「え、えええ〜っ」と / / / / /

『ごめんなさいっ!!』 / / / / /

「い、いや……別に謝らなくても良いですよ。何とも思わな……くわないけど、少なくとも怒ったりはしませんから」

「う、うん……ありがとう……」 / / / / /

「……何考えてたのよ」 / / / / /

ジト目でヴェストールを睨む。

「い、いやあ、ああのですね…」「早く言いなさいよ!」「え〜っと…
…その、お二人の寝顔が可愛くて、ついいたずらしようかと考えて
しまったんですよね…はああ…今なら死ねる」

アリサに詰め寄られたヴェストールは弱々しく白状した。

そしてアリサとすずかはと言つと…

「かつ、かつ、可愛い!?!」／／／／

「あの…“いたずら”って…何しようとしたの?まつ、まさか…私
達を襲っちゃうとか…」／／／／

アリサ 顔真っ赤であうあうしてる。

すずか “いたずら”について聞いている。

「し、しないでですよ!しかもそんな事考えませんよ!…頬突つつい
たり抓つてみたり…です」／／／／

ヴェストールは顔を朱くして必死に否定。

すずかはそれを見て安心の反面、少し残念に思ったのはここだけの
秘密。

一方、バーチャルリフレクト組はと言つと…

《なああ!つく…よ、予想外すぎる…》

佐依が狼狽える。

《最後の1撃！いつけーっ！【サヴァン・ヴァルキリー】！！》

《ぬうおおおお！！》

ぼたんの視界が流れ、蒼い閃光は佐依の視界を飲み込む。

【WINNER・1P】

スクリーンと各ルームに勝者とルームの人物が表示される。

「いえーい！勝者の凱旋だー！皆の者！我を出迎えー！」

右奥のルームから出て来たのは、この試合の大番狂わせを演じて見せたぼたんだった。

「くっ、素人相手に油断するとは…！この季櫓佐依、一生の恥！」

左前のルームから出て来たのは2位になった4Pの佐依。

『……………はあ……………』

続いて右前と左奥のルームから溜め息をついて出て来たのは、右前から3Pのスバルと左奥から2Pのティアナだった。

「佐依さんは元々強すぎるけど…」

「ぼたんさんが予想外過ぎる強さだよ…！」

ぼたんが使っていたコマンドは鎧兵。巨大な西洋槍と楯を保有する、

全コマンド中最高の防御力を誇る。しかし、移動スピードが遅く反応が遅いのが難点の、比較的上級者向けの仕様となっている。

【サヴァン・ヴァルキリー】は鎧兵の必殺技。最大までゲージを溜めて、一気に突進、突き上げると言うかなりえげつないもの。勿論、その分かなり大振りになり、外すと隙が生まれてそこを突かれて負ける事が多い。

因みにスバルは拳闘兵。全コマンドの中で移動スピードがずば抜けて高い。但し、防御力は最低、至近距離での戦闘しか出来ない。

「……………」

「どうした？シグナム。急に黙り込んで」

「いや…ちょっと、な」

シグナムはまた、黙り込んだ。

side out

sideシグナム

スクリーンに映る世界。私は、あの世界に“似た”世界を見たことがある気がする。

ただ見ただけではない。何かがあった（……………）気がする。

私と、ヴィータと、シャマルと、ザフィーラと。そう感じたのは私だけみたいだった。

あの城壁、あの甲冑、あの山、あの湖……

やはり、どこか既視感が否めない風景が映っている。鎧兵が突く。

あの技、やはり見覚えがある気がする。ただの勘違いだろうか？ 私達は夜天の書のプログラム。今は切り離されて【個体】として行動できるが、10年前のあの日から以前、私達はただの防衛プログラムとしてしか【機能】していなかった。

“汚染された”夜天の書の主が命を落とした、または夜天の書が破壊された場合、私達は記憶をリセットされまた新たな主に従うようにプログラムされていた。

しかし、この世界だけは頭に映像映像が流れている。戦いの映像、城内の映像、人の映像、世界の映像。

やはり、私は見覚えがある。私達は確かに、【あの地】にいた。しかも長い間、誰かに仕えていた。しかし、それを実証するモノは一つとして見つかっていない。

主曰わく、あのゲームは実際の本、ガリア地方に古代から伝わる神話【聖騎士伝説】を基にしたゲームだそうだ。

今の私の考えを纏めると

- ・ 私達と夜天の書は古代ガリアにいた。
- ・ 私達は古代ガリアの誰かに仕えていた。
- ・ 古代ガリアは戦乱の時代だった。

・私だけ、その記憶が残っているらしい。

「……………」

「どうした？シグナム。黙り込んで」

「いや…ちょっと、な」

私の考えすぎだろうか。

…そうだな。きっと疲れているだけだろう。しっかり休まないとな。私はそれ以上考えるのを止めた。

【聖騎士伝説】。

それが私達ヴォルケンリッターの未来を変える事になると知ったのは、まだ先の事である。

side out

side ヴェストール

現在、プライベートジェットは黒海をスイスのチューリッヒより1000?手前、残り1時間30分を切った。機内ではゆっくりとした時間が流れている。

はしゃぎ疲れて寝ている人、お茶を楽しんでいる人、窓の外の景色を楽しんでいる人。ただ一人、俺だけは少し連絡や手続き等で休む事が出来ない。

「はい……はい……解りました。では、そちらの方でお願いします。……はい……ありがとうございます。ではまた、後程お願いします。……それでは、失礼します」

「はい、コーヒー持ってきたよ」

何時の間にか俺の横にコーヒーを持った義姉さんがいた。

「ありがとう、義姉さん」

「うん」

一口啜る。うん、この苦味が疲れを吹き飛ばしてくれる。コーヒーっていい。因みに俺はブラック派。

「さっき話してた人は？」

「向こうの協力者の人。事情も知ってるし、その人の協力のお陰で向こうでは不便しないと思う」

「そうなんだ」

一応、念には念を入れて泊まる所も何とかなるし、後はレイム達に“挨拶”するだけかな……

窓の外を見ると、鮮やかな夕焼け空が広がっていた。懐かしい夕焼け空。小さい頃、俺の家から眺めた夕日とは違う空だけど、あった

かいと心のそこから思える空。

「空、綺麗だね」

「ああ」

「向こうに帰るの何年ぶり？」

「大体10年ぐらい。…長かったな……」

俺はあの忌々しい【事故としてかたづけられた事件】後、一度あつちに戻って1年向こうの学校に戻ってから、一切スイスには戻っていなかった。それから10年、俺はハラウン家で育ち、管理局で学び、任務や依頼で様々な所に行き、色々な人に出会った。決して寂しいとは感じなかった。

だけど、故郷を思ったのは数えられない程あつた。それ程、恋しかった。

そして今日、ようやく戻る事が出来る。

俺の始まりはここから始まった。昔の自分も、今の自分も。そして、未来の自分も。

永い旅はまだ終点おわりを見せることは無い。

s i d e o u t

第12話 過去と現在（いま）と悲しみと？（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

シ・ヴァ 『後書きトークショー！』

ヴァ 《さてさて、今回は第12話をお送りしました〜！》

シ 《佐依さんって元からあんな万能な人なのですか？》

ロ 『初めて会ったときからあんな感じ。“ド”が付く程のゲーマーで、かなり運動神経が高かったのを覚えている』

自分の作ったキャラで何だけど、佐依ってかなり万能さんだよな。

ヴァ 《それは肯定です〜！》

そして、遂にPV50000を超えました！

ロ 『こんな駄作を読んでいただけるなんて…あなたの目は節穴だ！』

読者様に失礼な事言ってんじゃねえ。釘バットで頭をぶっ叩く

グシャ

さて、記念の番外編は出身任務編が終わってからにしようと思いません。

それで、番外編で読んでみたい話をアンケートしてみようと思いま

す。

次の選択肢から1つ選んで下さい。

? はやてとの出会い

? 海鳴での高校生活

? 幼少期の思い出

? その他

リクエストもありです

4つ目に関しては兎に角何でも良いです。ギャグだろうと、シリアスだろうと、バトルだろうと何でも良いです。

ヴァ《皆さんのリクエスト、まってまっす!》

それじゃあ次回予告、シルフよろしく!

シ《解りました。

ヴェストール達は遂にスイスに到着。そのチューリッヒの空港で待っているのは、ヴェストールに関係が深い人らしいが…
そして、ヴェストールの家族の正体も…

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS(ヴァルキュリアの血を引く者) 第13話 過去と現在いまと悲しみと?

蒼の咎人は地獄を望む…》

第13話 過去と現在（いま）と悲しみと？（前書き）

第13話です。

第13話 過去と現在（いま）と悲しみと？

side???

第97管理外世界【地球】

スイス・チューリッヒ上空

16:30

到着まで残り40分

距離500?

《皆様、当機はまもなく着陸体制に入ります。座席にお座りになってシートベルトをしっかりと締めて下さい。……》

キャビンアテンダント
CAの声が機内に響く。

プライベートジェットはゆっくりと高度を落とし始める。

「そろそろ……か……」

《マスター、通信が入っています》

「わかった。繋いでくれ」

《了解しました》

2階席のリクライニングシートに座っているヴェストールはシルフを介して通信を繋げる。

《やあ、久し振りだね。ロン》

ウィンドウのモニターに1人の男性が映る。

スツとシャープな輪郭、優しそうな青い目、高い鼻、そしてヴェストールと同じ蒼い髪。髪は眉の辺りで切りそろえられ、サラサラとしているのがモニター越しでも解る。

「ハウザーか。久し振りだな。最後に顔を会わせたのは8年ぶりか？」

《そうだね。と、言っても会ったのは画面越しだったけど》

「すまん。いろいろと忙しくて、一度地球には帰って着ただけど、何分時間が足りなくてさ」

《いいよ別に。特に怒ってるわけじゃないから。でも……カイルが、ね》

「うげっ！？カイルだと！？……それは参るぞ……」

《しかも、お出迎えに彼女ときた。因みに僕はいないよ。居るのはカイルとジーゲさんだから》

「…コレ、死亡フラグ？」

《だね。クスクス》

「……………」

死亡宣告されたヴェストールの顔は、絶望にまみれていた。

カイルは優しそうな声の割には随分とバツサリ言っただけの様子を楽しむ。

ヴェストールはそんなハウザーを“Sの貴公子”と影で言っている。“表沙汰に言ってしまったらハウザーに何されるか解らないからだそうだ。”

《そんな事より、皆様の泊まる場所を僕の家にしたんだけど…いいかな?》

「いいのか?」

《うん!君の頼みなら喜んで聞き入れるよ》

「悪いな。お返しは新作でいいか?って言うか、俺が出来るのはケーキぐらいだけだな」

《君のケーキならそれぐらいの価値はあるよ。謙遜しなくてもいいのに》

「ありがと。あと30分ぐらいで着くから、2人に伝えといてくれ」

《解ったよ。それじゃあ、また家で》

「ああ、また」

通信が切れ、モニターとウィンドウが目の前から消える。

《確か、ハウザー様と面識があるのはマスターとリンディ統括官、

クロノ提督と騎士カリムにアコース査察官だけでしたね》

「いや、あの時ははやてさんもいた。顔を覚えてるかどうかは別だけど」

天井を仰ぐ。

久々に見た従兄弟の顔、前と変わらず優しそうな声、懐かしい響きの名前。家についたらもう一方も居るだろう。どんな顔で会えばいいだろう？何を話そう？

(きつと…いや、絶対か？)

ヴェストールの頭には、子供の頃の記憶が蘇る。

s i d e o u t

.....

s i d e はやて

スイス・チューリッヒ

チューリッヒ国際空港ターミナルビル。

17:10

「着いた〜！」

「ここが…」

「スイス…」

「いやいや、まだ空港の中だから。感動するところ違うから」

フォワードのみんながまたテンションが高なってる。

まあ、空港の中とはいえ、一応スイスなんやし…

「そろそろ行きますよ。時間もそんなにない」お〜に〜い〜ちゃ〜ん〜！」「!?か、カイルくぼお〜！！」

出口の方からツインテールの女の子がかけてきたと思ったら、そのままロン君に体当たりしてきよった!? しかもロン君はそこから5m飛ばされた。

……………ん？

さっき、あの娘から“お兄ちゃん”って聞こえた気がするんけど…

「お兄ちゃん寂しかったんだよ!?少しは連絡頂戴よね!そんなんじゃない私ナイトの騎士様失格だよ!？」

「いやいや、俺、カイルの騎士やってないから。それ以前に騎士じゃないか」「そんな…あの時ロン君“私の騎士になつてくれるって言ったのに……嘘だったの!?”それはあの時だけだ」「お兄ちゃん

それどう言う事！？私という王女プリンセスが居ながらに他の【検閲】に【らめえええ】をしたって言うの！？」「いやだから、s「そ、そうよ！私にロン君が【言っちゃらめえええ！】をしたのよ！！…あの夜は激しかったわ…」ちよっ！！すすかさん！？何か勝手に既成事実捏造しないで下さいよ！！？」「

な、なんやて！？ロン君すずかちゃんとい、イチヤイト…！！あ、あかん！卑猥や！！ロン君はそんな狼さんやったんか！？…で、でも…ロン君やったら…／／／／／

いや、そうする前に先ずは…

「ロン（君）（ヴェストール）（ヴェストールさん）（お兄ちゃん）！？どう言う事だ（ですか）（なの）（や）！！？？」この間約0
3秒

「何故それを信じる妄想バカ共！！」

スッパアーン！！

その日、その空港では10人近い美女が床にうずくまって呻いていたらしいんよ。

……

30分後

ハイウェイ

貸切バス車内

「ううゝ…思いつきり叩くなんてせんでも…」

「皆さんが悪いんです。それ対応の対応をさせていただきます。では」

そう言つて前を向き、膝に乗っているエリオとキャロの頭を撫で始めた。2人は頭を撫でられて気持ちよさそうに目を細めた。

…羨ましい…：ロン君の手、ロン君の膝…本当なら私がそこに居る筈なのに…

「違います！私がお兄ちゃんの膝に座つてイチャイチャしてる筈なのです…！」

「あなたみたいな幼女にヴェストールさんが興味ある訳ないよ！私みたいな“大人の女”が好きなの！愛しているの！」

「ティアナ違うわよ！あたしみたいなお淑やかな女性が良いの」

「アリサちゃんがお淑やかなら私の方がもつとお淑やかなの！」

「違うで！みんな解つとらんなあ…おいしい料理が作れる私がロン君の夫さんに相応しいんや！」

ふっ…：コレなら何も言えんで。

「クスツ…はやてみたいいなそんな貧相な身体でロン君を慰められる

の？満足させられるの？」

な、なんやて〜！いくらフェイトちゃんでもそれを言ったら許さへん！

「フェイトちゃんみたいなすいか玉は余分な塊や！こつされるんがお似合いやっ！」

私はフェイトちゃんの後ろからけしからん胸を揉みしだく。

「ちよっ！はやてっ！？ふあっ！？だ、ダメ！やめっひああっ！…はうん…ら、らめえええ！」

そつこつ騒いでいよったら

「……………」

『！……！？？』

ロン君から異様な空気が。膝の上のエリオとキャロは口から泡を吹いて気絶してる。

…アカン……本格的に怒らせてもろた…

「……………クス……………クスクス……………」

不意に笑い声。ロン君がこつちを向く。

『ひいひいひいっ……………』

口を閉じたままクスクス笑い、目は笑った形で閉じてはいるものの、後ろから真つ黒と濃い紫と深紅が混じったオーラ。その様子はさながら……

怒りに荒ぶれる鬼神やった。

「貴様等、今は車内だから仕方ないが……着いた途端に……」

『……………』ガクガクブルブル

「……………血祭りに上げて上げますよ？糞野郎共」

その話し方のギャップに恐怖しか沸かんかった。

『しめんなさい！』

それを見たロン君はにっこり笑って、

「I Y A D A。僕がしっかり教育、もとい調教して上げますね。皆さん」

バツサリと死刑宣告をされてしもた。

sideout

sideヴエストール

「うう…思いっきり叩くなんてせんでも…」

「皆さんが悪いんです。それ相応の対応をさせていただきます。では」

膝に乗っているエリオとキヤロの頭を撫でる。2人は頭を撫でられて気持ちよさそうに目を細めた。

ん…2人はいい子だな。素直で優しく、何よりつまらない事で一々騒がない。

「…羨ましい…：ロン君の手、ロン君の膝…本当なら私がそこに居る筈なのに…」

何やらぶつくさとはやてさんが咳く。

そして、それを火種に第2ラウンドのゴングが鳴った。

「違います！私がお兄ちゃんの前座に座ってイチヤイチャしてる筈なのです！！」

「あなたみたいな幼女にヴェストールさんが興味ある訳ないよ！私みたいな“大人の女”が好きなの！愛しているの！」

「ティアナ違うわよ！あたしみたいなお淑やかな女性が良いの」

「アリサちゃんがお淑やかなら私の方がもっとお淑やかなの！」

「違うで！みんな解つとらんなあ…おいしい料理が作れる私がロン君の夫さんに相応しいんや！」

ああ〜もう、頭の中はうるさいの一点張り。この馬鹿みたいな問答と喧騒に血が上ってくる。
俺、絶対高血圧で倒れる。

「クスツ…はやてみたいなそんな貧相な身体でロン君を慰められるの？満足させられるの？」

義姉さんまで参戦してきた。しかも女性特有の特徴を武器にはやてさんに言い詰めた。

そしてコレがマズかった。

「フエイトちゃんみたいなすいか玉は余分な塊や！こうされるんがお似合いやつ！！」

「ちよっ！はやてっ！？ふあっ！？だ、ダメ！やめっひああっ！…はうん…ら、らめえええ！！」

義姉さんの後ろの席にいたはやてさんは義姉さんの豊かな胸を激しく揉み始めた。う〜ん…眼福、眼福…と考える程、俺の今の精神状態は正常ではない。まあ、それを見て眼福とも考えないが、簡単にまとめよう。

ぶちギれる寸前だった怒りはダムを失った。

「……………」

『……………』

膝の上のエリオとキヤロは口から泡を吹いて気絶してる。

それ程今の精神状態が“怒”に染まっている。

「……………クス……………クスクス……………」

不自然に笑みがこぼれる。溜め込まれた怒りは現段階ではゆっくりと流れているものの、今が車内出なければ絶対砲撃の一発二発をぶち込んでる筈だ。

一応後ろを向いてみる。

『ひいいいっ！！！』

やっぱり怯えてた。自然と口が開く。

「貴様等、今は車内だから仕方ないが…着いた途端に……………」

『……………』ガクガクブルブル

「……………血祭りに上げて上げますよ？糞野郎共」

『ごめんなさい！』

皆さん揃って土下座…までは行かないけど、真剣に謝っては居るらしい。だが、俺の怒りは収まることを知らなかった。

「I Y A D A。僕がしっかり教育、もとい調教して上げますね。皆さん」

実質上の死刑宣告をして見せた。

「皆様：私を忘れていらつしやるのですか？」

おやまあ、ジーゲさん居たんですか。って、前からいたか。

「すみません。存在を忘れてました」

「ひどいです…」

ジーゲさん涙目。

でもこの後がめんどくさい。ちゃんと慰めておかないと大変な事になる。

ある時は怒り狂って家に大穴が空き、ある時は泣き狂って窓ガラスを全てわり、ある時は自らの貞操の危機に……

碌でもない事しかないのだ。

「いや…その…：すみませんでした。すっかり怒りに溺れてしまつて…：面目ないです。お詫びと言つては何ですが、新作ケーキを5ホール作りますんで」

「ほ、ホントですか？」

ゲージさん、貴女の上目遣いは核と同等と言つ事をいい加減理解していただきたい。

「ええ、俺の失態ですから。約束しますよ」

「では、そう言つ事で。もし破つたら…」

ジーゲさんがグイッと顔を寄せる。

「破ったら……」

ゴクリ……

生唾を飲み込む。バスがハイウェイを走る音だけが聞こえる。

「その時は……あなたの小胤を頂きます」

妖艶な笑みで俺の耳元で呟く。耳にかかる甘ったるい息がくすぐったい。

「クスツ…ヴェストールさんって、可愛いですね」

「かつ！可愛いな……」

窓の外を眺めるように顔を背ける。しかし、そこで俺の言葉が切れる。

チュツ…

「ふあっ！！？？」

「ご馳走様です」

ウィンクをしてジーゲさんはそのまま自分の席に戻っていった。

俺、今キスされたよな…？

右の頬に触れる。

少し、しっとりとしていた。
ゆっくりと後ろを見る。

『……………』

ずーん…

とした空気が流れていて、誰も気付いていなかった。

……………。

セエエーーフ!!! 声量0・1

あ、あぁっあぁあ、あつぶねえーー!!!

今年1番の絶対零度の滝汗だった。

そここうしてる内に、段々とアルプス山脈と渓谷、自然豊かな土地に入った。

「……………懐かしい……………」

かれこれ10年、ここには戻ってきていなかった。
景色に一つも変わらない。

「懐かしいですか？」

何時の間にか隣に着ていたジーゲさんが尋ねる。

「ええ、まあ……長かったんで、故郷の空気を吸えて身体も喜んできますよ」

少しおちゃらけて言ってみた。顔もきつと無邪気だったのかもしれない。

「ヴェストールさん……可愛いです……食べちゃいたいです」
／／／

“大人の色気”と言うものを醸し出しているのかも知れない。
ぐんぐん顔を近付ける。

俺も惹かれるようにその顔に近付ける。

「ジーゲ……さん」
／／／

「ヴェストールさん……」
／／／／／

唇が触れるまで数ミリ。

『ダメエエ……!!』

そこで後ろからストップがかかる。見てみると……

「ジーゲ……私のお兄ちゃんを誘惑しないで……もしまたしたら……
……解ってるよね?」

『……………』

真っ黒な炎が後ろで見え隠れしてる。こりゃ地獄だな地獄。

「すっ、すみませんカイル様!」

その様子をコーヒーを飲みながら傍観していると
チヨンチヨン

「ん？」

「御屋敷に到着したんですが……」

「ああ、すみません。すぐ降ります」

運転手さんに一言謝って俺とリインと佐依と龍也、気絶から目を覚
ましたエリオ、キヤロを連れて玄関まで行く。

「うわあ〜……」

「庄巻の一言に尽きるわ」

「素敵ですね……」

「まるでお城みたいですよ！」

「中世の宮殿によく似てるな」

森の中に建つその建物は“家”と呼ぶには程遠い大きさ。“城”と
言うより“宮殿”と言った方があってる。
その玄関の扉の真ん前に1人の青年が手を振っている。

「お帰り、ロン」

「ああ、ただいま。ハウザー」

「あれ？他の皆さんは……」

「ジーゲさんに地獄を見せてる」

「そ、そうなんだ…あ、あはは……」

ハウザーは理解したのか苦笑いした。

コレだけの情報でどういう事が解る程、俺とハウザーは付き合いが長い。

「リスティアとクルスはもう中だよ。後、アーヴィングさんとギユンターさんもいらしてる」

「あのお二方もか！？き、緊張する……」

「そう堅くならなくても良いよ。さっ、早く行こう」

「ああ、それじゃあ5人も一緒に来てくれ」

『はい)です(！)(ええ)(おう)』

……

「それじゃ、まだ紹介してなかったからこの場でまとめて紹介します」

1時間後、ようやく気絶したジーゲさんと共に義姉さん達が来た。そしてまだ紹介していない事に気付き、広間で集まって紹介する事にした。

「まずはこの家の主で俺の父方の従兄妹、とハウザー・ヴェストールとその妹カイル・ヴェストール。そしてメイドのジーゲさん」

「先程はジーゲと妹が失礼しました。改めまして、ハウザー・ヴェストールです」

深々としたお辞儀に、慌てて6課メンバーと日本協力者の全員が合わせる。

続いてカイルがお辞儀をする。兄のハウザーと同じく、髪の色が蒼い。髪は腰よりもちよっと上ぐらいでツインテールにしている。

「ハウザーの妹のカイル・ヴェストールです」

今度は緩くカールしたブロンドの髪にカチューシャをつけているジーゲさんが立つ。そのメイド服からも解る程のナイスバディーの持ち主。

「ぐへへ…超美人で巨乳のメイドさん…ぐへ、ぐへへへ…」

とか言ってる龍也へんたいはさっき処刑したのでご心配なく。

「メイドのジーゲです。先程は誠に申し訳ありませんでした」

3人の挨拶が終わると、今度は白銀の髪と俺と同じ目を持つ2人の

男女を指す。

「そして、母方の方の従姉弟、リスティア・レイモンドとクルス・レイモンド」

ハウザー達の隣に座っているリスティアとクルスが立つ。

「リスティア・レイモンドと申します。以後、お見知り置きを」

白いワンピースの裾をつまんで挨拶する。

「クルス・レイモンドです。長旅、お疲れ様でした」

こちらはカジユアルスーツを着ている。

「そして、俺の両親の友人、ネルス・アーヴィングさんとマリウス・ギユンターさん。よく俺と遊んでくれた人でもあります」

2人の男性は座って一礼。

「以上でスイスの現地協力者の紹介を終わります。続いて日本の現地協力者の方と、同じ職場の方を紹介します……………」

こんな感じで進んでいき、友好を兼ねて食事会を開く事になった。形式はバイキング。ここでもエリオとスバルの食欲が爆発。ハウザー達を驚かせたのも無理はない。

食休みも十分にしたところで、そろそろ風呂に入ることになった。

そして現在、男性陣と共に風呂の中。
白い湯気が立ち込める。

「なあハウザー、ここの風呂ってこんな大人数入るのか？」

因みに風呂は温泉。ルールで水着を着用しなくてはいけない。

「問題ないよ。まあ、いくら水着着用とは言え、目のやり場に困るだろうけど」

「クルスさん。温泉、気持ち良いですね。日本と負けてませんよ」

「そんなに気持ちいいですか。喜んで貰って光栄ですね、ハウザー」
「まっただよ」

「高町先輩の…フェイト先輩の…はやて先輩の…すずか先輩の…アリサ先輩の…リスティアさんの…佐依の…ぼたんの…そして、ジゲさんの…ぐふっ、ゲフフフフ………」

「……ハウザー、不審者を魂と体ごと場外ホームランに出来る装置は無いのか？」

「生憎、ここには無いんだよね………」

「変態の目で汚されていくのか…止める事が出来ないなんて……ロ
ンメル・ヴェストール、一生の恥だ………」

「気にする事はないんじゃないですか？ロン兄さん」

「何故に？」

クルスがこちらを向いて話す。

「女性に強い”んですから”

『成る程！』

彼ら曰わく、この時の“強い”は暴力的であると言つ意味になるとかならないとか

濛々と立ち込める白い湯気の先には、淡く輝く月が輝いていた。

「お待たせ！」

男性陣が声のする方へ向く。

『ぶふおお！！！！』

龍也、クルス、エリオが吹っ飛んだ。湯を真つ赤にして。

「…………目のやり場に…………」

「これは…予想以上だね」

俺とハウザーは目をそらす。顔を真つ赤にして。

「口、ロン…どうかな…」 / / / / / /

義姉さんの声が見る方を見る。

「ぐはっ!!」

…アウトですね、はい。

義姉さんは真っ黒な“大人の”ビキニを着ていた。

しかも恥ずかしそうにもじもじして、胸の谷間が強調されていて…

…とてもじゃないけどそこを向く事が出来ない。

「ロン君私達のも見てくれへんかな？」 / / / / /

別の方向からはやてさんの声。さっき義姉さんの水着姿を見て鼻血が出そうになっただけに鼻を押さえて向く。

「……すごく…大人です…ふがふが」 / / / / /

見てはいけない。けど見入っちゃう。隣のハウザーでさえ俺と同じ感じになってしまっただけに危険な眺めだ。

なのはさんは薄いピンク、はやてさんは白、スバルは青、ティアナはオレンジ、佐依は赤、ぼたんは水色、リスティアさんに至っては紫だった。

しかも上記の方々全員がビキニ（内佐依、リスティアさんは紐ビキニ）である。

「あの…エリオ君と龍也さんとクルスさんは一体…？」

右を見るとピンクの可愛らしいワンピースタイプの水着を着たキヤロが。

「あいつ等はこの場にいる女性陣全員の水着姿を見て昇天なされた。

エリオに水着姿を見せたかったら、気付けして起こせ」

「はい！」

元気よく返事をしたら、エリオの方へ駆けて行った。

“こらこら、お風呂場で走るんしゃありません”なんて言うのは辞めにした。

「おにーちゃんーん！！」

「ぐぼああー！」

背中から強烈な一撃。コレをする人間は頭の中で独りだけ。

「カイル、背中痛いから突っ込んでくるな」

「えへへ、ごめんごめん」

舌をちょこつと出して謝るカイル。

水着は何故かスク水で胸のところに「かいる」と平仮名で書いてあった。

クソツッ！！俺の精神の2番目の防御網が突破された！至急増援を頼む！何っ！増援は無理だと！？ふざけるな！テロリスト（女性陣の水着姿）の攻撃が激しすぎる！このままだと突破されるぞ！

「ロン兄さん、それ、どこのジヤク・ウアー？」

「あ、クルス復活したのか」

「な、なんとかです…」

「ウフフ…クルスも含めて、皆さん初心ですね。ロン辺りならそうでもないと思っただんですか…」

「リステイアさんが言うとか何かエロいな」

「うん」

「リステイアさん！“もうお腹パンパンです”って色っぽく言ってみて下S『言わすな変態！！』そげぶっ！！」

俺と佐依とアリサさんで変態を星にした

「えっ？もうお腹i『リステイアさんもしなくてよろしい！！』はい！」

リステイアさん、あなたはそこら辺の知識無いから抵抗なく言ってしまうけど、それがアウトなのですよ！！

「風呂入っても疲れるってどういうこっちゃ……俺、もう上がるわ」

それだけ言い残して更衣室に戻った。

「ふう、なんだかんだでいいお湯だったな」

身体を拭いて、髪乾かして、黒の半袖長ズボンに着替える。これが俺の寝間着だ。

「ヴェストールさん！」

「ん？おお、エリオか。もう上がったのか」

「はい。ちよつとのぼせちゃって…キャロと一緒に上がりました」

「そつか、じゃ、広間でみんなを待つか？」

「はい！」

頭を乾かしてやった後、更衣室の出口でキャロと合い、広間に行った。

「温泉、どうだった？」

「気持ち良かったです！」

「よかったな」

『はい！』

俺が2人の頭を撫でる。

「悪いな、あんまり構ってやれなくて」

2人がこっちを向く。

「保護責任者は義姉さんだけど、仕事柄であんまり一緒に居てやれないし、一応俺もお前らの家族だけど一緒に居る時間無いし、寂しい思いさせてるかなってさ」

「そ、そんな事無いです！」

「スバルさんやティアさんが一緒に居てくれますし…」

俺の言いたい事とはちょっとだけ、違うんだけどな。

「俺が言いたいののは、“家族として”なんだよな……確かに、スバルやティアナ、なのはさん達と居る分には寂しく無いだろうけどさ、やっぱり“家族”だからこそ“暖かさ”ってあるんだよ。俺もお前らと同じ年ぐらいで長期任務に出た事あるけどさ、そこでの仲間の人達の“暖かさ”と帰って来た時の家族の“暖かさ”って全然違う。その“暖かさ”をお前らにもちゃんと知って欲しいんだ。だからこそ、この休暇を使って存分に甘えてくれても構わない。いや、寧ろ甘える。これ、命令な」

2人はきよとんとした後顔を見合わせて頷く。

「？」

「せーの…」

『お兄ちゃん（兄さん）！大好きです！』

そう言っつて俺に飛び込んできた。

「うおーい！……ったく、仕方ねえ妹と弟だ…」

そうは言っても、やっぱり自分自身が一番嬉しい。

やっぱり、家族っていいな。……あつたかい……

エリオとキヤロを抱えたまま、夢の世界へ意識を飛ばした。

side out

side???

「んむう〜…今何時だ…?」

ヴェストールが寝ぼけ眼で時計を探す。

「もう10時だよ」

後ろを向く

「義姉…さん?」

「いや〜…随分と気持ちよさそう寝てたから起こそうかどうしようか迷っちゃったんだよね〜…」

今度は前のソファから。見てみるとぼたん、ティアナ、龍也がいた。

「ヴェストールさんの寝顔、可愛かったですよ」

「もしかして、見られてた?」

「ああ、それはもうばっちりと。ここに写真もある」

ヴェストールは立つや否や龍也から写真を引ったくり写真を見る。そこにはエリオとキャロを抱いてさも嬉しそうな顔をしたらヴェストールの寝顔が写っていた。

「んなつ…!」

「因みに私達も貰ったで」

はやての声のする方を見ると、女性陣全員がその写真を持っていた。

「なつ！ なな何故撮った!？」

龍也に食ってかかるヴェストール。

「そこで寝てるお前が悪い」

「グツ……!」

龍也に珍しく、まともな答えが帰って来た為言い返せない。

「まあそんな事より、皆さんに教えなくてはならない事があるんだろ、ロン」

中央のソファーに座ってるハウザーが紅茶を啜りながらヴェストールを見る。

「そうだった……それじゃあ、皆さん適当な所に座って下さい」

全員がコの字にすわり、ヴェストール、ハウザー、ハウザーとレイモンド姉弟が前に座る。

「まず、俺達の関係は“いとこ”であると共に、ある血筋を太古から受け継いでいる一族の子孫でもある」

「コレを見て下さい」

クルスが真ん中にあつた長机に一冊の本を置いた。

「【聖騎士伝説】の元になつた何千年も昔は本【ガリア聖書】です」

その聖書は表紙が蒼く、流れた時間に反比例して金縁は今尚輝きを衰えさせない。

ヴェストールと丁度反対側にいたはやてが開く。

「何やこの根っこみたいなモノは……？」

「それが私達の関係です。ただ、この文字を解読出来るのはお兄ちゃんの両親だけなんだけどね……」

何時もテンションの高いカイルが暗い顔になる。

「気にするな。一応俺も聞いたからなんとなく解るんですが、上の5つに分かれてる所の名前には

ロンメル・ヴェストール

ハウザー・ヴェストール

カイル・ヴェストール

リスティア・レイモンド

クルス・レイモンド

と書かれています。そして一番下にある名前は

エルシア

と書かれている筈です。

更にエルシアと俺の名前だけが中心の直線上に書かれています」

「……ホントだ。“エルシア”さんとロンだけ直線上に名前がある……」

そしてリスティアが徐に次の言葉を声にして飛ばす。

「この家系の起点は“エルシア”様。そして現段階では私達がその子孫。最後にロンは“エルシア”様と同じ血になっているのです」

「え〜つと、つまりどういう事？」

なのはは顎に人差し指を当てる。

「つまり、俺は数世紀の時を超えて始祖エルシア様とほぼ同じ血が流れている。

“ヴァルキュリア人とダルクス人の混血”と言う特殊な血が」

『!!!!??』

ヴァルキュリアとダルクスの混血、それは【ガリア聖書】ではつきりとする事実。

今まで世間では“ヴァルキュリア人”と“ダルクス人”の“全く別の人間”と言う捉え方が、“ヴァルキュリア人とダルクス人”と言う“同じ血筋を持つ人間”に分類されるのだ。

「俺の両親は考古学者であり、“ヴァルキュリア人とダルクス人”である。2人は自分達の血筋、始祖エルシア様の手掛かりになる物を探していたが、結局俺を残して死んだ。次元犯罪者の手によって、何の抑揚もなく淡々と話すその姿は、見る者全てに強い喪失感を漂わせる。」

「ギユンターさんとアーヴィングさんは両親と同じ考古学者で一緒に研究していた。しかし、両親が死んだ事でそれを見つげ出す事が困難を極めた。そこでお2人は、知り合いの月村家の方に協力を依頼。そして今、ここに“それ”がある」

ヴェストールは首に掛けていた蒼く輝くペンダント【ゲヴァイテス・クロイツ】を外した。

side out

第13話 過去と現在（いま）と悲しみと？（後書き）

シ「シルフと」

ヴァ「ヴァールの」

シ・ヴァ「後書きトークショー！」

シ「何時も様に始まりました〜【後書きトークショー】！」

シ「今回は第13話をお贈りしました」

今回は何時もより酷い出来：絶賛後悔中のeagleです。

ロ「何故貴様はギャグにすると下ネタに走る！？ロンメル・ヴェストールだ」

なんか：なんとなく？

シ「言葉がおかしいです作者」

ヴァ「新キャラも続々とーじょー！今回だけで7人もいます〜」

ロ「今まででも、デバイス含めて既に20人弱、オリキャラ多くね？」

書き分けるのキツイ……

そんな事よりも、今回は特別ゲストがいらっしやいます！では、召還！！！

荒神大和「うおお！遂に来れた！」

シ「今回のゲストは清浦刹那さんの世界の荒神大和様です」
あらがみやまと

大「ん？シルフとヴァールは？」

ロ「ここに居るじゃん」

大「は？どこに……」 目線の先に超ミニスカメイド服に身を包んだボン！キュツ！ボン！のポニテお姉さんと白スク白ニーソのツインテ金髪童女。

この日の為に人型にしてみました！

大「……………」

シ「そ、そんなに見つめないで下さい……恥ずかしいです」
／／／／ もじもじしてる

ヴァ「大和おにーちゃん、いつしよにあそぼうー！！」 飛び付いて大和の胸にすりすり

ロ「…ヤバイ…自分のデバイスなのにここまで興奮してしまうとは……」
／／／／／／

早くこっちの世界に来い！

ロ「い、いやしかし…ああ…でも………うおおおおー！俺はどっすねばっ！……」

大「おつ持ち帰りイイイイ!!」

あ、大和がシルフとヴァール抱えて逃げ返った。

次回までには戻って来いよ。

さて、次回予告出来るのが自分だけなんで、次回予告します。

ヴェストールのカミングアウト、それは世界をひっくり返す程のもの。

始祖エルシアとヴェストールを繋ぐ物はただ一つのデバイスのみ。

しかし歴史の歯車は着実に回り始める。

そして、デバイスの力は解き放たれる。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜ヴァルキュリアの血を引く者〜第14話 過去と現在いまと悲しみと？

失われし力は新たな未来。

現在、番外編のアンケートを取ってます。以下から一つお選び下さい。

? はやてとの出会い

? 海鳴での高校生活

? 幼少期の思い出

？その他
リクエストもありです

第14話 過去と現在（いま）と悲しみと？（前書き）

2ヶ月も放置してすいませんでした…

第14話です

現在番外編アンケート実施中です！

第14話 過去と現在（いま）と悲しみと？

第97管理外世界【地球】

スイス

22:30

sideヴエストール

昨日の深夜、いや、今日か？

どっちでも対して変わらないけど、あの時ずかさから渡された
“聖十字”のペンダント。

淡い青煌に輝く十字に見る者全てが魅入った。

「これは……？」

「正当継承者の家系に伝わる魔導器。管理局公認危険度特Sランク
認定ロストロギア、ゲヴァイテス・クロイツ」

「別名を【聖戦を告げる者】と言います」

俺に続いてリスティアさんが説明する。

「永らく一族の前から姿を消していた、エルシア様のお使いになっ
たという伝説の聖剣です。このような魔導器は地球上に数多く存在
します。が、ゲヴァイテス・クロイツに関してはその他の魔導器に
は無い特異な点があります」

「特異な点？」

義姉さんがゲヴァイテス・クロイツを注視する。

「それがこの、青く輝く十字部分。これは、ある貴重な鉱石を純度100%になるまで精製し、鑄造して作られました。しかも、この鑄造技術自体が解明されておらず、複製ができません」

「そしてもう一つ、複製できない理由があります」

継いでハウザーがもう一つ(・・・)の理由を告白する。

「デバイスに限らず、全ての物には元と成り得るがありますよね。そして、その元が無ければ出来ません」

「んだよじれったいな。さっさと説明しやが」「ヴィータ」…すまねえ、続けてくれ」

「つまり、このゲヴァイテス・クロイツを作るために必要な青い鉱石は、既に、この地球上には存在しない(・・・)のです」

「じゃあ、このロストロギアは実物だけしか存在しないんですね？」

「そう言う事。だからこいつがどれ程の能力があるか、使ってみなぐちゃ解らないってことになるね」

ハウザーが難しい顔をする。けどまあ、実際に使ったから基本的な能力は解ったけど。

・ゲヴァイテス・クロイツは例の鉱石を精製して創られた。

・その精製方法は、その当時の技術からは考えられない程の高度な技術である。

・ゲヴァイテス・クロイツはヴァルキュリアの能力を最大限引き出す事が出来る。

今はこれだけしか解らないけど、能力はまだある筈だ。

そんなこんなで話は進まず、エリオとキャロ、あとリインとスバルの為に今日はお開きとなった。

s i d e o u t

s i d e ????

そこは、静かな美しい庭園。

色とりどりの草木の生い茂る場所
人はそこを、

【時の庭園】

と呼んだ。

そして、人々は知らない、その【裏世界】を

【永久の墓場】

と言う。

そこは正しく、【無】の空間。光一筋すらない無の世界。

そこに、一人の女性がいた。生まれたままの姿で、そこに蹲って浮いていた。

名は「リイン・フォース」。【夜天の書】の元管制人格であり、八神家の家族である。

10年前のクリスマス、彼女は騎士・八神はやてによって救われた。何世紀もの永い間、彼女を縛り続けていた【呪縛】から。

空間を漂うリイン・フォースには、安らかな寝顔が浮かんでいた。きつと、家族に囲まれた穏やかな日常がそこに広がっているのかもしれない。

その時、何も無い空間のど真ん中に、眩く光り輝く球体が現れた。そして、それはリイン・フォースに接近する。

「ん……何だ、一体……」

その余りの眩しさに目を覚ましたリイン・フォースに声が届く。

「汝、名はリイン・フォースか？」

「?そっだ」

「我が名は【エルス】。【聖騎士】の遣いである」

「【聖騎士】の…遣い……」

「そうだ。【聖騎士】は数多な時を越え、再臨なされた。汝には、【聖騎士】の守護をしてもらう」

「しかし…私はこの身。どうすると言っただけ？」

「汝には新たな肉体と能力ちからを受け、その身をもって【聖騎士】に仕えるのだ」

「しかし……」

「汝の求めるものは、全て揃っている。そして騎士は、その全ての有無を決める【全て】を握っている」

「!？」

「騎士はまだ若い。力も未熟である。汝には騎士の守護だけでなく、共に支えあう唯一無二の存在でもある」

その言葉にリイン・フォースは赤面した。

「そ、それは…まさか……」 / / / / / /

「…汝の考えは自由だが、飽くまでも騎士の守護…いや、補佐に近いかも知れぬ。が、それが主である事に変わりはないぞ」

それに対しエルスは若干呆れている様だった。

「む、申し訳無い」

「それで、汝の答は？」

「それなら決まった。私は、私の大切な存在を無くしたくは無い。そして、私にそれが守れるなら、私はそれを守り通す」

リイン・フォースは世界に立つ。その目には、生氣と覚悟の焔を滾らせて。

「……では、汝に能力を授けよう。その魂に、その心に。全ては【聖騎士】の為に……」

そして世界は光に包まれた。消えたときには、そこにはリイン・フォー스와エルスの姿は無かった。

side out

side 龍也

ほぼ暴露に近いロン達の話から開放され、今は宮で、もといハウザーさんの屋敷の中庭にいる。さっきまでロンとぼたと佐依と一緒に月を眺めてた。“ヨーロッパでは女性の横顔に見える”って噂は本当だった。日本と違う月、月明かりまで違うように見える。

……今いる場所が自分とは無縁の場所だと、改めて思い知らされた。

「さて、俺も寝るか。俺の取柄は何所にも寝れる事だかな。こ

んなのはらしくない」

自嘲気味に笑って今までの急速な展開から顔を背ける。いくらロンに変わった血が流れてるとは言え、俺は気にしないんだが、どうも俺の体、特に弱い頭がそれを許さないらしい。頭ギンギンで寝たくても寝れん。

こんなため息しか出ない自分はずくづく弱いと考える。おかげで近づいてくる人の気配に気づけなかった。

「龍也」

「!?!?!?」

不意に後ろから抱きつかれた。背中にやわらかい感触……むふふ、悪う無い悪う無い。声の主は俺のよく知るやつだしな。小中高と12年間の付き合いを嘗めるなよ？

次の瞬間、俺はそんな余裕ですら構えられなかった。

「…ぺロツ……」

「つくツ……!」

耳を舐められた。しかもディープに舐めてきた。たまらず一歩ステップして後ろ見ると、

「?…佐…依……」

仄かな月明かりに照らされたその黒髪は、季櫛佐依の物だった。

「佐依…だよな？」

「……………」

終始無言。しかし、ゆっくり近づくとその姿は季櫛佐依本人。ただ、雰囲気がるで違う。

「……………」

そして無言のまま俺に真正面から抱きついた。

「おいおい、何の冗談だ？お兄さんびっくりしちゃって襲いかかったちやいそつだ」

「だめ」

拒否の言葉を突きつけられるも、何時もの様な力が無い。

「だって、それは、私のする事だから……」

「！？」

そして俺はテラスの床に押し倒された。

「さ、佐依！？」

「だめよ。大声上げたらばれちゃうから」

そう言って俺の唇を佐依自身の唇で塞いだ。しかもごく丁寧に舌まで

入れてきた。

「うぶっ……はむ、くちゅ……れるお……」

「さ、さん……やめらんふ……やめろー！」

何とかか弱き理性を総動員して佐依を突き飛ばす。

「何しやがる！いくら俺でも、こんな冗談はごめんだ！佐依、お前は一体全体何が目的で「龍也だつて言ってるでしょー！」……っ！
！」

「私は、あんたが目的なの。解る？あ、頭がダメだからわからないか」

「てめっ、佐依」

「何ならストレートに言っただけ。あんたの事が好きなのよ」
／／／

「……は？」

な、なんか、すごい幻聴が佐依から「現実よ」……そうれすか。
そうなんれすか。

「質問」

「どござ」

「何故俺なんだ？ロンだっているだろ。俺なんかよりずっといいし、

現にすごい数の女ひとがロンの事を…」

「私はあなたがいいと言ったの。解る？りあり〜？ロンは関係ないでしょ」

「だ、ただだよ…」

「確かに、ロンは異性から見てすごく魅力的だし、私だって好きよ」

「だろ？だった」「でもね」…？」

「私達、何年の付き合いだと思ってるの？小学校入学からよ。それから今までずっと一緒に過ごしてきたのよ。私を嘗めないで」

「……………」

それは俺だって知ってる。何せ張本人だから。佐依の人を見る目、そしてその行動力、何を取っても一級品。俺はずっと、佐依に引張られてここまで来たんだ。小さい頃からずっと一緒にいたから。

クラスも見事に全部一緒、宿泊合宿も、修学旅行も、なんかあるときは何時も佐依と一緒にだった。

俺は、腐れ縁からの幸運・偶然かと思っていた。しかし、佐依の考えは少し違かったらしい。

「クラスも、行事の班も、通学も、何だっけと一緒だった。だから、龍也が思うよりも印象に残った事はあったって、自負するわ」

「それなら、ロンとぼたんも一緒だったときだって「私はあなたの事を言っているの！」「！？」」

その時俺は、何を思ったのだろう。
目の前で、まずありえない事が起きていたのに。

佐依が泣いていた事に、俺は懐かしさを感じた。

驚きなんかより、ずっと。

……ああ、そう言う事か。俺が佐依の泣き顔を見るのが2回目だったからか。
思い出した。

それは小3の時、図工の授業だったときだ。内容は【愛鳥週間】のポスター。

そのとき、佐依はきつと“初めて”、失敗したときだ。その時まで、佐依は失敗知らずの超完璧小学生だった。

だけど、失敗した。常人には解らない。しかし、完璧主義者の佐依にとって、それは耐え難い程の悔しさだったのだろう。

今にも泣きそうな顔を伏せて、先生に「トイレに言ってくる」と告げた佐依は教室から出た。

その時、俺はそれが嘘だと気づいた。今まで一回も授業を抜けた事が無かったっからだ。

「おれも」と言っつて先生から許可を取って教室から出てると、その死角ですすり泣きしている佐依を見つけた。

「どうしたんだ？」

「……ぼすたー、失敗しちゃった」

「……あれが、失敗？十分素敵だと思うけど」「龍くんには解らないよ」

……」

今の俺ならなんか言い返してたかもしれないけど、そのときの俺は何も言えなかった。

佐依の事を過大評価と言ったら悪いが、雲上の人だとその時は考えていたからだろう。

でも、俺はほっぽって置けなかった。

だから、体が勝手に動き出した。

「!!!?」 / / / /

佐依を抱きしめていた。

「別にいいじゃん、失敗したって」

「へ?」

「失敗すれば、もっと上手になれるって、父さんから聞いた。兎に角失敗しかしてない俺にとっては嬉しかった。また頑張つて、いっぱいチャレンジすれば、出来るようになるんだったら、いっぱいチャレンジして出来るようになった方がいいかな!」

その後立って、

「満足できないなら、もっとかいやるうぜ!」

そう言っててをさしだし、

「うん!」

佐依はその手を取った。

そして今、似たり寄ったりな感じで再現された。

「佐依」

「なによ？」

「…悪かった」

「何よ今更」

「お前の心を踏みにじったなら、俺はそれを何らかの形で責任を取る」

「言ってる意味が」って言うのは建前で、佐依。俺はお前と向き合
ってやる。お前の心が完全に解るようになるまで」「……」

「俺はお前から目を離さない。絶対に」

「……龍也」「//////」

「佐依、俺と付き合ってくれ。これが俺の本音だ」

あの時と同じように、右手を差し出す。

「…うん！」//////

それに応えるように、佐依が手を掴む。

優しい光に包まれて……

side out

side???

その頃ロンは……

「……ナニガオキタ？」

とてつもなく動揺していた。
事の発端は龍也と分かれてからだ。

「あ

「どうしたの？」

「何か忘れ物？」

「ああ、わりいけど先戻っててくれるか？」

「しょーがないなー、ぼくに免じて許してあげよう」

「じゃあ、先に行ってるわ」

「ああ」

そう言ってロンは走って先程の大広間に向かったのだが……

「……どこどこ？」

道を間違えて見ず知らずの部屋の前に来てしまった。

「何所で間違えたかな？あってるはずだけど……って、こんな部屋あったか？見た事無いぞこんな部屋」

そう、方向音痴でないロンが、何度も来ている筈の屋敷なのに迷ってしまふ事自体がおかしい。

用心深いほうではあるが、その部屋への好奇心から本来の用事を忘れてしまった。

「……ゴクツ……」

生唾を飲み込んで、ドアノブに手を掛ける。

ギィ……

と木の軋む音と共にドアを開けると

「何だ……この部屋……」

青く輝く鉱石に囲まれた部屋があった。

それは、ゲヴァイテス・クロイツと同じ鉱石で創られた正方形の部屋
「ラグナイトの…部屋」

一歩踏み出した瞬間、ロンは変わった。髪が銀の長髪に、目が深紅に輝き、青い魔力に包まれて。

「なんだ？この部屋。気持ち悪いほどに魔力と力が漲って来る」

そして、それに反応するように【聖十字】が強く輝きだす。

「なっ……!?!?」

強い光に目が眩み、思わず目を閉じる。

そして、数秒後。光が弱まると共に目を開けると、

いつの間にか騎士甲冑を纏っており、部屋の天井に白球が浮かんでいた。

「……………ナニガオキタ？」

そして冒頭に戻る。

「騎士、名はロンメル・ヴェストールでよいな？」

「……………」

「騎士？どうなさ」「白いのがしゃべったあああああー」

「……………」お、落ちて着け騎士よ……………」

更にヴェストールが暴走する。

「何何何!!!?火の玉かなんか!?それとも天へのお迎え!?!はたまた地へのお迎え!?!俺まだ死んでないよ!?!?てかなんで俺の名前しってるの!?!これなんてホラー!?!?」

「落ち着け騎士よ!我はそのようなものではない」

「じゃあなんだよ!?!」

「我が名は【エルス】。【聖騎士】、汝の遣いである」

「俺の……遣い……」

「そうだ。我は騎士に用があつてきた」

「俺に用、とは?」

何とか落ち着いてきたのか冷静になって聞く。

「騎士はその【使命】を果たすときが来た」

「【使命】…?」

「騎士の【使命】は、【蒼き民と聖者の鎮圧】である」

「ちょっと待て。【蒼き民と聖者の鎮圧】って一体…」

「待たずして解る。その【使命】の意味が、その重さが」

「話を勝手に「時間が無いのだ。察してくれ」…解った」

ヴェストールはなんとも煮え切らない心持でエルスの話に耳を傾ける

「それと共に、騎士に伝える事がある」

「それは？」

「まず一つ。騎士に預けるものがある」

「預けたいもの？」

「それは、これだ」

その言葉の後に真正面の壁に白い光に塗りつぶされた円が出来、そこから誰か出てきた。

「誰だ……？」

「騎士の守護者、【聖剣】ゲヴァイテス・クロイツの管制人格」

「名をリイン・フォースと申します、主」

「！……！」

その姿と名前に絶句した。姿形はリイン・フォース？を大きく成長させたもの。そして名は、所属部隊の部隊長「八神はやて」の言っていた【見えない家族】と同じなのだから。

「そしてもう一つ」

その声に呼び戻されたヴェストールはエルスの次の言葉を待つ。

「騎士は本当の世界を見る事になる。その身をもって」

そう言つてエルスは消え、部屋は元の状態に戻った。

但し、ロンの耳にその一言が入っているかどうかは、ロンの頭の処理能力しただいが。ん

「主」

「へ？」

リイン・フォースに呼ばれ、未だに頭の整理のつかないヴェストールは腑抜けた返事をする。

「“へ？”ではありません。しっかりして下さい」

「う、ごめんリインぶふおお！！」／／／／／

リイン・フォースを見た瞬間、ヴェストールは後ろにすっ飛んだ。真つ赤な鉄砲水が流れて。

「主！大丈夫ですか！？」

それに慌てて近づくが、

「ぶごおお！！！！」／／／／／

更に勢い良く濁流が流れる。但し真つ赤。

「主！お気をしっかり！あるじ！！！」 // // //

そしてリイン・フォースは気づいた。自分がどうなっているか。
【永久の墓場】のまんま。つまり何も身に纏っていないままだ。

「~~~~~ツ！！！！主の変態！！！！」 // // // //

「理不尽だあああああ！！！」

そしてヴェストールはKOされた。リイン・フォースの強烈な右ア
ツパーカットで。

side out

第14話 過去と現在（いま）と悲しみと？（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

2 《後書きトークショー！》

ヴァ《作者のおかげで2ヶ月ぶりの後書きトークショー》

シ《今回は第14話をお送りしました》

ロ「おい作者、これがどう言つかとかわかて！！」

作者：首吊り

ぼ「あちゃ〜…こりやダメだ」

佐「南無南無」

龍「来世で人になるなよ〜！」

おい龍也てめえ今から何所かに行って来いやああ！

スパアアン！！ 遠くへ吹っ飛んだ

全『おお〜見事に復活！！』

つてな訳で、2ヶ月も放置してすいませんでした！
作者のe a g l eです！

シ《ところで作者》

はい？

シ《私とヴァールが人間から戻っているのは一体……》

あれはゲストさんが来てる時だけだから。

ヴァ《そうだったんですか…残念です》

でもまあ、また機会あると思うよ。ネタバレだけど、次の次の番外編で復活だと思うから。

ロ「そこまで行ける自身は？」

…あんなない。

佐「じゃあダメじゃない」

うぐう…

ぼ「そしてそして！龍也と佐依が見事にリア充とは、隅に置けないなあこのこの〜」

佐「そ、それはどうでもいいでしょ……！！」／／／／／／／／

ツンデレツンデレ。

佐「デレて無いわよ……！！」／／／／／

龍也と結婚！龍也と結婚！

佐「うっさい作者！！！」

ぐぼおお！！ 佐依の強烈回し蹴り

ロ・ぼ『良く飛ぶ良く飛ぶ』

が、しかし身代わり。

佐「ふざけんなっ！！！」

ぼ「そしてロンは……後で私とOHANASIだよ（黒ハート）」

ロ「誰か助けて！！！」

作・佐・シ・ヴァ『むりむり』（棒）

ロ「裏切り者おおおおお……」

さて、ロンの冥福を祈りつつ、次回予告行ってみよう！
シルフ、お願い！

シ《了解

無事結ばれた佐依と龍也。その裏でリイン・フォースという力強い味方を得たヴェストール。
そして、それぞれの再開と共に動き出す闇。

次回、リリカルなのはSTRIKERS〜ヴァキュリアの血を引く者〜第15話　そしてセカイは動き出す

月光に照らされし白銀の翼は……」

番外編アンケートはこちら

? はやてとの出会い

? 海鳴での高校生活

? 幼少期の思い出

? その他　リクエストもあります

ヴァ《お待ちしてます!!》

第15話 そしてセカイは動き出す(前書き)

更新遅れてすいません。

第15話です

第15話 そしてセカイは動き出す

side???

第97管理外世界【地球】・スイス

現地時間8:50

「ロ〜ン!!」

「何所にいるにるんや〜!!」

「朝ごはんできたよ〜!!」

その日の朝も騒がしく始まった。

先日に続いてまたヴェストールは姿を消した。

「ヴェストールさ〜ん!!…ン〜…何所に行ったのかな〜?」

「兎に角今は探すわよ。今日もこの後忙しいんだから」

「そうですね」

今日もヴェストール探しに借り出されたフォワードメンバーは、

4人揃って仲良く「ウーリーを探せ」ならぬ「ヴェストールを探せ」をしていた。

4人が固まっている理由は

「もし迷えば1ヶ月は覚悟しといて下さいね」

と言う、リスティアの何とも脅迫じみた注意事項に従った為だ。

「ヴェストールさー……あれは何でしょうか？」

キャロが広間の一角に白いシーツらしき布を見つけた。

「これ、シーツよね？」

「何でこんなところに……」

スバルがそのシーツを広げると

「ん〜……」

「すう……すう……」

銀髪の長い髪に整った顔立ち、透き通るような白い肌に滑らかな肢体。

極めつけは巨乳であり、その上その人が全裸で、私服姿のヴェストールと密着して寝ていたと言う事。

『きゃあああああああ！！／うわあああああああ！！』
／／／／／／／／

「どうしたですか!?!」

「何があった!?!」

「って……」

そこにラインとシグナム、ヴィータがそれを見た。

『きゃあああああああ！！／＼おおおおおおお！！』
／／／／／／／／

4人の似の前となった。

「つて、リイン・フォース!？」

何時からいたか解らないシャルがその正体を見破った。
別に変装してた訳じゃなくても。

「んむう……なんだ朝っぱらから五月蠅いなあ……もお少し寝かせて
y『絶対に寝るな!!むしろ目を覚まして今の状況を見る!!』……
いまのじょうきょう……ん?」

そして気づく。今のヴェストールがどのような状況(と言う名の修
羅場)なのか。

「……………」

『……………』

「すう……すう……」

ヴェストール：リイン・フォースの格好と今名自分を確認。滝汗。

周囲の8人：冷やかな目と哀想な人を見る目とティアナのリイ
ン・フォースに対する明らかな嫉妬と殺意の視線。

リイン・フォース：のんきな寝息。

「今日が執行日なんだ……」

「異常に執行までの手順と時間が省かれましたよ!?!」

「ああ…これで俺は世界からいなくな」主は死んではいけません!?!」「!?!?どこだ!」「ここですよ!」「……ん?」

ヴェストールの背中にフニヨンとした柔っこい触感、耳に女性特有の甘い息。

何時の間にか起きていたリイン・フォースがヴェストールを抱き寄せていた。

『リイン・フォース!?!?!?』

そして数多くの絶叫が聞こえた所に来た管理局のエース3人と共にヴォルケンスとリイン、ヴェストールが声を上げた。

「リイン……」

「フォース?」

初めて聞く名に戸惑うライティングの2人。

「許さない赦さないゆるさないユルサナイ……」

「ティア落ち着いて〜!?!?!」

1名暴走、1名決壊寸前の堤防を演じているスターズの2人。

「主は私のものです!?!他の誰にも渡しません!?!」

side out

sideライン・フォース

「理不尽だあああああ！！！」

ドスン！

決まりました……。

これなら世界を狙えますね。

「何を…呟いて、るんだ？」

「主は寝てください！！」 / / / / / / / / / / /

「ぶべらっ！！！」

ボタン…

やっと寝てくれました。

にしても、主は酷いです。

私の、その…ら、裸体を見て興奮するなんて……主は獣です。人間

の恥です！

そう考えつつ、私はゲヴァイテス・クロイツの中に入っていった（
.....）。

ゲヴァイテス・クロイツの中は、私と主が初めて対面したあの部屋と同じもの。

但し、あの部屋に無かったち小さい箱が一つだけあった。

もって見ると、大きさは掌と同じ位、見た目より少し軽い、蒼い箱。その小さな箱を元に戻そうとしたが、如何せん、そうするには些か興味が惹かれ過ぎていた。

「.....ほんの少しだけ...」

その箱を開くと、

「？」

白い球体が入っていた。

青白く光り輝くその球を取り出すと、

「！これは...主.....！？」

幼く、まだその面影を今に残したままの可愛らしい主が見えた。

「か、可愛い.....」 / / / / /

しかし、それを見る事が出来たのは、ほんの数分だった。

そこは動物園。

主と共にその両親と思われる男女と主と同じくらいの幼女、その子の兄と思われる男。
みんな揃ってそこに着いた。

筈だった。

一瞬の眩い閃光の後に見えたのは、何一つ残っていない、ただのクレーターとその周りに広がる残骸。

その上空に、狂気の手を浮かべる男。

奴が、娯楽の場を屍の谷に作り変えた。

そして、空気が変わった(.....)。

幼い主は絶望に溺れ、怒りに振り回され、そこにもう一つ、屍を作り上げた。

その数分後、意外な人物がその表面に現れた。

私の世話になった人のうちの2人、クロノ・ハラウンとリンディ・

ハラウンその人だった。

勿論、話している内容も聞こえる。

《ねえ、君の名前は？》

《「ロンメル・ヴェストール」》

《「そう、では、ロン君。私達と一緒に暮らしてみない？》

《へっ？》

《確かに…言い案かもしれないな…》

《えっ？》

《私達があなたを家族として迎え入れたいの》

《で、でも…》

《我慢、しなくてもいいの。泣きたい時に泣けばいいし、笑いたい時に笑えばいいのよ。あなたは我慢しすぎ。もう少し、甘えてもいいのよ》

《…いいんですか？ ぼくがいても…》

《ええ》

《勿論だ》

《…ありがとうございます》

その後の様子も見ることが出来た。

ただ、主はあの殺戮から、それ以前の笑みを浮かべていなかった。心のそこから笑っていたとしても、それはどう見ても、見劣りするほどのさびしい笑みだった。

そして、主はまた悲しみを背負う事になった。

それは時空航行艦の中だった。でも、ただの航行艦ではない。撃沈寸前の航行艦だ。

所々から爆発による火災が艦全体に広がって、艦内は火の海。その背後から、それよりも一回り小さな航行艦が何十ものミサイルを撃ち放っていた。

そしてそこに、主はいた。

《おい！早く奴らを落とせ！！》

《で、ですが、戦力が余りにも《いいから落とせ！！》…はい》

主は通信をしながら、敵に向かって砲撃を放っていた。

但し、主は既にポロポロで魔力も枯渇寸前の最悪な状況かで、幾つもの砲撃を放っていた。

そして、艦長らしき人物とその他数名は脱出艇で艦から離脱しようとしていた。

しかし……

ドオオオン！！

《っ！艦長！！》

脱出艇は敵のミサイルによって爆発した。

《くそお…くっそおおがああああ！！》

《おい坊主！！》

《！ハインリツヒさん！？》

悔しさに塗れてやけくそに砲撃を放とうとした瞬間、1人の男性が主の側に来た。

頭から血を流し、彼もまた、最悪な状況にあった。

《ハインリツンさん！なんでまだ…》

《それはおまえもだ！何故まだ艦内にいるんだ！？》

《何故って…俺はまだ《もう十分やった！もう何もしなくてもいい
！！》…》

《早く、ここから脱出しろ》

《ですが…もう脱出艇は！》

《心配すんな。まだ脱出できる》

《どっちゃってですか！？》

《こっちゃって、さ》

すると、魔法陣が主を取り囲み、

《元気でな、坊主》

《ハインリツヒさああん！！》

そして……

白い閃光と共に、時空航行艦が爆散。攻撃をしていた航行艦は離脱した。

ハインリツヒと呼ばれていた魔導師は、主を救って自らの命を航行艦と共にした。

私が主のもとへ来た理由。

それは、主と、主の大切なものをを守る為に。

そして、主のかけがえの無い存在になる為に。
だから私は決めた。

「主の笑みを、取り戻す為に……」

球体を箱にしまおうとしたその時、

「!!!!!!?」

球体は私の中に入っていった。

不思議と痛みは無く、すんなりと入っていった。
しかし、それだけでは終わらなかった。

瞬時に新たなバリアジャケットが構築された。

薄い青を基調としたノースリーブのワンピース。

デザインは前の物とほぼ一緒だが、ラインは銀、そして、銀の弓を
模したペンダントが首にかけられた。

「これが…新しいバリアジャケット……」

これで大方、主を守る為の準備が整った。

あとは主とのユニゾンだけなのだが……

ゲヴァイテス・クロイツから出た私が目にしたのは、

「……………」

私がKOさせてしまった主。

これではユニゾンがどうなのかすら解らない。

その為にも、まずは起こさなくてはいけないのだが、

「……………」

「……………」 / / / / / / / /

その純粹な顔に起こす事すら勿体無くなった。

その顔は正に、幼い頃の面影を残した、「天使の寝顔」とも言うべきものだった。

「……………」はう」 / / / / / / / /

その愛おしさに耐え切れず、ついに行動に移した。

まずこのままでは寒い為、何かかけるものが必要と考えた。

その為の布団を探したが見つからず、しかたなく隣の部屋に何故かあったシーツで代用。

ただ、

「……………」これでも寒いか……………」

かなり寒かった。

どうすればいいか考えていたそんな時、主はやてといた時にこんな噂を耳にした。

「ふとんより、人肌のほうが温かい」

と。

ライン・フォースの記憶は変なところで一部欠損、補完・変換しています。

「……………」 / / / / / / / /

は、恥ずかしいものを思い出してしまった。／／／／／／
しかし、主をこのままにしておくのは私のプライドが許さない。

「……………」

迷った末に、

スルリ……

「失礼します、主」／／／／／／／

噂を信じる事にした。

「……………ほう…暖かい」／／／／／／／

身を感じる暖かさが気持ちいい。

しかし、私の心に感じた暖かさは、その比べ物にならない程に熱
かった。

「主……………」／／／／／

その心の高ぶりを抑えられない筈なのに、私はすんなりと眠る事が
出来た。

主の体温をそばに感じたまま。

「…主……………ロンメル……………」

……………

その数時間後。

「……さて、皆さん。反省は？」

『十二分に致しました!!』

私も含めて主に説教されていた。

「よろしいでしょう。それじゃあ、早速出発しようかと思いますがその前に」

主が私に手招きする。

今の私はちゃんと、あの真新しいバリアジャケットに身を包んでい

る。

私とて、ちゃんとした理由があつてのあれだ。

痴女かと聞かれたら、聞いてきた者の首を210。まで傾けてやる

という素晴らしい返答が期待できるぞ。

「朝の件で騒ぎの渦中にいたため、知らない人は確実にいないと思

うけど、一応紹介しときます」

「元【夜天の書】管制人格改め、現【ゲヴァイテス・クロイツ】管制人格で主ロンメルのパトロール、ライン・フォースだ。よろしく頼む。そして、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、最後に、主はやてにヴォルケンリッターの騎士たち、ただいま戻りました」

「うん」

「おかえり」

「よお帰ってきたなあ、リイン・フォース」

「おう」

「ああ」

10年の月日はここまで人の姿を変えるものか……

主はやても、高町も、フェイトも…立派になったものだ。

「さてと、再開の喜びに浸っている途中で誠に申し訳ないんですが、時間が無いんで直ぐに行きますよ」

「うん／ああ／おう／はい！」

今から向かう場所。それは、主ロンメルの人生を変えたあの（・・）場所。

545

side out

side???

時空の狭間に漂う、流線型が横に3つくっついたようなシルエット。時空航行艦のそれには20名近くの男女が搭乗していた。

《まもなく目的地に到着いたします》

「ええ、解ってる」

とある1室に響く女性特有の艶のある高い声。

「今日のお目当ては何でしたっけ？【姫】」

「彼ら（・・・）と例のあれ（・・・）よ」

男性の声に反応した【姫】と呼ばれた女性はウィンドウに映る複数の映像を注視する。
そこには、

ヴェストール達数人と、青白く輝く馬鹿でかい槍が映っていた。

「適正値は……まあまあと言ったところか」

「後は彼がどれだけ力を保持しているか、ね」

ウィンドウの一部を大きく映す。

クルス・レイモンド

ヴァルキュリアの聖鎗

「さっ、スムーズにね」

明かりの当たらない影に言っ。

「ハインリッヒ」

「ンなもん、朝飯前だ」

にい、と口元を歪めてニヒルに笑う。

「会いたかつたぜえ、坊主」

s i d e o u t

第15話 そしてセカイは動き出す（後書き）

シ《シルフと》

ヴァ《ヴァールの》

2機『後書きトークショー！』

ヴァ《何時ものように始まって、例の如く駄弁るだけの後書きトークショー》

シ《今回は第15話をお送りしました》

ロ「この後書きは、シリアスだろうが何だろうが関係なく、笑いを取るうとする駄作者の提供でお送りします」

番組の冒頭なのかそれ？

シ《生憎、これを番組にしたら視聴者が暴動起こしますよ》

そらそうか。と言うわけで作者のe a g e eです。

ロ「ロンメル・ヴェストールだ」

ヴァ《何時もと展開が頭から違う！？》

シ《そういう気分なだけです》

ロ「そういう気分なだけだ」

リ? 「そういう気分なだけ」

そういう気分なんだよ。

ヴァ 《何で同じ事繰り返すだけ!? そして何時の間にリイン・フォースさんがいらっしやるの!?!?》

リ? 「作者が主のデバイス出てるからと言われたからだ」

ヴァ 《なるほどです〜》

ヴァール、ツツコミに切れがあったな。

ヴァ 《そ、そうですか?》

ロ 「ああ、完璧だった」

ヴァ 《えへへ〜、褒められると照れるな〜》 / / / / /

作・ロ 『だから今後の突っ込みは君に任せた』

ヴァ 《押し付けられた〜!?!?》

そんな訳でヴァールの新ツツコミ役就任を祝して、次回予告をティアナ・ランスター2等陸士にお任せしよう。

ティアナ

「何で私なんですか!?!?」

ロ 「小さいことは気にするな」

ティ「はい！ヴェストールさん！」／／／／／

ヴァ《私のツッコミスルーされたあああゝ・・・》

ティアナはヴェストールに従順だねえ…どうやって調くん！教育したんだ？

ロ「今不穏な事聞かれた気がする！？」

ティ「ヴェストールが第2の人生を歩みだした場所。全ての根源を作り出した場所。両親の眠る場所。そして、初恋の相手の眠る場所。幾重もの悲しみを経て、10年ぶりの再会。過去を生きだ証に、今を生きる為に。」

彼は再び、舞い戻る。

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerSゝヴァルキュリアの血を引く者ゝ第16話 再会

人の生きるこの世界に……」

現在、番外編アンケート実施中です。

以下のものからお選びください。

？はやてとの出会い

？海鳴での高校生活

? 幼少期の思い出

? その他 リクエストもありです

リ?」お待ちしています」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4694r/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～ヴァルキュリアの血を引く者～

2011年9月29日20時22分発行